

日本キリスト改革派教会 大会教育委員会

# 教会学校 教案誌



church school curriculum



主を喜び祝うことこそ、  
あなたたちの力の源である。

ネヘミヤ記8章10節

vol. **70**  
2018年7~9月

「救済史」  
に基づく二年サイクル 第2年

- 【巻頭説教】「今の時代を何にたとえたらよいか」…………… 川栄智章  
キリスト教と公教育「教室の窓から」…………… 新井ちぎり  
執事職について(2)…………… 相馬伸朗  
長老職について(2)…………… 吉岡契典  
【日曜学校・教会学校訪問】仙台カナン教会のご紹介

## 2018年7～9月カリキュラム（第70号）

—救済史に基づく2年サイクル 第1年—

月日 教会暦・行事	主 題	聖書箇所	暗唱聖句
	単元の目標		
7月1日	敵を愛せ	ルカ6：27－38	ルカ5：36
	神の国は父なる神の王国である。憐み深い父に赦された者として生きよう。		
7月8日	確かな土台	ルカ6：46－49	ヤコブ1：22
	神の国の福音は信じて行わなければ空しい。岩なるキリストを土台として生きよう。		
7月15日	百人隊長の僕の癒し	ルカ7：1－10	イザヤ55：11
	神の国は神の言葉の権威、力によって伸展する。御言葉に聴き従おう。		
7月22日	やもめの息子の復活	ルカ7：11－17	詩編23：4
	神の国と王なるイエスは死の力を打倒する。神の力により頼んで生きよう。		
7月29日	婦人の癒しと奉仕	ルカ7：36－8：3	1ヨハネ3：16
	神の国は罪赦された者の愛に基づいて伸展する。安心して主と共に歩もう。		
8月5日	レギオンを追い出す	ルカ8：26－39	ルカ8：39
	神の国は悪霊支配を打破するゆえ、世から圧迫される。主と共に恐れず証ししよう。		
8月12日	平和を実現する	ゼカリヤ9：9,10	イザヤ2：4
	神の国は神の平和による統治。世にあって平和の砦である教会は平和を造る群れ。		
8月19日	主の変貌	ルカ9：28－36	フィリピ2：6－9
	栄光の王イエスのへりくだりのゆえに救われて十字架を担う教会もやがて栄光に輝く。		
8月26日	弟子の覚悟	ルカ9：51－62	ルカ9：62
	神の国に招かれた者は、父の愛と恵みの支配を信じる生き方へと整えられる。		
9月2日	72人を派遣する	ルカ10：1－20	マタイ10：2
	神の国は羊飼いである主と共に、遣わされた小羊たちの宣教によって伸展する。		
9月9日	帰還と再建	エズラ3：1－13	ハガイ2：9
	神の民は礼拝によって整えられ、生き返る。礼拝の伝統に生きよう。		
9月16日	律法の朗読	ネヘミヤ8：1－12	ネヘミヤ8：10
	神の民の礼拝は神の言葉によって成り立つ。生ける神の声を共に聴こう。		
9月23日	王妃エステル	エステル2：5－23	ガラテヤ5：22,23
	神は民を世の働きに配置し救いを実現なさる。置かれたところで誠実に生きよう。		
9月30日	エステルの覚悟	エステル4：1－17	フィリピ4：6
	神の御心に反抗して成功した者はない。神の側に立ち続ける幸いに生きよう。		

も く じ

2018年7・8・9月カリキュラム

まえがき「荒廃した教会を残さないために」	西堀 元	4
巻頭説教「今の時代を何にたとえたらよいか」	川栄 智章	5
キリスト教と公教育「教室の窓から」	新井ちぎり	9
教会学校訪問「仙台カナン教会」	仙台カナン教会日曜学校教師会	13
他教派における教会学校		
「神さまと共に歩む幸い」	朝岡 勝	16
信仰告白・受洗の証「教会の一枝として」	小林 悠香	20
執事職について（2）	相馬 伸郎	21
長老職について（2）	吉岡 契典	24

聖書黙想・説教展開例・分級展開例

7月1日	30
7月8日	35
7月15日	40
7月22日	45
7月29日	50
8月5日	55
8月12日	60
8月19日	65
8月26日	70
9月2日	75
9月9日	80
9月16日	85
9月23日	90
9月30日	95

聖句カード	100
次号カリキュラム（2018年10・11・12月）	102
「子どもと親のカテキズム」案内	103
教案誌自由募金案内	104
執筆者よりひとこと・あとがき	105

まえがき

## 荒廃した教会を残さないために

西 堀 元

昨年の春、東京大学の入学式で総長が新入生たちに向かって大学で次のことに気をつけ学んで欲しいと言っておられます。第一に「自ら原理に立ち戻って考える力」。学問の細分化と情報増加に流されないため。第二は「忍耐強く考える力」。天才的な発見といえどもほとんどはたゆまない努力の産物だから。第三は「自ら新しい発想を生み出す力」。これからAIなどに仕事置き換えられたとしてもパソコンに分かるのは過去に基づくこと、人間には過去を超える発想力がある。これら基本の3つに加えて、「多様性を活力とする協同」「自らを相対化できる広い視野」。グローバル化の進むこれからの時代には世界の中で自分の立ち位置を自分で確認でき、多様な人々と交わり協同する人材が必要だと語っておられます。

素晴らしい提案だと思う一方、逆に考えるならいわゆる天下の東大生でもこういった力が不足しているという指摘ではないでしょうか。

話は変わりますが、国会は森友問題により政権の土台が問われています。現在(2018年4月)、国会では行政文書の手続きが問題となっていますが、問題の本質はそこではないと思うのです。戦前の教育を肯定し、アジア侵略を下支えした思想である教育勅語を教えるような学校を開校しようとしていたこと。ここに本当の恐ろしさがあります。さらにそれを政権の中心が認めていたこと、また地方には支える草の根運動もあることです。

つまり一方でグローバル化推進の教育が

あり、国際的に通用する人材育成を目指す外へのベクトル。他方、世界から身を引き離し、自国に閉じこもろうとする民族主義的な内向きの教育の方向がある。ただ内向きのベクトルが現在、とても強いと感じます。この方向が進み、これ以上排外的にならないことを心から願います。

さて、明治以来、日本は学校教育を通じて理想の日本人をつくろうとしてきました。国のために命を惜しまない兵隊、戦後では企業戦士、現在はグローバル人材。私たちキリスト者ははたして国の示す理想の日本人像にきちんと向き合ってきたでしょうか。

残念ですが多くの場合、キリスト者の父母は国が示す理想像を無批判に受け入れ迎合し、国が良いというものを良いとして子供たちに与えてしまったのではないのでしょうか。信仰による決断をし、あえて少数者にとどまることを恐れたのではないのでしょうか。十戒の第五戒「父母を敬え」によるなら子供を教える権利は信仰をもつ親たちにあるのです。そういった自覚がとても弱かったかもしれません。

「主を畏れることは知恵の初め」(箴言1:7)。どれほど知恵や知識があっても役に立たない人がいる。一生懸命、立派な家を建てても一気に壊れる。私たちは人ではなく、神を畏れて生きる。この世の財産・名誉でなく神に土台を置いて生きる。荒廃した教会を残さないために、それぞれの教会に託された教える務めはとても大切だと信じます。

(熊本伝道所)

## 巻頭説教

## 今の時代を何にたとえたらよいか

マタイによる福音書11章7～19節

川 栄 智 章

イエスさまは洗礼者ヨハネに対して、「わたしにつまずかない人は幸いである」と勧められました。恐らくイエスさまに一度もつまずかない人は一人もいないでしょう。私たちはイエスさまにつまずくことで始めて信仰の原点に立つことが許されるのかもしれないかもしれません。

この箇所ではヨハネに対するイエスさまの評価が書かれていますが、ここで注意したいことは、ヨハネへの評価と言っても、ヨハネ個人に対する信仰の評価ではなく、神の救済の計画におけるヨハネの役割の重要性とか、ヨハネの置かれている立場の重要性について語られているということです。ですから、7節から19節まで一気に語られるイエスさまのみ言葉の主題は、洗礼者ヨハネの信仰についてではなく、ヨハネとイエスさまに対して冷淡であった今の時代の不信仰について語られているのです。思えば、洗礼者ヨハネという人物がどのような人物であったかと言うと、最初に「悔い改めなさい、神の国は近づいた」と宣言した人でありました。ヨハネから洗礼を受けてイエスさまが公的活動を始める際にもやはり「悔い改めなさい、神の国は近づいた」と、同じように宣言されました。ヨハネは、メシアの先駆的な働きをしていたのです。

このように神の国が到来し、旧約から新約に移行する中であって、この時代は「救

い主の先駆者」と、「救い主」を果たして正しく受け入れることが出来たのだろうか？ と問い掛けているのです。イエスさまの問いかけを見ていきましょう。

「あなたがたは、何を見に荒れ野へ行ったのですか？ 風にそよぐ葦ですか。」

風によって揺れ動く葦ならわざわざ荒れ野まで行かなくともガリラヤ湖に茂っています。葦を見に来たのではないとすると、荒れ野に何を見に行っただけなのでしょう。

「しなやかな服を着た人ですか？ しなやかな服を着た人なら荒れ野ではなく王宮にいますね。」

洗礼者ヨハネをして、揺れ動く葦とは、何とも似つかない、ミスマッチなものです。揺れ動く葦とは優柔不断を象徴しているかのように見えるからです。もしかしたら葦とは、具体的には、ヘロデ・アンティパスを暗示しているのかもしれない。というのは、当時のヘロデアンティパスの名が刻まれているコインには、葦が描かれているからです。それではいったい、荒れ野に何を見に行っただけでしょうか。そうです。ラクダの毛皮を来て、腰に皮ベルトを巻き、堅い意志をもって禁欲生活をしている、預言者を見に行っただけなのです。それも普通の預言者ではありません。預言者以上の者、つまり、預言者の中の預言者を見に行っただけ

です。

これは先ほど言いましたように、神の救済の計画におけるヨハネの役割の重要性について語られています。洗礼者ヨハネとは、旧約聖書の中で預言されている「再び現れるであろうエリヤ」でした。マラキ書3章を引用しながらそのことを暗示しています。

10 『見よ、わたしはあなたより先に使者を遣わし、／あなたの前に道を準備させよう』／と書いてあるのは、この人のことだ。

11a はっきり言っておく。およそ女から生まれた者のうち、洗礼者ヨハネより偉大な者は現れなかった。

マラキ書 3:1 見よ、わたしは使者を送る。彼はわが前に道を備える。あなたたちが待望している主は／突如、その聖所に来られる。あなたたちが喜びとしている契約の使者／見よ、彼が来る、と万軍の主は言われる。

マラキ書 3:23 見よ、わたしは／大いなる恐るべき主の日が来る前に／預言者エリヤをあなたたちに遣わす。

このように、旧約に預言されている、メシアの為に道備えするためのエリヤとは、洗礼者ヨハネであると暗示しています。さらに11a節で、イエスさまは洗礼者ヨハネを、旧約から新約という過渡期にあって、時代の転換点における大変重要な人物として描いているのです。そのことは、確かにヨハネが過去の秩序の中で、頂点に位置する預言者であると言えるのですが、

同時に昔の秩序に属している者であるということも言える訳です。ですから、11節の後半部分にありますように「しかし、天の国で最も小さな者でも、彼よりは偉大である。」というみ言葉は、ヨハネの個人的な偉大さについて比較しているのではなく、ヨハネの属する時代と新約の聖徒の属する時代についての偉大さを比較して言っているのです。つまり、新約時代は旧約時代とは比較することも出来ないほど偉大である、旧約は、新約と比較するときに、全くその光を失うほどであるということです。

続く12節は、解釈が分かれる大変難しい箇所であります。

12 彼が活動し始めたときから今に至るまで、天の国は力づくで襲われており、激しく襲う者がそれを奪い取ろうとしている。

この箇所を多くの神学者たちは、肯定的に解釈して「ヨハネが活動を始めたときから、新約の聖徒たちが天国に襲い掛かるように侵入している」としますが、一方で一部の神学者たちは否定的に解釈して「ヨハネが活動し始めたときから、神の国は迫害者から暴行にあい、暴力的である者が略奪している」とします。この段落は文脈的に、イエスさまがこの時代の不信仰について説明しているのですから、否定的に解釈する方が私は正しいと思います。つまり、神の国が到来し、旧約の一つ一つの預言が成就する時代を迎え、それほど偉大であり、特権的な時代であるにもかかわらず、神の国は迫害する者から暴力を受けて、略奪されているということです。これはいったいどういうことでしょうか。

13 すべての預言者と律法が預言したのは、ヨハネの時までである。

14 あなたがたが認めようとすれば分かることだが、実は、彼は現れるはずのエリヤである。

ここにおいて、イエスさまは決定的な真理を語られています。それは、ヨハネ自身「自分はエリヤではない」と告白していましたが（ヨハネ1：21）、実はヨハネこそ現れるはずのエリヤであると断言されているのです。当時のユダヤ人は、終わりの日に「預言者エリヤ」が現れ、メシアの道ぞなえをするということを誰もが知っていました（ヨハネ1：21）。そして、今、牢に閉じ込められている洗礼者ヨハネこそ、実はその現れるはずのエリヤであるということです。

「預言者と律法が預言したのは、ヨハネの時まで」ということは言い換えれば、古い時代とは、メシアに対する預言と約束の時代であり、新しい時代とはメシアに対する成就の時代ということになります。つまり神の国が到来して、救い主の約束が成就した新約の時代というのは、旧約の時代が光を失うほどに偉大であり、特権的であるということです。そのような恵みの時代を迎えることになったということです。そして、時代の転換点として洗礼者ヨハネは、メシアの先駆者、露払い人、来るべきエリヤとして大変重要人物であるということです。

皆さんは大相撲をご覧になられますでしょうか。相撲には「露払い」と「太刀持ち」という働きがありますが、露払いと太刀持ちは、横綱の力士に仕えながら、横綱の左右に付き添っています。彼らは横綱ほ

どに目立つポジションではありませんが、相撲界の王様としての横綱が土俵入りするにあたり、先んじて露払いをし、太刀をもって仕えているのです。王の王であるキリストの露払いは、洗礼者ヨハネということになります。彼は今、いったいどこにいますでしょうか。牢の中です。これは考えられないことなのです。なぜ栄光の王の先駆者が今、牢の中に閉じ込められているのでしょうか。そして、後でさらに大きな謎として迫ってきますが、なぜ王の露払い人が斬首され、栄光の王が十字架によって処刑されなければならないのでしょうか。

洗礼者ヨハネは、結局、旧約の預言者たちと同じように人間によって迫害され、殺されてしまいました。このことは、大変ショッキングなことです。このような不信仰な時代について、イエスさまは子どもたちの不満によって訴えています。

16 今の時代を何にたとえたらよいか。広場に座って、ほかの者にこう呼びかけている子供たちに似ている。

17 『笛を吹いたのに、／踊ってくれなかった。葬式の歌をうたったのに、／悲しんでくれなかった。』

子どもたちが笛を吹いたけれどもみんなは踊ってくれませんでした。それではということで、今度は葬式の歌を歌いましたが、みんなは悲しんでくれないということです。

最初に洗礼者ヨハネが禁欲的な姿で現れ、エリヤを彷彿させるかのようにラクダの毛皮を来て、腰に皮ベルトを巻いて、神の聖者のように現れたのに、人々は「あれは悪霊に取りつかれている」と言って拒否

しました。それではということで、今度は、キリストがあたかも罪人の友のように、飲み食いをして現れたら、人々は『見ろ、あれは大食漢で大酒飲みだ。徴税人や罪人の仲間だ』と言い「聖なる姿ではない」「メシアとは程遠い者だ」といって拒否するのです。結局、どのような姿で現れたとしても、この時代の不信仰な態度は、神に対して反逆するということです。神への反逆は何もファリサイ人、律法学者にとどまりません。イエスさまと共に生活を十二弟子たちでさえ、最終的にはイエスさまを神の子と認めて従い通すことはできませんでした。

人間は神の救いのご計画に正しく応答することはできなかつたということです。人間は救い主に対し正しく応答することも、救い主を正しく証しすることもできなかつたということです。いみじくもファリサイ人や律法学者たちが言ったように、「もし先祖の時代に生きていても、預言者の血を流す側にはつかなかつたであろう」と言いながらも、彼らの先祖と同じことしてしまうのです。神の国が到来したまさにその時に、人間は、預言者の中の預言者を殺害し、そして救い主を十字架に送ってしまったのです。このことが意味することは、人間の知性によっては、決してキリストを正しくお迎えすることはできないということ覚えなければならぬということです。

しかし、このように徹底的な不信仰な時代にあつても、イエスさまは神の知恵をもって働かれ、人々に癒しと救いをもたらし、知恵の正しさを証明されるのです。従つ

て救いに関しては、一度イエスさまにつまづき自分自身の徹底的な貧しさを知るまでは、誰もイエスさまを正しく受け入れることはできないという事になります。自分自身の全くの不信仰を知るまでは、イエス・キリストを信じることはできないということです。真の信仰とはそこから始まるのです。自分の知恵に頼り、神の呼びかけを無視するのか、或いは神の知恵によって神の呼びかけに答えさせていただき天の御国を味わうのか、その選択は自分自身がイエスさまを十字架にかけた張本人だということを認めた上で、初めてなしてゆくことができるということです。そして、もし信仰の選択をすることができたとしても、その選択の背後には、一度私たちがつまづき、自分の内の無力さと、自分の内の貧しさを思いめぐらすことができるようにして下さった天の神様の恵みと憐みがあつたことに気づかされるのです。

この時代の暗さ、そして私たち自身の弱さの中にあつて、時代の不信仰と私たち自身の貧しさを謙虚に受け入れるときに、初めて聖書のみ言葉は正しく聞き取ることができるようになるということです。私たちの内の不信仰と貧しさを認める時に初めて、神の知恵によってキリストをお迎えし、信仰の原点に立つことが許されることを覚えていきましょう。そしてイエスさまを受け入れることが出来た私たちは、不信仰な人々に対し、間違つても裁いたり高ぶることないように、神様が不信仰な人々にも働いてくださいますようお祈りしていきましょう。(せんげん台教会牧師)

## キリスト教と公教育

## 教室の窓から

新井ちぎり

キリスト者と公教育というテーマを与えられました。公立小学校と私立高校を経て、現在は私立小学校で勤務している中で、思うところを綴っていきたいと思います。

## 【初めの試練】

私が神奈川県地方公務員として、県央の比較的大規模な小学校に赴任したのは、1990年のことでした。

入学式前日の職員室で、私ともう一人の新任教員が教務主任に呼ばれました。墨で黒々と書き上げたばかりの模造紙——それは「君が代」の歌詞でした。「これを新入生に見えるように高く掲げてやって。」

もう一人男性教員もいたのですが、女性二人に命じられました。私は、教会の長老がキリスト者として靖国闘争をされていた勇姿を見て育ち、自分自身「日の丸・君が代」が戦時中に果たした役割を学んでいましたから、この任務は嫌でした。もう一人も、平和教育を受けていたので、できることなら引き受けたくなかったのです。しかし、赴任したての私たちには拒否する勇気がありませんでした。

「君が代斉唱」のかけ声に先立ち、新入生の前に進み出て模造紙を掲げました。ひらがなはまだ読めない前提で入学して来たはずの子どもたちが、まっすぐに歌詞を見つめて歌います。手本となるべく、自らも口を大きく開けて歌うよう求められていたのですが、無理でした。学校で教わること

を、そのまま子どもたちが吸収していく恐ろしさを感じ、足がすくむばかりでした。自席に戻った時に「ご苦労様」と声をかけられ、不覚にも涙ぐんでしまいました。改悪指導要領1年目の春のことです。翌年からは、公立の幼稚園児は「君が代」を習って来ているからということで、私たちに課せられた任務はそれきりになりました。

## 【繰り返される刷り込み】

私の赴任した地区の組合は、「日の丸・君が代」問題で争わないという方針でしたから、職員会議で討論することはありませんでした。私は公立小学校で勤務した25年間、儀式ごとに繰り返される「君が代（すぐに国歌と言いかえられるようになりました）斉唱」のたびごとに、起立はするけれど歌わない、というささやかな抵抗が続けてきました。一度だけ、体調の悪い児童の見守り役で職員席を離れていたのを幸いに、起立せず耳を塞いだことがあり、自分は立つだけでも嫌だったんだなと実感しました。来賓や保護者から見える席でしたから、クレームがあるかも知れないと、校長に事後報告をしましたが、何もなかったそうです。守られました。

日の丸の旗にアイロンをかけたり、まっすぐに掲揚したりという役回りもありましたが、それを無自覚に眺めてほしくなくて、担当クラスでは、日の丸に忌まわしい思いを今なお抱いている人たちの存在について

語るようにしていました。

しかし、そんな一部の抵抗では追いつかないほど、「日の丸・君が代」の刷り込みは進んでいます。義務教育の9年間だけでも入学・卒業式で18回、運動会（体育祭）でもという学校ではプラス9回繰り返されることにより、「国旗・国歌として当然」という意識が植えつけられていきます。さらにスポーツ表彰で勝利の感動とあいまって、プラス・イメージが増幅されるよう演出されてきました。

### 【思想・良心の自由を求めて】

そのような中で、「君が代」ピアノ伴奏を拒否した東京都の小学校教員に対する戒告処分が最高裁で合憲とされてしまった事件は忘れられません。憲法19条で保障されている思想・良心の自由がふみにじられたのです。全体の奉仕者としての公務員の立場を定める憲法15条2項などが引用され、「君が代」斉唱が事実上強制されている違憲性は不問とされました。

公教育とは、子どもにとっては、「教育を受ける公共の利益」を得られるものでなければなりません。それなのに、「日の丸・君が代」が担った皇国史観に基づく臣民教育の悪を覆い隠し、「国旗・国歌」として刷り込むことは、一方的・強制的に価値を教え込むことに他なりません。一音楽教師の人権を守らない所では、子どもの思想・良心の自由も保障されていないのです。

私がお世話になった牧師のご家庭では、親子で話し合っ、儀式の参加の仕方（斉唱の時に退席するなど）を決め、学校に申し入れて要望を認めさせていました。卒業証書の年号も、元号ではなく西暦にできたとのことです。公務員時代、「君が代は歌

わせません」という要望しか受けたことはありませんが、保護者の方々はもっと声をあげてよいと思います。キリスト者が思想・良心の自由を求めていく時、周りに生きやすくなる方々が必ずいるはずです。中国や韓国にルーツをもつことを隠し、「日の丸・君が代」や元号への嫌悪感にふたをしている隣人の存在を覚えたいと思います。

### 【差別を見抜く】

日の丸を掲げず、君が代も歌わない今の勤務校では、心穏やかです。ただ、子どもたちの人権意識には絶えず目を光らせていなければなりません。

下校訓練の時にこんなことがありました。同じ方面ごとに教室に集合し、点呼をしていた時のことです。編入して来た児童が呼ばれた直後に、後方の高学年が「中国人だ」とつぶやいたのです。放送の合図で立ち上がる時に、その発言が聞こえていたであろう子たちに聞こえる声で言いました。「さっき国籍に関わる発言があったと思うけれど、国際化時代にあつて、国籍を指摘するだけで失礼にあたることがあるので控えてね」。言った当人たちはきまり悪そうに「はい」と返事をしましたが、言われた転入生には後日フォローしました。「日本人は、自分たちと違う、という見方をすると感じているけれど、私は民族に誇りをもっているから大丈夫」と、さわやかに答えてくれました。

私立小学校ということ、経済的に恵まれた子どもたちならではの差別意識も目の当たりにすることがあります。ある絵本のさし絵に、髪の毛が顔を覆うようにうつむいた子どもが出て来た瞬間、「ホームレス！」と叫んだ子たちがいたのです。真面

目に働きたい人たちがさえ、家を失うことがある現実の深刻さを語らなければなりません。またある時は、「あの学校は、ばか学校ってお母さんが言ってたから……」といった言葉を聞きかじっては、「ばかな学校ってどういうこと？」と話し合うのです。

福音を知らない人間は、自分より下を想定して安心するためにいじめや差別を繰り返してしまったり、条件付きの愛（成績がよければ可愛がってもらえる、など）に不安を覚え、荒れたりします。人を蹴落とすあり方に平安はないこと、誰もが造り主の作品として尊いということを胸に、子どもたちと向き合う日々です。

### 【高校で教えられたこと】

私自身、私立高校勤務を経験して初めて、学校の偏差値や評判で傷つく子どもたちの思いを知りました。その高校は、本命で受験する生徒が増え、人気上昇しているにも関わらず、過去に荒れた時代しか知らない人の偏見に少なからず晒されていたのです。

そういった偏見をものともせず、面倒見の良い指導に生徒たちは力をつけていきました。部活後に勉強をみてくださいと頼まれれば、非常勤講師でも可能な限り閉館の20時まで付き合います。AO入試に向けたプレゼンの練習には、教科の枠を超えて教師が押しかけ、助言しました。

泣いて合格の報告に来る生徒や、分け隔てなく貼り出される生徒の合格校名を見ると、これからも無意味な偏見や差別をはねのけて、しなやかに生きて行ってほしいと願うばかりです。それと同時に、キリスト者こそ学歴や経歴から自由であるべき

であり、教会の中にもこの世の価値観が紛れ込まないように注意深くありたいと思います。

その高校で、沖縄出身の生徒と語り合う機会がありました。ちょうど6月23日で、「沖縄は、2か月近くも早く敗戦を迎えていたんだから……」と言いかけた私に、彼は「慰霊の日」を本土で知っている人に会ったのは初めてと語りました。沖縄が悲しみに沈む日に、いつも通り授業をするだけという違和感が拭えないと言います。

これは、広島や長崎の場合も同じでしょう。苦しみを一部に押しつけ、排除する……それは福島も同じです。

### 【遊びから変える】

ある時、子どもたちの好きな遊びが、一部の勝ち組を作って大多数が負け組に甘んじる予行練習のように思えて、ルールを変えてしまいました。「みんな座れる椅子取りゲーム」（工夫して、一つの椅子に何人座ってもよい）や、「外野が常に1人だけドッジボール」（新しく当たった子が次々外野を交替する）などです。一部の富裕層を優遇した税制のままで納税義務を教える税教育も、情報操作されていることを不問にしつつ力を入れる情報教育も空しくてたまりません。ふだんの遊びから不必要な競争やストレスに慣れさせてしまうと、それもまた組織に忍従する人間を育てることになってしまう気がするのです。

### 【本文に即して読む面白さ】

今は国語専科で空き時間も毎日あり、教材研究がしっかりできるのを感謝しています。教科書会社の編集方針でかなり変えられてしまっている本文を、できるだけ原典

のままにしたプリントを併用すると、子どもはすぐ違いに気づきます。例えば「モチモチの木」(斉藤隆介作)。「あれ、豆太のせりふがカタカナだ」。教科書会社は、外来語や擬声語をカタカナで書くという原則で変えてしまっているのですが、それでは豆太の幼さを表現したカタカナ表記の良さが伝わりません。また、豆太のせりふが唯一ひらがなになっている場面の意味もとらえにくくなってしまいます。助詞の「は」や「を」が、「ワ」「オ」となっている所の効果にも、すぐ気づけるようになっていきます。こんな対比が子どもは大好きですし、大人でもわくわくします。

聖書積義を丁寧にされた説教も同じです。信徒が普通に読んだのではわからない、原典ではこういうニュアンスの言葉なのですよとか、他の箇所での使われ方や他の訳と比べるとこうです、といったことまで説き明かされると、本当に面白くなってきて、聖書の真理にめざまさせられます。

宗教改革500周年を経て、我らが改革派教会こそ、聖書を豊かに読み解き人々を引きつけていくことができるはずです。私は今、学校という場で福音そのものを語

ることはできなくても、身の周りの不公平や不正に敏感になり、NOが言える子、正義を愛し真理を求める子、そして丁寧な聖書積義に食いついてくるような子を育てたいです。

### 【闇にこそ輝く光を】

学力向上のかけ声で宿題が増え、給食時にもまるつけをしていたり、複数対応の原則で隣のクラスのクレーム対応に深夜までかかったり、組合員が自分一人になって毎週動員の月があったり……公立は定年まで勤めおおせることができなかった私ですから、今過酷な状況に置かれていらっしゃる兄弟姉妹のことが案じられてなりません。神奈川県内で、知人の子どもの担任が蒸発しました。東京都の組合幹部は、不当な扱いを受けた上自殺に至った教師を救えなかった無念を語っていました。そんな危険から、主が守ってくださるよう、逃れる道をも備えてくださるよう祈ります。

また、このような殺伐とした時代だからこそ、真理が輝くと信じて、改革派教会全体の教育的な働きのすべてが祝されるよう祈ります。(横浜中央教会会員)

日曜学校・教会学校訪問

## 仙台カナン教会日曜学校のご紹介

仙台カナン教会 日曜学校教師会

仙台カナン教会は、1986年に仙台教会所属伝道所カナン伝道所として仙台市南部に開設されました。数回の移転を経て、1997年に仙台教会から独立、仙台カナン伝道所となり、その後仙台カナン教会となりました。教会があるのは、仙台中心部から少し離れたのどかな場所です。明るい雰囲気、満ちた家庭的な教会で、現在、現住陪餐会員は35名、朝拝には毎週30～40人が出席しています。

仙台カナン教会の日曜学校は、継続的に出席できる子どもがいないために休止していた時期もありましたが、2015年に再開、毎主日、9時から9時30分まで礼拝、その後分級というスケジュールで、礼拝は以下のようなプログラムで行っています。

賛美：伴奏はオルガンやギター、時にはアカペラです。

聖書の教え：「子どもと親のカテキズム」から一問、幼児にもわかりやすい表現にしたものをみんなで読み上げます。2か月ごとに新しい問いにしています。

聖書輪読：子どもも大人も順番に、1節ずつ朗読します。まだ読むのが上手ではない小さい子ども、大人に教えてもらいながら読んでいます。

メッセージ：4、5人の教師がそれぞれ月1回程度担当します。

暗唱聖句

お祈り

献金：みんなの席を回って献金を集める係は子どもに大人気です。毎週交代で務めます。

賛美：元気いっぱいに歌って礼拝を終わります。

前方の壁にプロジェクターで讃美歌の歌詞やその日の聖書箇所イラスト、暗唱聖句などを映しながら進めています。小さな子どもにはこうした映像も楽しみのひとつのようです。

教材は、「教会学校スターターキット」(いのちのことば社)をしばらく使っていましたが、2018年から、「教会学校教案誌」を使うようになりました。教案誌はスターターキットに比べると抽象的で高度な内容も多く、今は使いこなすのに試行錯誤しています。

カナン教会の日曜学校は人数が少ないため、年齢で区切らず、みんな一緒に行きます。中心メンバーは未就学児3名、小学4年生1名の計4名です。そのほか、近隣のミッションスクールに通う中高生や、地域の子どもが参加してくれることもあります。年齢層が幅広いので、メッセージの準備をする時はいつも、幼児から高校生まで、みんなに届く言葉を探して頭を悩ませます。

月に一度、短い時間ですが日曜学校教師会を行います。翌月のメッセージの担当を

割り振った後、子どもたちの情報を共有したり、教材や行事の相談をしたりします。日曜学校が、子どもたちの成長のために豊かに用いられることを祈って終わります。

季節の行事も大切にしています。2017年は、春に進級式と水族館見学、夏にお楽しみ会、冬にクリスマス会を行いました。進級式では、それぞれの成長を祝って、一人ひとりに小さなプレゼントが贈られます。水族館見学では、初めて見る深海の魚や、海底で生きる不思議な形の生き物に夢中になりました。夏のお楽しみ会ではみんなで山ほどの餃子を包んで焼いて食べました。クリスマス会には近所の子どもたちとその親御さんも参加してくれて、賑やかなひとときになりました。牧師による聖書のお話とゲームの後、薄く焼いたホットケーキにクリームや果物、チョコレートなどを自分

でトッピングするオリジナルケーキ作りで盛り上がりました。

最近では低年齢の子どもたちの成長に合わせて、分級を充実させようとアイデアを出し合っています。現在は少人数の日曜学校ですが、より多くの子どもが集められること、教会が子どもたちにとって安心して過ごせる楽しい場所となり、イエス様との交わりの場となることを祈っています。

### 〈校長より〉

#### 1. 仙台カナン教会について

仙台カナン教会は、日本キリスト改革派仙台教会の所属伝道所として、1986年に仙台市太白区西多賀の地に開設しました。近くに小学校があり、子ども会を催すと多くの子どもたちが集まる伝道所でした。しかし、借家でしたので大家の都合によりやむ



なくそこをあとにし、その後何度か移動を重ね、礼拝を守っておりました。主の導きと励まし、教会員の熱い祈りと尊い献金により、1994年に現在の地（仙台市太白区<sup>カギ</sup>鉤<sup>トリ</sup>取）に家屋付の土地を購入、1999年に伝道所から仙台カナン教会として設立、さらに、2002年に新会堂を献堂。2016年に伝道開始30周年の記念会を催すことを出来、感謝。2012年より國安光牧師が赴任され、主イエスの福音を伝える教会として現在に至っております。

## 2. 教会学校について

日曜学校の礼拝は、主日の午前9：00からで、教材としては、CS成長センターのスターターキットを使用したり、教会学校教案誌を用いて行っております。

プロジェクターを用いて、子ども観ても分かるように心がけております。

礼拝プログラムとしては

- ① 賛美
- ② 聖書の教え（子どもカテキズム）
- ③ 聖書朗読（輪読）
- ④ 聖書のおはなし（暗唱聖句）
- ⑤ お祈り
- ⑥ 献金
- ⑦ 献金感謝の祈り
- ⑧ 賛美

現在の状況としては、客員（他教派）のご家族が集ってくださっており、3人のお子様（小学生、保育園児）が参加されています。加えて、國安先生のお子様（幼児）が参加されています。さらに、時折、ミッションスクールの中、高校生が礼拝に参加してくださっています。

教師は、4人で、主日毎にそれぞれの聖

書箇所のお話をしてくださっています。

3月末に進学と就職で、2人の方が教会を離れてしまいましたが、新たに2人の方が教師として参加され、4月から新メンバーにてスタートしています。どうか、お祈りに覚えていただければと願っております。

季節毎にカナンフェスタ（子ども会）を行っており、教会でのたこ焼きパーティーや餃子パーティー、クリスマス会、教会の外への遠足、（公園や水族館）へ、行き子どもたちと楽しい交わりの時を持ちました。

## 3. 日曜学校の課題と祈り

現在集われているお子様たちが主の導きと励ましを受けつつ、光の子として成長していくことが出来ますように。

そして、新たな子どもたちが日曜学校に加えられますように。

ミッションスクールの学生の方々が今後も教会へと導かれますように。

新たに加えられた教師のうえに主の励ましとお導きがあるように。

そして、日曜学校の礼拝後の分級の学びの充実が図られますように。

## 4. おわりに

たくさん課題はありますが、仙台カナン教会を祝福し、導いてくださる神様に心から感謝いたします。これからも、教師が力を合わせ、集われている子どもたちに福音を伝えていくことが出来ますように。よろこび、感謝しつつご奉仕することが出来ますように務めて行きたいと願っております。

他教派における教会学校

## 神さまと共に歩む幸い

朝岡 勝

### はじめに

私は日本同盟基督教団で教師としてお仕えしていますが、その間に学びの必要を覚えて休職し、1997年から2000年まで、神戸改革派神学校で学ばせていただきました。そこで受けた恵みはまことに大きく、御教派と神学校の皆さまに対する感謝は、言葉では言い表せないほどです。

神学校卒業して復職した後、東京都板橋区にある教会で奉仕を続けていますが、この間、特に教会の教理教育の重要性を覚え、主日の夕拝や水曜祈祷会でカテキズムの学びをコツコツと続けて来ました。

そのような折に、御教派の大会教育委員会から、『子どもと親のカテキズム 神さまと共に歩む道』（教文館、2014年）が出版され、さっそく一読しました。そしてその内容、表現が大変すぐれたものであると思い、教会のご家庭にお勧めするとともに、夕拝の説教で用いることにしました。そこで受けた恵みの一端をお分かちします。

### 夕拝での取り組み

2015年1月11日から2017年10月15日にかけて、毎主日の夕方5時からの夕拝で、『子どもと親のカテキズム』による説教」として全60回のカテキズム説教を行いました。

私たちの教会では毎主日四回の礼拝（6時半、9時、10時半、17時）が行われ、合わせて約100名ほどが集っています。夕拝の参加は20名前後で、ピアノとギターによる数曲の賛美、聖書朗読、説教というシン

ブルなものですが、教会にとっては大事な教理教育の場として用いられています。これまでも「信仰の足腰を鍛えよう」を合言葉のようにして、十戒、使徒信条、主の祈り、ニカイア信条、バルメン宣言、ハイデルベルク信仰問答などの学びに取り組んで来ました。今回も、このカテキズムに取り組むに際して、皆さんに一冊ずつ購入してもらい、夕拝の場で、その日の問答を大人も子どもも一緒に読んでから説教に入るようにしていました。

夕拝には家族と一日を教会で過ごした子どもたちが一緒に参加していることもあり、彼らの心に福音の喜びが届いて欲しいと願って、なるべく分かりやすい言葉で説くことを心がけてきましたが、カテキズムの本文そのものが平易な表現であったことは、子どもたちのみならず大人にとってもよい助けとなりました。

このカテキズムを読んで最初に抱いた感想は、教理的な適正さはもちろんのこと、宗教改革の伝統的なカテキズムのエッセンスを十分に取り込み、咀嚼している内容の濃さでした。しかもそれが過去のカテキズムの焼き直しでなく、今の時代、この国の教会の現実を踏まえ、生きた信仰の営みを励まし、家庭においては親と子が、教会においては牧師と信徒がともに学び合うことができるためによく考え抜いて作成されているというものでした。

## 神さまと共に歩む

60回にわたってカテキズム全体を説いてみて深く教えられるのは、第1問の「私たちにとって一番大切なことは何ですか」との問いかけが決定的な重要性を持っているという事実です。

ルターの小教理問答、ジュネーヴ教会信仰問答、ハイデルベルク信仰問答、ウェストミンスター小教理問答など、いずれのカテキズムも、第1問にどのような問いが置かれるかに、そのカテキズムの信仰理解の全体が表れますが、ここでは「私たちにとって一番大切なこと」が問われます。そう問われて、誰もが自分にとって一番大切なものとは何だろうかと立ち止まって考えます。いのち、家族、健康、子ども、お金、自由。自分の価値観が探られる問いです。これに対してカテキズムはこう答えるのです。「神さまの子どもとして、神さまと共に歩むことです」。ここには、信仰の営みとは、神の子どもとされた私たちがこの神さまと共に歩み続ける営みであるとの理解が示されていると言えるでしょう。

父なる神が御子イエス・キリストの贖いの御業によって私たちの罪を赦し、義と認め、神の子としてくださる。そして私たちを聖なるものとし、キリストの栄光の姿に至るまで私たちをキリストと一つに結び合わせ、その結びつきをいよいよ確かにしてください。こうして「わたしはあなたとともにいる」と言われる父なる神が、「わたしはあなたを離れず、またあなたを捨てない」との約束の通りに、聖霊によって私たちの歩みを支え続けていてくださるのです。

私は常々、キリスト教信仰の神髄は「神が私たちと共にいてくださる」というインマヌエルの事実にあると信じ、それを伝え

続けていますが、このカテキズム説教の第一回も次のように語りました。

「赤ちゃんはまだ一人で歩けなかった時は、お母さんやお父さんの懷に抱かれて歩みます。だんだんよちよち歩きができるようになって、少しずつ自分の足で歩き始めます。でもその小さい手はしっかりとお父さんお母さんの手を、あるいは指先を握りしめています。

そうこうするうちに自分でどこへでも行けると思うようになると、親の手を振り払うようにして走り出していこうとします。親は子どもの成長を喜びながらも、危ないときにはその手を握って引き戻します。しかしそうやって成長していく中でいつしか子どもたちは自分の足でしっかりと歩み始めていくようになる。

私たちはキリストにある成人として成長を目指しますが、しかしその一方でいつまでも神の子どもであることには変わりがない。親の手を離れて自分の足で歩いていくという人生の成長とともに、しかしいつになってもいつになっても神さまの子どもとして、神さまと共に歩いていく歩みは変わらず、むしろその結びつきは強くなっていくのです。『主が私の手をとってください。どうして怖がったり、逃げたりするでしょう。やさしい主の手にすべてをまかせて、旅ができるとは何たる恵みでしょう』と歌いながら、神さまと共に歩む日々を続けてまいりましょう。」

## 神さまと人に仕えて歩む

第2問では「神さまと共に歩むとは、どのようなことですか」と問われ、「まことの神さまを知り、神さまの栄光をあらわし、神さまを喜び、神さまと人に仕えて歩むことです」と答えられます。ここでは神さま

と共に歩むことの具体的な生き方が、「まことの神さまを知る」、「神さまの栄光をあらわす」、「神さまを喜ぶ」、「神さまと人に仕える」ことと教えられています。

特に最後の「神さまと人に仕える」ことの重要性を覚えます。ここには神さまと共に歩む道が、単に神と私という関係の中に閉じたものでなく、むしろ神を愛することと神に仕えることが、他者を愛することと他者に仕えることと切り離すことができないものであることが明確にされているのです。この点がこのカテキズムが単に宗教改革時代のカテキズムの焼き直しにとどまらず、今のこの時代の、この社会を視野に取れたものであると感じさせる部分です。そこでカテキズム説教の第二回では次のように語りました。

「神さまを信じて歩む道は、神さまと私だけの世界でなく、そこに必ず隣人の存在が、社会の現実が入ってこなければなりませんし、神さまに仕えて歩む道は、隣人に仕え、世界に仕える視点をもたらしものでなければなりません。このことを特に日本の教会は教えられているのだと思うのです。

この第2問はやがて第18問に繋がっていきます。『問：神さまのかたちに似せて造られた人間は、どのように歩むのですか。答：神さまを礼拝し、神さまを喜び、家族や友だちを愛し、神さまがお造りになったものを大切に、神さまに仕えて歩みます』。

私たちが信じて歩む道は、広く大きな道です。自分一人の幸い、自分一人の慰め、自分一人の喜びを抱えて歩む道ではなく、隣人を招き、世界に仕え、神と世界を喜び、大きく手を広げ、背筋を伸ばし、神を見上げ、喜んで世界の重荷を背負って歩む道で

す。そのような道を確認な足取りで歩みつつ、その道を歩むことによってしか知ることのできない神さまの愛とすばらしさを知り、この神さまの栄光をあらわし、神さまを喜んで、今日からの歩みを始めてまいりましょう」。

### 神の子どもとして歩む

ここでこのカテキズムの論じ方を確認しておく、第1問で全体を貫く主題として「神さまと共に歩む」ことが示され、その具体化として第2問、第3問では「神さまと共に歩む」、第4問では「教会と共に歩む」、第5問では「感謝しつつ歩む」と説かれます。続いてこの順序に沿って本論が展開され、第一部「信じて歩む道」(第6問～第41問)では聖書、三位一体の神、父、子、聖霊についての、いわゆるキリスト教信仰の中心的な教理が扱われます。次に第二部「教会と共に歩む道」(第42問～第55問)では教会と、恵みにあずかるための礼拝、聖礼典、祈りが扱われ、最後の第三部「感謝しつつ歩む道」(第56問～第97問)では神さまに感謝して生きるための指針である十戒と主の祈りが扱われます。このような論じ方はウェストミンスター小教理問答の構造に沿ったもので、大変行き届いた信仰への手引きであると言えるでしょう。

その上でこのカテキズムの優れた点と思うのは、神さまを信じて、教会と共に、神さまに感謝しながら歩む営みを「神さまの子どもとして」と言い表している点でしょう。神さまと共に歩む道を、私たちは奴隷につながれて、いやいやながらで、強いられて、恐る恐る歩むのではない。一番安心して、一番信頼して、一番愛されて、一番喜ばれて、一番守られている、神さまの子どもとして歩むのだということです。

第3問で「神さまと共に歩むために、罪人である私たちに必要なことは何ですか」と問うのに対して「イエス・キリストを信じ、救われて、神さまの子どもとされることです」と答えるとおります。

ここで大切なのは、私たちが神さまの子ども「である」以前に、神さまの子ども「とされる」ことが必要だということです。第17問から第25問には、本来神さまの子どもとして作られた人間の墮落と罪と背反の姿が教えられ、そこから私たちをもう一度神さまの子どもとして取り戻すための贖いの御業が教えられていきます。それでカテキズム説教の第三回をこう結びました。

「私たちを神の子どもとするために、御父が与えてくださった素晴らしい愛。それがイエス・キリストです。このキリストを信じて、救われて、神の子どもとされて初めて、私たちは一番大切な神さまと共に歩む道を、父の手に引かれ、時には抱きかかえられ、時には背負われるようにして歩んでいくことができるのです。この幸いの道を、ともに歩んでまいりましょう」。

### 神さまと共に歩む幸い

私なりの理解では、このカテキズムで最も重要なキーワードは「歩む」です。全97問のうち、「歩む」は21回使われており、そこでは信仰の営みが「歩む」と表現されます。単なる知識、教え、思想という「静的」なものでなく、「動的」なものとして捉えられているのです。そもそも聖書でも「歩む」は「生きる」ことそのものです。この信仰の生き生きとした動き、いのちの躍動、そのダイナミックさを私たちはいつも繰り返して感じたいと願うのです。

このカテキズムが信仰の営みを「歩む」という動詞で表現するとき、そこにはこの

歩みが向かうゴールがあることを示唆しています。私たちが神さまと共に歩み続けて向かう先、目指すべきゴールがある。それを示すのが第39問です。「問：救われて神さまの子どもとされた私たちは、どこをめざして歩むのですか。答：天におられるイエスさまは、再び地上に来られ、最後の審判をし、天と地とを新しくし、神さまの国を完成されます。私たちは、再び来られるイエスさまを待ち望み、その日に備えつつ、希望に満ちて歌いながら御国をめざして歩みます」。

この信仰の営みの持つ「旅人性」をしつかりと身に着きたい。そう願ってカテキズム説教の最終回をこう結びました。

「私たちにとって一番大切なこと、それは神さまと共に歩んだ、というただこの一つのことにかかっています。それがたとえ人々の記憶に残るようなことは何も成し遂げられないとしても、目に見える何かを築き上げるようなことがなかったとしても、たくさんのものを得ることがなかったとしても、ささやかな人生であったとしても、たったひとりの人しか助けることが出来ない人生であったとしても、です。

しかし神さまを愛し、隣りに誠実に仕え、神さまの栄光を表し、隣人を尊んで、決して失望せず、諦めず、倦まず、たゆまず、天を見上げて歌いながら歩む人生を、神さまは『わたしと共に歩んだ』人生だと言ってくれる。これほどの栄誉なこと、光栄なことはないでしょう。この何よりの栄えある歩みを受け取って、今日からまた、希望に満ちて歌いながら、神さまと共に歩む日々を、神の国の完成の時まで一歩一歩続けてまいりましょう」。

(日本同盟基督教団徳丸町キリスト教会牧師)

信仰告白・受洗の証

## 教会の一枝として

小林 悠 香

私はキリスト者の母のおなかにいる時から名古屋岩の上教会に通い、幼児洗礼を受けました。赤ちゃんの時から教会生活を通して、自然と早く信仰告白をしたいとずっと思っていました。小学6年生の時に同じ教会の親友の吉井初穂さんと一緒に相馬先生と『子どもと親のカテキズム』の学び会をするようになり、信仰告白を真剣に考えるようになりました。

あと信仰告白を真剣に考えるようになった理由は、教会の大人の人達の様々の奉仕、特に東北の被災地ディアコニアの奉仕の様子を見てすごいなあと思い、私も何かできたらなあと思った事と、小さい時母の奉仕の手伝いをするのが大好きだったので何か教会の奉仕がしたという気持ちがずっとありました。

そして2017年の復活祭に信仰告白をして岩の上教会の教会員になる事ができました。

教会員となって初めての聖さん式は本当にうれしかったです。なぜなら小さい時か

らあの聖さん式のパンとぶどうジュースを食べて飲んでみたいと思っていて、聖さん式にあずかる事に強いあこがれを抱いて、ペットボトルのフタに自分のお茶を入れて大人と一緒にタイミングで飲んでいたくらいです。信仰告白から1年がたって、この罪深い私がイエス様の十字架によって罪が赦されていることに聖さん式にあずかる事を通して感謝するようになりました。

私の信仰は弱くて誘惑に負けてしまうことがよくありますが、私の好きなみことば「わたしはぶどうの木、あなたはその枝である。人がわたしにつながっており、わたしもその人につながっていればその人は豊かに実を結ぶ。わたしを離れては、あなたがたは何もできないからである」(ヨハネによる福音書15章5節)を胸にとめ、イエス様を救い主と信じて教会の一枝として歩みたいです。そしてまだ実現はしていませんが、いつか被災地に行つてディアコニアの奉仕もしてみたいです。

(名古屋岩の上教会、中学2年生)

教会役員養成のために

## 執事職について(2)

相馬 伸郎

### 1. 政治規準第56条・57条

第56条には執事職の定義が記されています。「執事の職務は、聖書によれば、主イエス・キリストの模範に倣って、愛と奉仕の業を行い、聖徒の交わりを特に相互の助け合いにおいて具現するものである。」執事職とは、「愛と奉仕の業」を行う務めです。愛と奉仕とありますが一つのことです。神を愛するゆえに神と人に愛をもって奉仕するのです。神と人とに仕えるのです。

その目標は、「聖徒の交わりの具現」です。「聖徒の交わり」とは教会の本質です。つまり執事は、主イエス・キリストの模範にならって愛の業を担うことによって、キリストの主権、平和と愛が支配するキリスト者の交わりを建てあげて行くのです。ちなみに教会とキリスト者の働きのすべてはキリストに由来します。キリストの代理者として担われるのです。

その具体的な働きは、58条で列記されますが、その本質は「相互の助け合い」です。教会には、いわゆる「お客さん」はいません。全会員が主に結ばれた奉仕者です。ただし、全員が等しく奉仕を行えるわけではありません。病床において受ける以外なにもできないキリスト者もいます。ただし、彼らはそこで「奉仕を受ける奉仕者」としても豊かに用いられます。

聖徒の交わりを教会内の奉仕に限定してはなりません。教会とは始められた神の国を世に伸展する基地です。したがって聖徒

の交わりは常に、世界へと大きく開かれるべきものです。

第57条には執事の資格が記されています。「この職務を担当する者は、靈的品性を持ち、模範となる生活を送り、家をよく治め、よい名声を持ち、あたたかい同情心と健全な判断力を持つ者でなければならない。」「靈的品性」を持つ人とは特別な靈性を持っている人というわけではありません。聖霊なる神は、恵みの手段を忠実に用いるなら誰にもこの実りを結ばせて下さいます。キリストは、あるがままのキリスト者を用いて御自身の香りを放ってくださいます。

「模範となる生活」とは、そもそも執事は奉仕者の模範です。とりわけ主日や祈祷会等の集会出席に励む人となりましょう。「家をよく治め」とは、奉仕のために家庭をないがしろにしないということだと思えます。

「よい名声を持ち」とは、社会的評価です。キリストの姿に似せられた人は、教会の外でも評価され、用いられます。リトマス試験紙のように客観的で重要な条件です。

「あたたかい同情心」とは、執事の資質そのものです。もし執事が、奉仕ができない人を冷たく批判するなら、弱い会員は居場所を失ってしまうでしょう。

「健全な判断力」とは、信仰的判断です。

このように見て参りますと執事職は、決して長老になる前の訓練期間として考える

ような余地はありません。執事としての明確な召しが求められています。

## 2. 政治規準第58条「執事の任務」

今回から4回に分けて執事の任務を学びます。任務とは執事職の固有の権能（職制権能）であり、九つ挙げられています。

### ①「貧困・病氣・孤独・失意の中にある者を、御言葉とふさわしい助けを持って励ますこと。」

第一に挙げられた項目こそ、執事の本質に即した任務です。貧困も病氣も孤独も失意も人生の危機状況を意味しています。当事者は、ふさわしい助けが必要な状態にあります。執事は率先して善い隣人となるべきです。主にある仲間にとっての最大の危機とは霊的な危機です。神の恵みと愛の顧みを見失っている兄弟姉妹がいれば何よりも御言葉による励ましが必要です。同時に適切な支援も不可欠です。こうして危機は、神が共にいてくださり、神の家族の交わりの中にあることが再確認され、励まされる恵みのときとされます。「聖徒の交わり」は深く具現されてまいります。

### ②「献金の祝福を教会員に勧め、教会活動の維持発展のため及び愛の業のために捧げられたものを管理し、その目的にふさわしく分配すること。」

エルサレムの最初の教会は、「信者たちは皆一つになって、財産や持ち物を売り、おのおの必要に応じて、皆がそれを分け合」（使徒言行録第2章44,45節）っていました。献金は、聖徒の交わりを具現する要です。

すべては主から受けたものですから主に捧げることは会員の義務です。十分の一献金の精神とは、十分の九は好きなように用いても良いという基準を示すのではなく、すべてが主からの賜物であることを刻みつけるためのものです。献金奉仕の醍醐味の一つは、もろもろの活動に間接的に参与することができる点にあります。執事は献金の信仰的な意味やその霊的な祝福を勧めることが求められるですから、いわば「献金体験」を深めることが求められます。献金は、各個教会の維持発展のためだけでなく対外的にも用いられるべきものです。したがって、執事は教会外の必要にも広く通じていなければなりません。ふさわしい分配の要は公平さにあります。しかしそれは同額一律支援を意味しません。優先順位を決定する知恵が求められます。

### ③「教会会計及び教会財産の維持・管理を小会の監督の下に行うこと。ただし、財政上の重要事項は、会員総会の議を経て行わなければならない。」

そもそも、教会のすべての働きは小会の監督下に置かれます。何にいくら支出するのか等、執事会や会計担当執事が自由に扱うことは許されません。小会によって決議され、総会によって承認された予算の枠の中でその働きを進めます。会堂建築はもとより多額の備品購入等の場合には、会員総会の議決を求めることも建徳的です。会計担当執事は、献金が会員の神への献身と感謝に基づく信仰の表明であることを深く理解しつつ扱います。

### 3. 第58条4・5項

#### ④「個々のキリスト信者が愛の律法によって果すべき一切の義務を、特に執事として果すこと。」

キリストに結ばれ、洗礼を受け、ご自身の教会に受け入れられた者たちはすべてキリスト者です。キリスト者は誰でも執事的奉仕者です。キリストに仕えること、つまりキリストの働きを担う務めと賜物を受けているからです。その動機と動力は、主イエスからの愛と互いに愛し合えとの愛の律法にあります。執事とは徹底的にキリスト者として生きる人、キリスト者の模範です。執事の目標は、執事を見ていると自分も奉仕がしたいと思われるようになることです。もとより教会奉仕は喜びや感謝ばかりではありません。しかし、重荷を担うことによってこそ、主との交わりは深められ、キリスト者としての歩みは守られ祝福されます。この真理を証できる執事の存在は、教会の至宝です。

#### ⑤「教会員とともに、教会員のために祈ること。」

教会役員にとって祈りの生活を日々整えることは最低限の条件と言っても言い過ぎではありません。少なくとも公的集会である祈祷会に犠牲を払って出席することが求められています。執り成しの祈りこそ、教会の執事的働きの本質にかかわるからです。ディアコニアの究極のあり方なのです。

教会の祭司的な務めは、教会と世界の困窮を自分たちの祈祷課題として神に執り成すことです。確かにディアコニアとは行動です。したがってふさわしい技術や能力また体力そして時間も求められます。しかし、祈祷はそれらに必ずしも恵まれない状況にあってもなし得る奉仕です。最大の奉仕であり、ディアコニアの動力の源泉です。「祈ることしかできない」という消極的な言い方があります。しかし、執り成しの祈りこそ神が働かれるための究極の通路です。そして、神の働きに参加することがディアコニアなのです。奉仕の実りは、祈りに応えて下さる神の御業の結実です。

聖徒の交わりを具現するためにこそ召された奉仕者は、主日礼拝式こそその頂点であることを知っています。キリスト者の奉仕は礼拝から始まり礼拝へと戻ります。また、主日礼拝式を充実させるためにこそ祈祷会が必要であり、出席することの祝福をも知らされています。ですから執事は、会員を祈祷会の出席へと促し続けます。何より、困窮の中にある会員のためには共に祈ります。祈っていることを告げるだけでも、既にその方にもっともふさわしい助けを主が与えてくださる場合も少なくありません。聖霊は、共に祈るとき、彼じしんの具体的な助けが何であるのかを最もよく悟らせてくださいます。執事には「祈りの人」としての修練と実践が特別に求められています。何があっても祈りによって克服できると信じて祈る執事は、教会の柱です。

(名古屋岩の上教会牧師)

教会役員養成のために

## 長老職について(2)

吉岡契典

### III. 長老職確立の歴史

#### 1. 主教制へのアンチテーゼ

今回は、長老職について、歴史的な側面から考察したい。前回の寄稿の終わりにも記したが、長老主義政治は、歴史的にはローマ・カトリック教会の主教制に対する反省的なリアクションであると言える。教会政治制度についての通俗的な説明によれば、教皇を頂点とするピラミッド型の監督主義政治制度に対して、その逆を行くのが会衆主義政治制度、そして長老主義政治制度は両者の中庸とされる。しかしながらそれは分り易い説明ではあるが、歴史的事実とは異なる。

長老主義政治制度は、宗教改革時において、ローマ・カトリック教会の主教制に対して、聖書よりも伝統と政治的既得権益に立脚し、またそれと一体化していた教会政治を、より聖書的な原理に基づいて教会が自らの手に取り戻し、教会政治が世の政治的な権力によって他律的に執行される状況に抗して、自律的な教会政治を獲得するために確立された政治制度である。その歴史的な文脈において、長老主義政治は、ローマ・カトリック教会の監督主義政治制度の正反対に位置づけられるものとして登場した。

因みに会衆主義政治制度の起源はアナ・バプテストらのセクト的、また単立教會的な共同体であり、それは監督制、長老制に対して第三の政治制度を提示しようよう

な、組織的な教会政治制度として宗教改革期当初には提示されることがなかった。

この歴史的経緯から分ることは、長老主義政治にとり、またそこで中心的に機能する長老職にとっての最重要事項とは、長老たちが、反主教的な振る舞いをし、反主教的な原理で教会を導くことにあると言えよう。それは具体的には、長老が個人によって単独に、独裁的に意思決定をせずに、長老たちによる集合体の中で、共同で意思決定を行うこと。主教制に見られた上意下達の制度によって官僚的に教会を導くのではなく、それとは逆のより民主的な方法を教会政治において採ることを意味している。

#### 2. 聖職者階級と信徒の間にあった壁

宗教改革期においては、教会制度と、それによって統治される教会の信徒との関係が、いかにあるべきなのかという事柄が大きな課題となった。

中世ローマ・カトリック教会は、教皇と主教団による教会政治を、唯一の絶対的な教会政治制度として保持し、そこにおいて教皇と主教の聖職者集団は、教会の大部分を占める一般信徒とは隔絶された、強固な一枚岩の支配者集団を形成していた。そこで教皇は、グラティアヌスの教皇教令集が、「全ての王たちと、王子たちと、市民の統治者たちの究極の王」と定めているように、教会においてだけでなく、社会においても、キリストの権威を代表する存在として捉え

られていた。

しかし、その教会政治機構は次第に侵食され、宗教改革によって、ついにそのローマ・カトリック教会における聖職者階級の一枚岩が打ち破られ、それがプロテスタント教会とそこにおける長老職確立の発端となった。

### 3. 宗教改革先駆者たちによるカトリック教会への疑問符

宗教改革の先駆者として位置付けることが可能であるオッカムのウィリアム、ジョン・ウィクリフ、ヤン・フスらは、いずれもローマ・カトリック教会とそこに君臨する教皇の権威を、鋭く問い直した。

イギリスの神学者であったジョン・ウィクリフは、「万一この教皇がキリストの生き方に逆らうような場合には、それは地上で考えられるかぎり、最悪の代理者また反キリストであると信ずる。このような反キリスト及びその同類は、神の掟が命ずる多くのことを思わないからである」と述べて、教皇権を絶対化しない姿勢を明確に打ち出し、さらに教皇をして、「地上の教会を倒錯させてしまった」と述べて、現状の教皇制とカトリック教会に鋭い批判の目を向けた。

しかしこれら宗教改革の先駆者たちによる教皇批判は、それはあくまでも「ローマ・カトリック教会」という枠内での教皇批判であって、教皇制の破壊を企図したものはなかった。

### 4. ルターにおける長老職

16世紀の宗教改革の父とも言えるルターは、長老主義教会政治を採用しなかった。B. Lohse は、「ルターは決して教会的

プログラムをデザインしたのではなかった。ただ、闘争のために必要な諸概念を生み出したただけであった」と語っている。彼は確かに新約聖書に基づいて、自由で自律的な教会という概念を抱き、すべての信徒たちが万人祭司として、その福音的祭司制度のメンバーとなることのできるような、聖別された交わりとしての教会を考えていたが、彼がこの概念を実践に移すことはなかった。彼は神聖な権威としての祭司職という側面をより強調して、信徒を聖職者と同列に紹介することはなく、封建的教会を維持し、主教の宗教的王としての支配を退けることはしなかった。

### 5. ツヴィングリにおける長老職

チューリッヒの宗教改革は、教会と同様に、都市の再組織化であった。チューリッヒ市は自らをキリスト教共同体であると理解しており、チューリッヒの宗教改革の特徴は、宗教改革者たちと都市為政者たちとの間の、親密な協力関係だった。

ツヴィングリは、初代教会における長老たちを示す長老 (presbyters) と、世俗の権威によって理解されていた長老 (seniors) という、分かれた概念のあいだに橋を架け、議員とよばれた世俗の権威と、初代教会における教会指導者たちを同一視した。それは、長老職は為政者たちによっても担われることができる、という理解であった。

### 6. ヨハネス・エコランパディウスとマルティン・ブツァーにおける長老職

他の諸都市の宗教改革者たちは、市参事会の権威からの教会の独立を、ツヴィングリよりも強く求めた。

ヨハネス・エコランパディウスは、この

コンテキストの中で、最初に言及されるべき人物である。

彼は、「使徒たちの時代のように、ある特定の長老たちが、教会訓練の監督者として任命されるべきだ」と提唱し、そのような独立した教会的共同体が、世俗の共同体とは別個に創設されるべきことを訴えた。

またシュトラスブルクでは、ブツァーが教会監督職(Kirchenpfleger)を導入した。彼らは市参事会によって指名された信徒たちであり、彼らは教会生活の監督にあたった。そのメンバーの三分の二は市参事会の貴族階級より選ばれ、残りの三分の一は市民から選出された。彼らの職務は公共の道德裁判所や警察の役割から区別されており、彼らは教会の中に神の言葉と神の意志を反映させるために仕えていた。しかしながら彼らは、教会の中でその義務を果たしていたにもかかわらず、未だ市参事会の権限によって任命されていた。

ブツァーはまた、説教をする長老たちと、説教はせずにとだ訓戒の職務のみを担う長老たちという二種の長老についての構想を語っていた。

## 7. ジャン・カルヴァンにおける長老職

ヨハネス・エコランパディウスとマルティン・ブツァーらの試みは、ジュネーヴのジャン・カルヴァンによって引き継がれ、さらに展開された。長老職についての彼の視点は、大きな影響力をもっており、それは多くの点でのちの改革派の伝統にとっての規範となった。

カルヴァンの理解によれば、長老職は教会の中に不変の位置付けをもつものであった。そしてカルヴァンは、国家権力からの教会の独立に大きな強調点を置いた。教

会訓練の行使は、教会にかかわる事柄であり、それが市民的権威に取って代わられてしまうことは許されなかった。その教会にかかわる事柄の市民的権威からの自律を測る要素として重要なのが、教会における長老職の任免権であった。教会内の秩序を維持するための人物の選定権と任命権を、世俗権力が全て握っているという状態が、カルヴァン来訪時のジュネーヴの状況だったが、彼はそれをジュネーヴの市参事会から教会のものとするに努めた。

またカルヴァンは、教会に置かれるべき恒久的な職務として牧師・教師・長老・執事の四職制を掲げて、それらの職務の担い手たちは、教会に集う会衆の選挙によって選任されることとした。

また長老のはたらきについては、カルヴァンはテモテへの手紙一5章17節を根拠として、説教と統治という区別された二種類のはたらきが長老には求められていることを訴え、具体的にはそれらは、牧師と長老という別個の職務によって担われるべきものであるとした。

カルヴァンは、長老主義の教会規程が聖書的事実であること確信していたが、同時に自らのその判断について注意深くあり続けた。フィッシャーはこう述べている。「彼の主たる関心事は、職務そのものにあつたのではなく、教会によって正しくその職責が遂行されることに置かれていた。長老についてと同様、執事について意見する際も、カルヴァンは、『私は信じる』あるいは、『もし私の判断が間違いでなければ』というような、留保を付して語っている。つまりカルヴァンは、職務に関する事柄については、よりいっそうの洞察と発展の余地を残しつつ語っていたのである。さらに、彼が他の

諸教会について論じる際には、彼自身がジュネーヴで推し進めた教会規程を、他に對して強く要求することはなかった。

#### 8. ヨハネス・ア・ラスコーにおける長老職

カルヴァンのキリスト教綱要に現れていたアイデアを、教会規程の中に取り入れ、本格的に具体化したのがア・ラスコーだった。ア・ラスコーはロンドンにて、通称「ロンドン教会規程」と呼ばれる教会規程を著し、その構想を示した。

そこでア・ラスコーは、長老と執事という、二職制を主張し、さらに長老職を、御言葉と礼典の奉仕を担う長老（通称宣教長老）と、教会を導き、教え、さらに礼典を執行する長老（通称治会長老）という、二つのグループに分けた。ここに、現行の私たちの教会規程が採用している長老職についての理解と枠組みが歴史的には初めて具体化されている。

#### 9. 長老制と長老職の柔軟さ

今回の宗教改革期における長老職をめぐる歴史の概観を通して見えてくることは、今なら数時間で行き来することのできるような北西ヨーロッパの狭い範囲に広がる改革派の伝統に立つ諸都市の間で、多様な長老主義の実施と長老職の実践が存在していたということである。そしてはるかに時代が下った現在においても、長老主義とその要諦をなす長老職は、全世界において実に多様な形をとっている。カトリックの監督制は、今でも全世界で統一された一枚岩を形成しているが、長老主義は全くそうではない。そして、その時代状況や地域的文脈に応じて自らを変化させることのできる柔軟さこそが、歴史的には、主教制の後に、それに対抗するものとして生まれた長老主義政治の本質的特徴の一つとして数えられることなのである。(つづく)

(板宿教会牧師)



聖書默想・説教展開例・分級展開例

---

7月1日 ルカによる福音書6章27～38節

【解説と黙想】

## 敵を愛せ

マタイ福音書5～7章の「山上の説教」では、さまざまなことが語られ、教えられていたが、ルカ福音書の「平地の説教」では、冒頭の「幸いなるかな・災いなるかな」と、締めくくりの「家と土台」という共通する外枠のほかに語られる戒めは、「敵を愛しなさい」と「人を裁くな」の2点に絞られている。

32、33節で「自分を愛してくれる人を愛したところで、あなたがたにどんな恵みがあるだろうか。罪人でも、愛してくれる人を愛している。また、自分によくしてくれる人に善いことをしたところで、どんな恵みがあるだろうか」と言われている。そして37節で「人を裁くな（よい方にも悪い方にも、神を差し置いてあなたが判断するな、という意味）」と戒められている。

ルカはこのあとすぐ7章で、ユダヤ人の長老たちがこの戒めに真っ向から逆らっている姿を描く。

「長老たちはイエスのもとに来て、熱心に願った。『あの方は、そうしていただくのにふさわしい人です（←判断している！）。わたしたちユダヤ人を愛して（←愛してくれる人を愛したところで、どんな恵みがある！）、自ら会堂を建ててくれたのです（←自分たちによくしてくれた人に善いことをしたところで、どんな恵みがある！）』」（7：4）。

しかし、ルカのこの皮肉は、多くの場合、見過ごしにされている。ユダヤ人の長老たちの姿は他人事ではない。わたしたち人間の現実、神の御心からこれほどかけ離れてしまっている・全く正反対である、ということ、ルカのこの記述に指摘されて、よく自覚したい。敵を愛することができない・人を悪く判断して裁いてしまう姿は自

覚しやすいが、人をよい方に判断して、自分によいことをしてくれた人を愛する傾向があることも戒められているということに注意したい。

イエスは36節で「あなたがたの父が憐れみ深いように、あなたがたも憐れみ深い者となりなさい」と命じている。これは、マタイの並行個所の「あなたがたの天の父が完全であられるように、あなたがたも完全な者となりなさい」（5：48）という命に該当する。「敵を愛せ」「人を裁くな」ということに、こういう完全さが求められている。マタイが「完全な者」と記したことを、ルカは「憐れみ深い者」と言い直した。

ルカはさらに10章の善きサマリア人のたとえでこの「憐れみ」という言葉を用い、「だれが追いはぎに襲われた人の隣人になったと思うか」（10：36）というイエスの問いに対して、律法の専門家が答えた言葉（「その人を助けた人です」と訳されている言葉）を「その人に憐れみを行った人です」と記している。「イエスは言われた。『行って、あなたも同じようにし（憐れみを行い）なさい』」（10：37）。ここで示された「憐れみ」は、返してもらうことを全く当てにしない姿だ。

「敵を愛する（赦す・憐れむ）」とは、自分に悪を行い、しかもそれを謝罪しない人間を愛する・赦す・憐れむということ。相手はそれほど罪・悪に陥った半死の状態、自分に対して何も返す力がないのである。その相手を「憐れむ」こと。

イエスにこの「憐れみ」の姿は現われる。「父よ、彼らをお赦しください。自分が何をしているのか知らないのです」（23：34）という言葉はイエスの十字架上の言葉として記したのは、ルカだけである。（赤石純也）

7月1日 ルカによる福音書6章27～38節

【説教展開例】

## 敵を愛せ

◇..... 単元のねらい .....◇

神の国は父なる神の王国である。憐み深い父に赦された者として生きよう。

### 「憐れみ深い者となる」

みんなは、学校の友だちと仲良くしていますか。みんなとうまくいっていますか。家族とはどうですか。仲良くしていますか。ずっと一緒に生活していると、相手のいろいろなことに気づきます。「いやだな」「え、どうして?」と思うようなことばかりに気を取られて、その気持ちがどんどんたまると、その人のことが嫌いになり、もはや「友だち」「家族」ではなく、「敵」みたいになってしまいます。つまり、その人に対して、「思い知らせてやりたい」「口もききたくない」「顔も見たくない」という気持ちが強くなります。相手もそういうあなたのことを憎むようになるでしょう。

今日イエスさまは、「敵を愛し、あなたがたを憎む者に親切にしろ」と言われます。そんなふうになるようになってしまった「友だち」や「家族」のことを、みんなは愛せますか? 具体的に言うと、ちゃんと目を見て挨拶できますか? その人のために祈れますか? その人に親切にできますか?

とても難しいですね。仲の良い友だちには挨拶もできるし、祈れるし、親切にすることもできます。でも同じことを、嫌いな人に対してすることは、わたしたちにはどうしてもできない。イエスさまはそういう

わたしたちの心をお見通しです。そして、できないわたしたちにグサリとこう言われます。「自分を愛してくれる人を愛したところで、あなたがたにどんな恵みがあるか」(6:32)。「自分によくしてくれる人に善いことをしたところで、どんな恵みがあるか」(6:33) こういうことはイエスさまを知らない人たちだっているのではないかと。イエスさまを信じる人は、イエスさまを知らない人たちと同じことをしているだけではいけない、と教えられています。「あなたがたの父が憐れみ深いように、あなたがたも憐れみ深い者となりなさい」(6:36)。「愛する」とは「憐れみ深い者となる」ことでもあります。

「憐れみ深い者となる」とはどういうことを教えてくれる有名なお話があります。みんなもよく知っている「よきサマリア人」のお話です(ルカ10章)。追いはぎに襲われて半殺しにされた人が道に倒れていました。祭司とレビ人は、その人を見ると、道の向こう側を通って、通りすぎて行ってしまいました。でも旅をしていたサマリア人は「その人を見て憐れに思い」ました。そして、傷の手当てをして、ゆっくり休める宿屋に連れて行って、その費用も全部出しました。イエスさまは「だれが追いはぎ

に襲われた人の隣人になったと思うか」と質問しました。「その人を助けた人です」と答えた人に、イエスさまは、「行って、あなたも同じようにしなさい」と言われました。

このサマリア人は、追いはぎに襲われた人を見て、まず「憐れに思」いました。憐れみ深い人ですね。憐れみ深いので、傷の手当てをして、ゆっくり休める宿屋に連れて行って、返してもらうことを「当てにしないで(6:35)」宿屋の費用を全部出しました。みんなは、この人のようにできますか？イエスさまは「行って、あなたも同じようにしなさい」と言われました。

このサマリア人は、イエスさまです。イエスさまは、罪や悪に陥って、もう全然生き生きと生きられなくなっているわたしたち・半分死んだような状態になっているわたしたちを「憐れに思」ってくださいました。そして、神さまに罪を犯しているわたしたちのために、十字架の上で「父よ、彼らをお赦してください。自分が何をしているのか知らないのです」(23:34)と祈ってくださいました。わたしたちが命の道を

歩むためです。もっと生き生きと生きられるようになるためです。

わたしたちはそういう憐れみ深い父なる神さまに赦していただいたのですから、「あなたがたも憐れみ深い者となりなさい」と命じられているのです。イエスさまを信じる人は、イエスさまを知らない人たちと同じことをしているだけではいけない、「敵を愛し、あなたがたを憎む者に親切にしなさい」と命じられています。「悪口を言う者に祝福を祈り、あなたがたを侮辱する者のために祈りなさい。……」(6:28)。「人に善いことをし、何も当てにしないで貸しなさい」(6:35)。「人を裁くな。……赦しなさい」(6:37)。

難しいことです。でも、イエスさまを信じる人・信じて祈る人に、神さまは聖霊を送って、これを行うことができる力を与えてくださいます。イエスさまを知らない人のようではなく、イエスさまを信じている子どもとして、御言葉を行える人になりたいと思います。(赤石純也)

---

《今週の暗唱聖句》

あなたがたの父が憐れみ深いように、あなたがたも憐れみ深い者となりなさい。(ルカによる福音書6章36節)

7月1日

【幼稚科】

## 敵を愛せ

### 〈ねらい〉

神さまに赦された者として生きる。自分は赦されたのだから、お友だちを赦すことができるように神さまに助けをいただけるように一緒にお祈りする。

### 〈展開例〉

みんなはウルトラマンやプリキュアを見ますか。番組の最後の方で、敵と戦っているところを見ると手に力がぎゅっと入って応援している時もあるかもしれません。当たり前だけど応援しているのは、ウルトラマンやプリキュアのほうではないですか。怪獣の方が好きで自分もあんな風にやっつけられたいと思う人はあんまりいないんじゃないかな。

僕たちは正義の味方を応援したくなります。でも考えてください。僕たちが毎日会う人は、角が生えていてウルトラマンの怪獣みたいな人はいませんね。でも嫌いな人はまるで怪獣みたいにやっつけられてしまえばいいと思っちゃう。でもよく見てもその人には角は生えていない。

なんだか僕たちは自分に嫌なことをしてくる人を怪獣のように思ってしまう。そして自分は正義のウルトラマンだと思っちゃう。でも僕たちは自分のことをよく考えると、実はきちんとしていないし、お友だちに意地悪をしてしまうこともある。いろいろ悪い所がないでしょうか。僕たちの心の中をよーく見てみると自分の中に怪獣はいませんか。

それでもイエスさまは僕たちを赦してくださいました。怪獣が心の中にあるような

僕たち、他の人に意地悪をしてしまう僕たちをそれでも赦してくれたのです。怪獣をスペシウム光線でやっつけていい本当に正しいウルトラマンのような方はイエスさまだけです。でもイエスさまは僕たちを怪獣だからといってやっつけはしない。逆にイエスさまの方が僕たちに代わってやっつけられた。それはイエスさまが十字架について僕たちの罪のために命をささげてくださったということです。

だから僕たちはお友だちが嫌だなと思っても赦すことができる。それはイエスさまに自分が赦してもらったから。意地悪をしてくるそのお友だちはきっとイエスさまのことを知らないかもしれません。イエスさまのことをみんなが知ったら僕たちの世界は本当に変わるはずですよ。イエスさまは天のお父さんが憐れみ深いように、みんなも憐れみ深くなりなさいとおっしゃいました。本当に難しいことですね。仲良くできるように、神さまが助けてくださるように一緒にお祈りしましょう。

### 〈やってみよう〉

教会学校のお友だち、教会に来ている大人、できるだけ沢山のひとと握手をしてみよう。

### 〈お祈り〉

天の神さま、僕たちを赦してくださいありがとうございます。それでもお友だちと仲良くできないときがあります。聖霊の神さまが僕たちを助けてください。僕たちの心をきれいにしてください。イエスさまのお名前によってお祈りします。アーメン

7月1日

【小学科上級・中学科】

## 敵を愛せ

### 1. ルカによる福音書6章27～30節を読みましょう

- ①誰を愛しなさい、と言われましたか。
  
- ②誰に親切にきなさい、と言われましたか。
  
- ③誰のために祈りなさい、と言われましたか。
  
- ④他に、どんなことを言われましたか。
  
- ⑤あなたにはこのようなことができますか。
  
- ⑥どうすればできると思いますか。

### 2. ルカによる福音書6章31～36節を読みましょう

- ⑦「人にされていやなことは、人にしてはいけません」という言葉を聞いたことがありますか。31節に「人してもらいたいと思うことを、人にもしなさい」とありますが、このふたつの言葉はどこが違いますか。
  
- ⑧神はどのようなお方ですか。そのご性質を表す言葉を探してみましょう。

7月8日 ルカによる福音書6章46～49節

【解説と黙想】

## 確かな土台

マタイの山上の説教の締めくくりとしても有名な「家と土台」のたとえである。ルカでも、平地の説教の締めくくりになっている。このたとえば、御言葉を聞くだけで終わる者ではなく、それを行う者となることの大切さを教える。

46節のはじめの一言を読み飛ばしてはならない。「わたしを『主よ、主よ』と呼ぶ」とは、いつも礼拝している姿を表現している。ということは、46節は「わたしをいつも礼拝していながら、なぜわたしの言うことを行わないのか」ということ。聖書の話の聞くだけで、生き方を変えない私たちの頑なな姿を痛烈に戒めている。

「わたしの言葉を聞き、それを行う人」はどんな人かが48節に記されている。「地面を深く掘り下げ」とあるが、直訳すると「穴を掘り、深くする」という言い回し。聞いた御言葉を掘り下げる、という作業をしているか。「深くする」とは、どん底のような気持ちや状況にまで落ちて、そのようなかで御言葉の意味を知る、ということも含まれよう。福音は貧しく低い(別訳「気落ちした」)者に告げられるものだからである(ルカ1:48、4:18、イザヤ61:1)。

「岩の上に土台を置いて」とあるが、「岩」はもちろんキリスト、また御言葉のこと。そこに深く支柱を打ち込むことで、家は堅固なものとなる。ときとして、御言葉は聞く者を打ち砕くこともある。そして、それによって深い悔い改めに至らせるであろう。このように御言葉を深く受け入れて「岩」にしっかりと土台を置いて家を建てたなら、激流が押し寄せても揺り動かされることがない。

逆に、打ち砕かれた経験、どん底で御言葉を聞く体験、御言葉によって深い悔い改めに至らされることなしに、その人がほんとうの意味で御言葉に立つことはできないだろう。それが「土台なしで地面に家を建てた人」(49節)。御言葉体験のない人は、

激流が押し寄せたときに、「たちまち倒れ、その壊れ方はひどい」。

「倒れる」は「完全に+落ちる」という成り立ちの語。屋根も壁も梁も全て崩れ落ちるくらい壊滅的な状態になるということ。

「壊れ方(破壊)」という語は、「(豚が)かみつく」(マタイ7:6)、「(悪霊が)引き倒す」(マルコ9:18)、「(悪霊が)投げ倒す」(ルカ9:42)と訳されている動詞から来ている語。悪い思いにとらわれてしまったときの感情の噴出を思い出してみればよい。それが「ひどい」と言われている。礼拝には来ているが、御言葉を聞いているだけの人はこうなりやすい、と言われている。思い当たることはないだろうか？

詩編124編が思い出される。

イスラエルよ、言え。

「主がわたしたちの味方でなかったなら  
主がわたしたちの味方でなかったなら  
わたしたちに逆らう者が立ったとき  
そのとき、わたしたちは生きながら  
敵意の炎に呑み込まれていたであろう。  
そのとき、大水がわたしたちを押し流し  
激流がわたしたちを超えて行ったであらう。

そのとき、わたしたちを超えて行ったであらう、驕り高ぶる大水が」

主をたたえよ。

主はわたしたちを敵の餌食になさらなかった。

仕掛けられた網から逃れる鳥のように  
わたしたちの魂は逃れ出た。

網は破られ、わたしたちは逃れ出た。

わたしたちの助けは

天地を造られた主の御名にある。

岩に据えられた土台の上に立つ人は、主が激流(大水・死)から救い出してくださる。  
(赤石めぐみ)

《参照箇所》 ヤコブの手紙1章22～27節

《教理問答》 「子どもと親のカテキズム」問33

7月8日 ルカによる福音書6章46～49節

【説教展開例】

## 家と土台

◇..... 単元のねらい .....◇

神の国の福音は信じて行わなければ空しい。岩なるキリストを土台として生きよう。

### 「岩の上に土台を置いて家を建てた人とは？」

先週、イエスさまの「敵を愛しなさい」「人を裁くな」という教えを聞きました。「悪口を言う者に祝福を祈り、あなたがたを侮辱する者のために祈りなさい」(6:28)、「敵を愛しなさい。人に善いことをし、何も当てにしないで貸しなさい」(6:35)と言われましたが、「ムリ！ 却下！」と思っ

ていませんか？ 今日、今日の個所の最初で、「わたしを『主よ、主よ』と呼びながら、なぜわたしの言うことを行わないのか」(6:46)と言われていきます。「『主よ、主よ』と呼ぶ」とは、いつも教会に来て礼拝している、という意味です。「いつも教会に来て礼拝しているのに、なぜわたしの言うことを行わないのか」。みなさんはどうですか？ イエスさまの言葉のとおりをやってみたことがありますか？ イエスさまの言葉(教え)を聞いて、聞くだけで終わりにしないで、そのとおりにやってみる(行う)ことがどんなに大切か、ということを、今日イエスさまは教えてください。

イエスさまの言葉を聞いて行う人は、「岩の上に土台を置いて家を建てた人に似ている」そうです(6:48)。岩の上に土台を置くためには、固い地面を深く掘らなければなりません。砂遊びでトンネルを作ったことはありますか？ 砂はさらさらしているから、穴を掘りやすいですね。シャベルを

使わなくても、手でも掘れますね。でも、岩に穴を掘ろうと思ったら、そうはいきません。シャベルでは岩は掘れません。硬い石を砕く道具が必要です。そして、砂のように早く掘れません。ちょっとずつちょっとずつしか掘れません。でもそういうふうにして穴をたくさん掘ってそこに土台を置いて家を建てると、その家は洪水が来ても押し流されない丈夫な家になります。こんなふうにとちょっとずつちょっとずつしか掘れない硬い岩って、何のことを言っているのでしょうか？

そういう丈夫な家を支えている硬い岩とは、もちろんイエスさまのことです。イエスさまのことを語る御言葉にはとっても深い意味があるので、うんとたくさん掘って深くしないと、意味を探り当てられません。

「岩の上に土台を置いて家を建てる」とは、わたしたちが、聖書の言葉をちょっとずつ知って、イエスさまに従う生き方に変えられていく、ということです。ときには、御言葉を聞いて打ち砕かれて、自分の罪に気づかされて、それを知ってどーんと落ち込むような気持ちになって、でも、その中で「そういうあなたを神さまは救ってくださるんだよ」というメッセージを聞いて励ましを受け、立ち上がり、御言葉に従って、御言葉のとおりを行って歩むということです。イエスさまの教え・

御言葉の意味をそういうふうにしてだんだんと深く知っていくということです。毎週礼拝に来て、聖書のお話をそういうふう聞いて、一週間、聞いた御言葉のとおりにやってみようとして生きている人は、試練が襲ってきても、悪いことが降りかかってくる、倒れてしまうことはありません。揺り動かされることすらない、とも言われています。

逆に、「聞いても行わない者は、土台なしで地面に家を建てた人に似ている」と言われています。礼拝で聖書のお話を聞いても、自分の罪に気づくことなく、悔い改めることもないなら、ただ岩の上に家がのっかっているだけです。レゴブロックの家をレゴの板に挿してあれば動きませんが、つるつるの板の上に置いただけなら、すべってしまいますね。それと同じように土台のない家は、家を支えるものが岩にささっていませんから、川の水が押し寄せるとすぐに倒れてしまいます。しかも、「その壊れ方はひどかった」と書いてあります。「壊れる」とは、「気が狂っているように見える」人を「壊れている」と言うことがあるように、聖書の言葉でも同じです。御言葉を聞くだけで行わない人は、御言葉がちゃんと心にとどまっていないので、試練が襲ってきたり、悪いことが降りかかってくる、イエスキリストの言葉を忘れて、人を愛するどころか、悪くすると神さまを信じることができなくなります。

「敵を愛しなさい」という教えについて言えば、この御言葉を聞いたときに、具体

的に「敵」と思われる人が思い浮かぶなら、自分がその人を愛することができない現実を見つめ、それが御言葉のとおりでないこと・神さまの御心でないこと・神さまの御心に従えていない自分の罪深さを悲しみ、神さまに赦してください・御言葉のとおりその人を愛せるように力をください、と祈り、御言葉のとおりに行ってみるのが「岩の上に土台を置いて家を建てた人」です。

「敵を愛しなさい」という御言葉を聞いても、自分にはムリ、と御言葉をはねつけて、自分の悪いところをちっとも顧みず、相手の方が悪いと責め続け、そのままの地面の上で信仰生活を送っているなら、たとえ毎週教会に来ていても、その人に会うたびに心が動揺し、「だからやっぱりこの子は嫌い！」とますます憎むようになってしまいます。だから、イエスキリストは私たちがそんなことにならないように、「岩の上に家を建てなさい」と教えてくださいました。

今週の暗唱聖句を見ましょう。

「御言葉を行う人になりなさい。自分を欺いて、聞くだけで終わる者になってはいけません」(ヤコブ1:22)。

みなさんは、神さまの子です。イエスキリストの十字架によって、神さまにすべての罪を赦していただいたはずの子です。神さまの子が、神さまの子らしく生きていないことは、「自分を欺くこと」です。神さまの子は、「御言葉を聞いて行う人」「岩の上に土台を置いて家を建てた人」のはずです。わたしたちが本当に神さまの子らしくなれるように、祈りましょう。(赤石めぐみ)

《今週の暗唱聖句》

御言葉を行う人になりなさい。自分を欺いて、聞くだけで終わる者になってはいけません。(ヤコブの手紙1章22節)

7月8日

【幼稚科】

## 家と土台

### 〈ねらい〉

イエスさまの福音を聞くだけでなく生きることが大切。福音に生きることはイエスさまに土台を置くこと。土台は普通、人目には触れないがとても大切なことを伝えたい。

### 〈展開例〉

みんなはお友達のお家に遊びに行っただけですか。お友達は「お父さんが新しいテレビを買ったよ」っていっぱいかもしれません。お友達の家にはきれいな洋服ダンスもあるかもしれません。みんなはお友達のおうちにあるもので、これいい！ って思ったものありますか？

でもお友達の家遊びに行く時に、大きなスコップを持って行って、お家の地面の下がどんなかなって穴を掘ったことがありますか？ 多分そんな人はいないと思います。でもイエスさまはそういう見えないところが大事と言われるのです。びっくりしますね。イエスさまは、みんなのお家の地面の下を見てみたいんです。ちょっと変わっていますね。

お家は普通のときは大丈夫だけど、大きな地震や台風が来たときにお家がビリビリと震えることがあります。でも大きな地震でも台風が来ても、大丈夫なお家は土台がきちんとしているお家です。

土台と言うのは地面の下にあって普通は見ることがないけど、とても大切なんです。台風とか地震が来たときにそのお家が大丈夫なお家かどうか分かるんです。

イエスさまはみんなのお家やみんなの家族が大丈夫かどうかを心配しています。どんなお家が大丈夫なんでしょうか。それは土台がしっかりとあること。イエスさまという土台のうえにみんなが乗っていることです。イエスさまがみんなの土台です。

イエスさまを土台にすることは、イエスさまの話した言葉を守ることと同じです。イエスさまを土台にすると、僕たちはどんなにこわい時でも、あんしんできます。世界で一番丈夫なお家はイエスさまの上にとてたお家です。

### 〈やってみよう〉

①教会にブロックがあれば、ブロックで家を二つ作って机の上に置く（段ボールなど素材は何でも良いと思う）。一つは机に固定して、一つは固定しない。机を傾けると固定していない方は落ちこちてしまう！（子どもたちに団扇の風を使って家を動かす競争させてみてもよいかもしれません）

②大きな木はその木の下に同じくらいの大きさの根っこを持っているはず。ネットなどで調べて、子どもにたちに大きなものを支えるには、それ相当の土台がある写真などを見せる。

### 〈お祈り〉

天の神さま、僕たちのことをいつも心配してくださってありがとうございます。どんな時でもこわれない、僕たちを大好きなイエスさまという土台にいつも乗っていることができるようにしてください。イエスさまのお名前でお祈ります。アーメン。

7月8日

【小学科上級・中学科】

## 家と土台

### 1. ルカによる福音書6章46～49節を読みましょう

①47節に、イエスさまと出会った人の3つの段階が書かれています。どのような段階ですか。

②3番目の段階にいたった人は、どのような人ですか。その人は、最後にどうなりますか。

③3番目の段階にいたらなかった人は、どのような人ですか。その人は、最後にどうなりますか。

④「地面を深く掘り下げ」とは、どういうことだと思いますか。

⑤「家」はなにを表していると思いますか。

⑥「川の水」はなにを表していると思いますか。

7. あなたは「地面を深く掘り下げ」ていますか。

7月15日 ルカによる福音書7章1～10節

【解説と黙想】

## 百人隊長の僕の癒し

病気にかかった者を治すには、患者が医者のもとに行くか、医者が患者のもとに行き、対面して治療を受けるのが人間の常識である。この箇所では病人が死にかかっていたため、イエスさまに来ていただくことになった。しかし病人の上司である百人隊長は、自分や病人をイエスさまに対面させないように行動する。人間の常識からすれば違和感を覚える百人隊長の行動を、イエスさまは「これほどの信仰を見たことがない」と高く評価なさった。

百人隊長は、ユダヤ人の長老により「わたしたちユダヤ人を愛して、自ら会堂を建ててくれた」(5節)と紹介されるとおり、聖書の神さまへの信仰を持った異邦人である。

ただイスラエル人と異邦人の関わりについては当時の律法が壁となった。異邦人はイスラエル人を屋根の下に迎えられなかった(使徒10:28)。そこから百人隊長は「わたしの方からお伺いするのさえふさわしくないと思」い、ユダヤ人の長老たちを使者として送ることにもなった(6,7節)。

しかしこうした壁を百人隊長は信仰によって乗り越える。イエスさまの言葉と権威への信仰である。百人隊長は8節で、自らが所属する軍隊の事例を伝える。部下は隊長の権威に服従し、命令通りに行動する。そこからイエスさまに「ひと言おっしゃってください」と願った。一見話の飛躍を感じさせるが、百人隊長としては次のように話の筋はつながっているのであろう。「イエスさまを迎え入れるに値しない私ですら、自分のそばに来た部下に対しては権威を持ち、命令に服従させることができる。私よりもはるかに優れたイエスさまなら、イエスさまの間近にない人やもの、病気の

原因に対しても力強い権威を持ち、ひと言のもとに服従させることがおできになるに違いない。だから、イエスさまの一言をください」。

イエスさまは、百人隊長がイエスさまを人よりはるかに勝る方、つまり主(6節)なる神と認めた信仰(百人隊長はそれゆえ、ルカ5章のペトロのようにイエスさまに畏れを覚え対面を避けた)、また神の権威が距離、民族、地域の違いも超えて限りなく及ぶと認めた点から、「イスラエルの中でさえ、わたしはこれほどの信仰を見たことがない」(9節)と感心された。

イエス・キリスト、および神の言葉が、様々な壁を越えてこの世界の人々に働いてくださる、ということは、イエスさまと地上で対面できない現代の私たちにとって大きな福音である。今から2000年前にイエスさまがなさり、聖書に書き記された救いの言動が、現代の、イスラエル人でない私たちにも及ぶことになるからである。私たちは2000年、またはそれ以上に語られた神の言葉を、今この時の頼り、希望として信じ従うことができる。

あまねく行き渡るはずの神の言葉をお持ちである主なる神からすれば、この地になお、神の言葉に逆らうところがあることは是認しがたいはずである。神の国の到来を宣言された主イエスは、その完成のため、神の言葉、神の国の支配に逆らう罪を十字架で砕かれた。だから昔に語られた神の言葉であっても、現在の私たちに救い、回復をもたらし、隔ての壁を打ち砕き、将来の神の国の完成へと導いていくのである。

(吉田 崇)

《参照箇所》 使徒10:28、エフェソ2:11以下

《教理問答》 「子どもと親のカテキズム」問33、49

7月15日 ルカによる福音書7章1～10節

【説教展開例】

## 百人隊長の僕の癒し

◇..... 単元のねらい .....◇

イスラエル人でない百人隊長はイエスさまが神の権威をお持ちであると信じ、畏れつつ僕を癒してくださるよう願った。イエスさまは、離れた所から言葉をかけて癒されることで、様々なものを乗り越え世界中に行き渡る主の権威を示された。イエスさまの権威あってこそ今の私たちも救いをいただけることを知るう。

### 「イエスさまの力は離れたところにまで」

21世紀に生きている私たちは、離れたところにいる人といろいろな通信技術を使ってやりとりすることができるようになってきました。電話やSNSで人と会話していると、すぐ隣に相手がいるように思えるかもしれません。でもそうした技術の助けを借りたとしても、私たち人間が離れている人に対してできることには限界があります。顔と顔を合わせて向き合えると、直接に助けの手を差し伸べたりできますが、遠く離れているとなかなかそうはいきません。教会でキャンプをするのを楽しみにしているお友達が多いと思います。お友達と顔と顔を合わせて長い時間を一緒に過ごせるからです。電話やSNSによるやり取りだけだと何か物足りない、ということがあるからではないでしょうか。

今日の箇所、病気で死にかかっている人が登場します。病人を直すには、病人をお医者さんの所に連れていくことが必要です。お医者さんが直接病人に会うことで適切な治療を施すことが可能になる、というのが世間の常識です。ただこの場面では病人は死にかかっているお医者さんの所に行

く力はありません。そこで病人の上司である百人隊長がイエスさまに使者を送り、イエスさまを病人のいる家にお呼びすることになりました。

イエスさまがもう間もなく病人のところ、に到着しようとした時、百人隊長から別の使いがやってきました。使いを通して百人隊長はイエスさまに言いました「主よ、御足労には及びません。わたしはあなたを自分の屋根の下にお迎えできるような者ではありません」。ええっ、それではイエスさまが病人に会って治療することができなくなるよ、何を言い出すんだろう、と感じたかもしれません。ただ百人隊長はこう続けます「ひと言おっしゃってください。そして、わたしの僕をいやしてください」。イエスさまは普通の人間の医者とは違い、ひと言おっしゃるだけで病人をいやすことができると百人隊長は信じたのです。百人隊長はイエスさまを「主」と呼びました。イエスさまがただの人間ではない、主なる神さまでもあると認めたのです。だからこそ百人隊長は、イエスさまは罪ある自分が気安くお迎えできる方ではない、という恐れも抱き、家にイエスさまを入れることを遠慮

したのです。

百人隊長の話は続きます「わたしの下には兵隊の部下がいます。一人に『行け』と言えば行きます。他の一人に『来い』と言えばわたしのところに來ます。また部下に『これをしろ』と言えば、その通りにします」。普通の人間である私の場合、近くにいる部下が私の言葉に従って動く、ということが起こります。それならば、私よりもはるかに優れた主であられるイエスさま、世界全体の主でいらっしゃるイエスさまにおいては、遠く離れたところからでもひと言おっしゃるだけで、人も、病気も、あらゆる者が聞き従うと信じます。そう百人隊長は伝えたかったのです。

イエスさまは百人隊長の言葉を聞いて感心なさいました。そして群衆に向かって言いました「言うておくが、イスラエルの中でさえ、わたしはこれほどの信仰を見たことがない」。そうおっしゃった後、使いの者が返ってみると病人はいやされていたのです。

この時代、イスラエルの人は旧約聖書を通して天の父なる神さまを信じていました。旧約聖書の中でも、神さまが世界全体に権威をもっておられると語られてはいました。でもこの時代のイスラエルの人々の間では、聖書の神さまはイスラエルの神である、イスラエル以外の人々や地域は二の次、という意識が強くありました。百人隊

長が「わたしはあなたを自分の屋根の下にお迎えできるような者ではありません」と言ったのも、当時「イスラエル人は異邦人の家に入ってはならない」という決まりがあったからでした。神さまの権威は差別なく世界全体に及ぶ、という信仰は強くはなかったのです。

でも主なる神さまの権威は実際には世界全体に及ぶものです。神さま、イエスさまから少しでも離れていたらもう届かない、というものではないのです。中東イスラエルという地域、イスラエル人という民族以外には神さまの力が及ばないということもないのです。百人隊長は神さまの権威が世界全体に、どの民族にも限りなく及ぶという信仰を示しました。それをイエスさまはお褒めになったのです。

神さまの権威、イエスさまのお力に限りがないことは、今の私たちにとっても大きな恵みです。イエスさまは十字架で死に、復活し、今は天に昇られています。ですから私たちが生きているこの地上にはおられません。それなのにイエスさまの言葉、神さまの言葉は時間的にも、場所的にも遠く離れているにもかかわらず、今の私たちを聞き従わせる力を持つのです。私たちを救いに入れ、信仰を与え、罪を赦し、回復させてくださる力を持つのです。百人隊長の部下をひと言おっしゃるだけでいやされたイエスさまの力は、現代の私たちにも及んでいるのです。 (吉田 崇)

---

#### 《今週の暗唱聖句》

そのように、わたしの口から出るわたしの言葉もむなしくは、わたしのもとに戻らない。それはわたしの望むことを成し遂げ、わたしが与えた使命を必ず果たす。(イザヤ書 55章11節)

7月15日

【幼稚科】

## 百人隊長の僕の癒し

みんなはかぜをひいたり熱がでたりと病気になるってしまっ、おうちでねこんだことがあると思います。病気をなおすには、ふつうはおくすりを飲んだり、病院にいったお医者さんにみてもらったりすることが必要です。注射や点滴をうたれることもあるかもしれません。病気になるって体のそばでいろいろ手当てをしてもらってでだんだんと病気はなおっていくものです。

でもイエス様はあるとき、死にそうになっていた人を普通とはちがうやり方でおおしていただきました。この人は百人隊長という人のおうちで働いていましたが、ひどい病気で倒れてしまいました。病院に運んでいくこともむりでした。そこで百人隊長さんは、「どんなひどい病気もなおしてくださるとい、イエス様をここに呼びましょう」と思い立ち、イエス様のもとに使いの人を送りました。

イエス様は百人隊長のお願いを聞き入れ、病人のいる百人隊長のおうちに向かいました。その途中で、百人隊長から別の使いがやってきました。そして百人隊長からの言葉を伝えました。「主イエス様、わたしはあなたを自分のうちにお迎えできるものではありません。イエス様、ひと言おっしゃってください。そして病気の人を癒してください。」えっ、イエス様が病気の人のそばにいかないと、病気の人は直せない

のに、と思っ、誰もがこの言葉にびっくりしました。でも百人隊長の言葉は続きます。「わたしには、わたしに従ってくれる部下がいます。ある部下に『行け』と言え、行きますし、別の一人に『来い』と言え、来てくれます。」

百人隊長は、イエス様を「主」とお呼びして、イエス様がただの人ではなく、世界すべてを従わせてくださる神様でもいらっしやるという信仰をあらわしました。さらには「イエス様をわたしのうちにお迎えするのは恐れおおくてできない」という判断にもなりました。でもイエス様が主なる神様でいらっしやるならば、遠くからひと言おっしゃるだけでも病気を治してくださることができると信じ、イエス様をお願いしたのです。

イエス様は百人隊長の信仰に感心しお褒めになりました。そして使いの人に「帰ったら、病気の人はなおっているよ」と言っ、お返しになりました。使いの人が返ってみると、死にかけていた病人はすっかり元気になっていたのです。

今の時代、イエス様は私たちからすいぶん遠くの天にいらっしやいます。でも大昔におっしゃったイエス様の言葉、イエス様のお働きは、遠さや時間も超えて今の私たちにも働いて、私たちを神様の救いに入れてくださるのです。

7月15日

【小学科上級・中学科】

## 百人隊長の僕の癒し

1. ルカによる福音書7章1～10節を読みましょう

- ①百人隊長は誰を使いにやりましたか。
  
  
  
  
  
  
  
  
  
  
- ②百人隊長は次に誰を使いにやりましたか。
  
  
  
  
  
  
  
  
  
  
- ③イエスさまはどのような方法で百人隊長の僕を癒やされましたか。
  
  
  
  
  
  
  
  
  
  
- ④百人隊長はなぜ、自分でイエスさまのもとに行かなかったと思いますか。
  
  
  
  
  
  
  
  
  
  
- ⑤あなたは、自分から神様に近づくことができない、と思ったことはありますか。
  
  
  
  
  
  
  
  
  
  
- ⑥「これほどの信仰」とは、どのような信仰だと思いますか。

7月22日 ルカによる福音書7章11～17節

【解説と黙想】

## やもめの息子の復活

これは、主イエスのことばによって起こった奇跡の物語です。「死人が生き返る」というのは、主イエスの数多い奇跡の中でも、とくに驚くべき御業です。主イエスが死人を生き返らせたという御業は、他にも聖書にベタニアのラザロ（ヨハネ11：1～44）と、会堂長ヤイロの娘（マタイ9：18～26、マルコ5：21～43、ルカ8：40～56）の記事があります。これらの物語は、永遠の生命への復活ではなく、再び死ぬべき命への生き返りに過ぎません。しかし、これらの奇跡は、人間の死の問題に対して与えてくださる恵みと希望を指し示す「しるし」です。

主イエスは、死者に対して「若者よ、あなたに言う。起きなさい」と呼びかけられました（14節）。ヤイロの娘に対しても、ラザロに対しても、主イエスは呼びかけられました。主イエスは死者にも呼びかけることのできる救い主です。主イエスこそ、死にゆく者への大きな慰めです。

人は、親しい者が死ぬとき、遺体にすがりついて泣きながら叫びかけます。けれども、それは空しい呼びかけです。死を境として、その親しい者は呼びかけることのできない世界に移ってしまったからです。

救い主イエスは、死者に対しても呼びかけられるお方です。死に際においても、死後においても、私たちとの人格的な交わりを保つことのできるお方なのです。詩編23編4節には、「死の陰の谷を行くときもわたしは災いを恐れない。あなたがわたしと共にいてくださる」とあります。神を信じる者は、死の陰の谷を行くときも孤独ではないのです。死ぬ前も、死のときも、死の後も、救い主イエスが私たちと共にいてくださるからです。なんとという恵みでしょう。

死のもう一つの問題は、遺族の絶望と悲しみです。その母親はやもめでした。それだけでも可哀想です。それに追い打ちをかけるように、一人息子が死んでしまいました

た。これは本当に最悪の状態です。残されたこの母には、自分の生活の支えを失って悲しみのどん底に落とされたことでしょう。そこで主イエスは、この母親を憐れに思い、頼まれてもいないのに息子を生き返らせられました。この「憐れに思う」とは「内臓」を意味する言葉で、はらわたの揺れ動くような深い感情を意味します。

当時流行していたストア哲学は、神とは最高の存在で自らは動くことなく他を動かす、自らは影響を受けず他に影響する「不動の動者」であるとしました。神は、他からの影響を受けるようなちっぽけな方ではないということです。ところが、神の子であり「主」（13節）である方は、たった一人の人間の死に、はらわたの揺れ動くような感情を覚えられたということです。主イエスは偉大な神です。それでも、一人ひとりの悲しみに深い同情を寄せられるお方なのです。私たちが深い悲しみの中にあるとき、主イエスは人の心を探り知るお方として、私たちの悲しみを正確に知ってくださり、いつも深い同情を寄せてくださいます。私の悲しみを知っている方がおられることを、私たちは悲しみを経験するたびに覚えたいと思います。

主イエスは、深い同情だけでなく、この若者を生き返らせて母親にお返しになりました。これによって主イエスは、死を境として断ち切られた母と子の絆を再び結び合わせられたのでした。死人を生き返らせる奇跡を誰もが期待すべきではありませんが、主イエスにあってやがて天で愛する者と再会することは、皆が期待して良いことです。天国は、主イエスを中心として、主の御顔を仰ぐ所ですが、また、愛する者との再会の場でもあるのです。御国にあって、私たちは神との理想的な愛の関係を喜ぶと同時に、人との理想的な愛の関係を喜ぶことができるのです。（小澤寿輔）

《参照箇所》 詩編23編4節

《教理問答》 「子どもと親のカテキズム」問25

7月22日 ルカによる福音書7章11～17節

【説教展開例】

## やもめの息子の復活

◇.....単元のねらい.....◇

死人を生き返らせるキリストの物語を通して、キリストが死の問題に解決を与えて下さる救い主であること、そして、同情心に篤いお方であることを学ぶ。キリストの人を生かす力は、私たちがこの世に生きている間だけでなく死後にも及ぶ。これは神の国の支配を信じる者にとって大きな喜びである。そのことを知らせ、主を喜ぶ子どもとならしめたい。

### 「死人を生き返らせるイエスさま」

皆さんは、何か生き物を飼ったことがあるでしょうか。おうちで犬を飼っている、猫を飼っているというお友だちがいるかもしれません。また、魚を飼っているお友だち、夏なので虫を飼っているというお友だちもいるかもしれません。生き物を飼っているお友だちも、飼っていないお友だちも知っていると思うのだけど、生き物は、いつかは死んでしまいます。いつまでも一緒にいたいと願っても、いつか必ずお別れのときが来ます。生きているときには、寝たり起きたり食べたり遊んだりするし、呼びかければ答えてくれる生き物もいますね。でも、死んでしまったらどうでしょう。もう動かなくなつて、声をかけても目を覚ましてくれません。

これは人間も同じです。人間は、死んでしまったら、死を境にして、お話することも、何かを一緒にすることもできない別の世界に行ってしまいます。そうすると、とても悲しいし、寂しくなります。でもイエスさまは、死という問題を解決してくださるお方なのです。そのことを、今日のお話から一緒に学びたいと思います。

イエスさまはお弟子さんたちと一緒にナインという町に行かれました。その町の門に近づくと、ちょうどあるお母さんの一人息子が死んで、その息子を入れた箱（棺という）が運び出されるころでした。その母さんはやもめでした。やもめとは、夫が先に死んでしまった人のことです。だから、そのお母さんは、自分の夫はもう死んでしまつて、もうそれだけでも可哀想なのに、その上、自分の一人息子が死んでしまった

のです。一人息子なので、このお母さんには、もう他に子どもはいません。これは本当に最悪の状態です。このお母さんは、家族で一人だけ残されて悲しみのどん底に落とされたはずです。町の大勢の人がこのお母さんのそばに付き添っていました。でも、どんなに大勢の人が一緒にいてくれたとしても、死の悲しみを解決する力は人間にはありません。

それを見ておられたイエスさまは、そのお母さんをとつても可哀そうに思い、「もう泣かなくともよい」と言われました。そして、近づいて棺に手を触れて、「若者よ、あなたに言う。起きなさい」と言われました。すると、その死んでいた若者は起き上がったものを言い始めたのでした。一度死んだ人を生き返らせるなんて、神さまにしかできないことです。そのことが起こつたので、人々はみな驚いて神さまを賛美したのでした。

ここまでが、今日のお話なのだけでも、これらの出来事を通して、神さまは何をぼくたち私たちに教えようとしておられるのでしょうか。三つの大切なことがあります。

一つ目は、イエスさまは死の問題を解決してくださるお方であるということです。ぼくたち私たちは、イエスさまが病人を癒されたとか、悪霊に取りつかれている人を助けたとか、そういう奇跡を行われたというお話を、これまでに何度も聞きましたね。でも「死人が生き返る」というのは、とくに驚くべき奇跡です。イエスさまが死人を生き返らせたという奇跡は、他にもペタニアのラザロを生き返らせるという奇跡と、

会堂長ヤイロの娘を生き返らせるという奇跡が聖書にあります。この二つの奇跡もそうなのですが、イエスさまは「起きなさい」とか「墓から出てきなさい」と、死んだ人に呼びかけて生き返らせるのですね。このように、イエスさまは死んでしまった人にも呼びかけることのできる救い主なのです。

人は、死人にいくら話しかけても、その死人が目を覚ますことはありません。なぜなら、死人はこの世から死を境に別の世界、呼びかけることのできない世界に移ってしまったからです。けれども、イエスさまだけは、死んだ人に対しても呼びかけることができるお方なのです。人が死にそうなきにも、死んでしまった後にも、ぼくたち私たちと語り合うことができるお方なのです。イエスさまを信じる人は、たとえ死んでも孤独ではないのです。死ぬ前も、死んだ後も、イエスさまがぼくたち私たちと共にいてくださるからです。なんとという恵み、なんとという希望でしょう！

この出来事を通して、神さまがぼくたち私たちに教えようとしておられること、二つ目は、イエスさまは悲しむ人に同情して下さるお方であるということです。今日のお話を思い出してみよう。どうしてイエスさまは、この若者を生き返らせる奇跡を行われたのでしょうか。死んでしまった若者がイエスさまに「助けて」と祈ったからでしょうか。違いますね。このお母さんか周りの誰かがイエスさまに「助けてください」とお願いしたからでしょうか。いいえ違いますね。では、どうしてイエスさまは、この若者を生き返らせられたのでしょうか。それは、イエスさまがこのお母さんを見て、心の底から可哀そうに思ったからです。「可哀そう、助けてあげたい」。そのように深く同情されたので、誰から頼まれたわけでもないのに、助けてあげたのです。

皆さんは、神さまというと、とても大きくて強くて一番高いところにいらっしゃるお方と想像するのではないのでしょうか。昔の人たちも、そのように考えていました。神さまは、ご自分は動くことなく他を動かす方、ご自分は何からも影響を受けず、他

のすべてに影響する方。そのような方であると、人々は考えていました。「神さまは、他からの影響を受けるようなちっぽけな方ではない」と言っていたのですね。ところが、イエスさまはどうでしょう。イエスさまは大いなる神の御子です。イエスさまは主です。それなのに、たった一人の人間が死に、そのお母さんが悲しんでいる姿を見て、心の底から「可哀そう」と言って同情して下さるのです。イエスさまは、ぼくたち私たち一人ひとりの悲しみに深い同情を寄せて下さるお方なのです。私たちが深い悲しみの中にあるとき、他の人は誰もその悲しみを分かってくれないかもしれません。けれども、イエスさまだけは人の心の中をすべて知っておられるので、ぼくたち私たちの悲しみもちゃんと知って下さり、深い同情を寄せて下さるのです。だから、もし皆さんが悲しい経験をしたら、そのときは、その悲しみをすべて知っている方が共におられることを思い出しましょう。

とても大切なことがもう一つあります。それは、イエスさまは一度死を境として離れ離れになってしまったお母さんと子どもを再び会わせて下さるということです。死んでしまった人は、この世とは別の世界に移されてしまうので、呼びかけても答えてくれません。でも、イエスさまを救い主と信じる人は、みんな天国に入れていただき、天国でまた会うことができるのです。天国は、私たちが救って下さったイエスさまを中心として、神さまを礼拝する所ですが、同時に、愛する人と再び会う所でもあるのです。天国は、ぼくたち私たちが神さまとの愛の関係を喜ぶ所であると同時に、人との愛の関係を喜ぶ所なのです。

ぼくたち私たちは、自分の力では死の問題を解決することはできません。けれども、神であるイエスさまを信じる人は、必ず天国に入れていただいて、永遠に生きられるようにしていただけるのです。イエスさまご自身が命であり、ぼくたち私たちを生かして下さるからです。ですから、この方が与えて下さる喜びの知らせを、しっかりと受け止めましょう。(小澤寿輔)

《今週の暗唱聖句》

死の陰の谷を行くときもわたしは災いを恐れない。あなたがわたしと共にいてくださる。  
(詩編23編4節)

7月22日

【幼稚科】

## やもめの息子の復活

みんなの中で、おうちで生き物を飼っている、という子はいますか。どんな生き物を飼っているのかな。かわいい生き物を見ていると、ずっといっしょに過ごしていたい、と思うものです。でも残念ながら、途中で死んでお別れしなければいけないこともあります。死んだ生き物は声をいくらかけても目を閉じて動かないまま。その時はすごく悲しくなるのではないのでしょうか。

死んでお別れするというのは、わたしたち人間にもやってきます。生きている人とは、お話したり、一緒にあそんだりできましたが、死んでしまうとそれもできなくなってしまいます。だから、できれば死にたくない、長く生きていたい、と願うものです。

人間の場合、大人になって何十年生きてから死ぬ、ということが多いのですが、子どものうちに死んでしまう場合もあります。今日のお話では、ナインという町にあったお母さんと子ども一人という家庭で、子どもが死んでしまいました。子どもの死んだ体は棺桶に入れられ、葬式をしてお墓へと運びだされようとしていました。そこにイエス様が通りかかります。お母さんは、愛情をいっぱい注いで育てたのに子どもが死んでしまい、この地上からいなくなって

しまったこと、そのために家族が自分ひとりだけになってしまうことをとても悲しんで泣いていました。

イエス様はこれを見て、憐れに思われ、お母さんに「もう泣かなくてもいいですよ」と呼びかけられました。そして、子どもの遺体が入っている棺桶に手を伸ばしてゆかれました。そして「若者よ、あなたに言う、起きなさい」とおっしゃったのです。すると、棺桶の中の遺体が生き返り、起き上がって言葉を話し始めたのです。死んでお母さんのもともとから引き離されていた子どもは、イエス様によって生き返りお母さんのもとに返されたのです。

神さまによって世界がつくられた最初のとき、人間には死に別れるということはありませんでした。でもアダムさん、エバさんが罪を犯してしまってから、人間に死が入り込んでしまいました。人が死ぬことは、人間にとっても、そして神様にとっても望ましいことではなく、悲しいことなのです。

ですから神様は、イエス様によって、人の死を打ち破ることになさいました。イエス様を信じるなら、一度死んでも、神様のみ国で復活させていただくことができます。そして一度死に別れた人とも、もう一度出会えるようにしてくださいます。

7月22日

【小学科上級・中学科】

## やもめの息子の復活

1. ルカによる福音書7章11～17節を読みましょう

- ① イエスさまは母親を見てどう思われましたか。
  
  
  
  
  
  
  
  
  
  
- ② 「もう泣かなくともよい」という言葉には、どんな意味が込められていると思いますか。
  
  
  
  
  
  
  
  
  
  
- ③ イエスさまはどんな方法で若者を癒やされましたか。
  
  
  
  
  
  
  
  
  
  
- ④ この出来事を見た人々の反応はどうでしたか。
  
  
  
  
  
  
  
  
  
  
- ⑤ この話から、イエスさまはどのような方だと思いますか。

7月29日 ルカによる福音書7章36～8章3節

【解説と黙想】

## 婦人の癒しと奉仕

### ・類似エピソードとの関係

ルカによる福音書の特色として当時弱い立場とされていた女性たちについて言及されている箇所の一つです。

女性がイエスさまに香油を注ぐ話は、他の福音書にもあります（ヨハネ12章他並行箇所）が、それらはいずれもベタニアでの出来事とされ、主題も異なっていますので、ルカだけが別の話と考えられます。

それらのいわゆる「ナルドの香油」物語の一つであるヨハネ福音書では、女性がベタニアのマリアであるとされています（ヨハネ12：3）。歴史上、ルカの香油物語とナルドの香油物語が混同され、さらにベタニアのマリアとマグダラのマリアが混同された結果、本物語の罪赦された女性がマグダラのマリアであると解釈されたことがあります。しかし7章の女性が誰であるか特定する情報はありません。8章の話との関係に注意が必要です。

### ・本エピソードの説明

当時の旅行者や説教者は、それぞれの町の有力者の家で世話を受けるのが通常でした。食事の席には不特定多数の人々が同席することが可能でした。また当時は今日のようなテーブルと椅子ではなく、敷物の上に足を横に投げ出して食事をしました。女性がイエスさまの背後から足もとに近づけたのはそのためです。

ファリサイ派シモンの批判は、当時の人々が、人の「汚れ」が食卓を共にすることによってうつると考えたことに基づきます。これは、聖書の律法の理解を拡大解釈したものです。

イエスさまの例えに出てくる通貨単位「デナリオン」は通常肉体労働者一日分の賃金とされます（マタイ20：2）。ここではその具体的な価値や十倍という比率ではなく、ただ金額の大小だけが着目されます。

### ・「神の愛」と「人の愛」の関係

47節は口語訳では「この女は多く愛したから、その罪はゆるされているのである」と女性の愛の行為が罪の赦しの動因であるかのように訳されます。新改訳聖書も同様です。用いられる接続詞「ホティ」は口語訳等のように「だから」とも、新共同訳のように「で分かる」とも訳せます。両方の意味を持つことから、「神の赦しの愛」と「人の愛の働き」が、(いずれの方向であっても)一方的な因果関係にある二種類の愛なのではなく、「神が私たちが赦して下さった愛を私たちが隣人愛として具体的に実現する」という一体的な愛であることがわかります。

### ・多様な愛の奉仕

8章の箇所は女性たちの奉仕について語ります。十二使徒は全員が男性ですが、イエスさまの宣教団には多くの女性がいたことが記されています。彼女たちは様々な形でイエスさまの宣教を支え、自分たち自身も宣教の働きに仕えていました。これは特別優れた能力や立場を持たない子どもたちでも、それぞれの賜物に応じて、神さまの愛を実現できることを教えています。

なお「婦人」という表現は近年避けられている表現であることに留意する必要があります。(長田詠喜)

《参照箇所》 レビ記5：3、ヨハネの手紙一3：16～18  
《教理問答》 「子どもと親のカテキズム」 問61

7月29日 ルカによる福音書7章36節～8章3節

【説教展開例】

## 婦人の癒しと奉仕

◇……………単元のねらい……………◇

私たちの教会生活や日常生活で、隣人のために奉仕すること、神さまに仕えることが強制や義務ではなく、神さまへの感謝の応答であることを確認する。また、私たちの日常が神さまの恵みによって支えられていることを改めて確かめ、感謝を新たにする。さらに、私たちが自分の持っている賜物をもってそれぞれ神さまに仕えることができること、特に祈りをもって神さまに仕えられることを確かめる。

### 「いつも感謝する」

イエスさまの周りにはいつもたくさんの方がいました。有名なのは、十二人のお弟子さんたちです。皆さん名前を知っていますか？ ペトロさん、ヨハネさん、ヤコブさん……。でもその他にもたくさんの方がいました。男の人だけではなく。女の人たちもいました。今日の最後のところに幾人か名前が出ていますね。「マグダラのマリア」「ヘロデの家令クザの妻ヨハナ」「スサンナ」その他にもたくさんの方の女の方がいたことが書いてあります。

イエスさまたちはイエスさまと十二人の弟子たち、他にも男の人や女の人たちがいましたから、全部で二十人とか三十人のグループでした。その人たちみんなでいろいろな町に行って、そこでイエスさまがお話をなさり、病気の人を治してあげたりしていました。弟子たちはイエスさまのお話のお手伝いをしたり、イエスさまからいろいろなことを教えていただいたりしていました。今日読んだお話では、イエスさまたちは「ファリサイ派のシモン」という人の家でシモンたちと一緒に食事をしています。でもいつでもどこかのお宅にお邪魔して一緒に食事をするというわけにはいかないでしょう。食事以外にも着るものや生活のために必要なものもたくさんあるでしょう。イエスさまたちはみんなでお金や持ち物を出し合って、一緒に生活をしていました。女の人たちもイエスさまをはじめとするみんなのお世話をしたりして、奉仕をしてい

ました。他の弟子たちと一緒にイエスさまのお話を聞くこともあったはずですし、もしかすると、女の弟子たちも男の弟子たちのように、他の人にイエスさまのお話をしたことがあったかもしれません。みんな出来る限りの事をして、イエスさまのため、仲間のため、お話を聞きに来た人たちのために奉仕をしていました。

皆さんも、教会で礼拝の時にお祈りをしたり、お手伝いをする人がいるかもしれません。教会でなくても、友たちや家族、周りの人のお手伝いをしたり、親切にすることもあるでしょう。でもなんでそんなふうにするのでしょうか？先生やお母さんに言われたから、良いことをすると褒められるからするのでしょうか？あとでお礼をもらえるからするのでしょうか？

今日の話に出てくるファリサイ派のシモンは、もしかすると、イエスさまに親切に食事をお出しすることで、自分が良い人だと思われるのが嬉しかったのかもしれませんが。イエスさまの仲間は何十人もいましたから、そんな人たちにいつべんに食事を出せるのはお金持ちであることの証明になるでしょう。そんな自慢をしたかったのかもしれませんが。

ところがその食事の席に一人の女の方がやってきてイエスさまの足を涙で濡らし、持ってきた良い香りの油をイエスさまの足に塗りました。でもその女の方は「罪深い

女」の人でした。悪いことをしてみんなから嫌われていた女の人でした。シモンは「イエスさまが本当にすごい神さまの使いならば、この女がどんな人かわかって追払う筈なのに……」と思いました。

イエスさまはそんなシモンの心の中をすっかりわかっていました。そこで、シモンに一つのお話をしました。二人の人がお金を借りていました。一人はたくさん、もう一人はもっともってたくさんのお金を借りていました。ところが、二人ともお金を返せなくなってしまいました。お金を貸していた金貸しは優しい人でしたので、二人の借金をなかったこととしてあげました。たくさん許してもらった人と、もっともってたくさん許してもらった人と、どちらがたくさん感謝するでしょう。こんな話でした。シモンは「簡単ですイエスさま。もっともってたくさん許してもらった人の方がたくさん感謝します」と答えました。皆さんもそう思いますか？

そこでイエスさまはおっしゃいました。「この(女の)人が、多くの罪を赦されたことは、わたしに示した愛の大ききで分かる」私たちは、たくさん愛していただいたり、たくさん親切にいただいたり、たくさん大切にいただいたり、すればするほど、自分も親切にしたり、人を大事にしたり、愛したりできるようになるのです。

イエスさまの周りにはそんな人たちがたくさんいました。十二人の弟子たちも皆、イエスさまに愛されておりましたし、最初に名前を出しました、マリアさんやヨハナさんやササナさん、それぞれみんなイエスさまに救っていただいた人たちでした。女の人だけではありません。十二人の弟子たちもその他の弟子たちも、イエスさまの周りにいる人たちはみんなイエスさまに愛されて、助けていただいて、救っていただいた人たちばかりでした。イエスさまからたくさんたくさん愛していただいたから、その愛を本当に喜んでるから、イエスさま

と一緒にいてイエスさまをお手伝いして、イエスさまのことを周りの人に伝えることができたのです。

皆さんも、イエスさまにたくさん愛していただいています。私たちのためにイエスさまは人間として生まれて下さいました。十字架について私たちの罪を赦して下さいました。今も天におられて私たちのことを見守っておられ、私たちのお祈りを聞いてくださいます。私たちが今こうして暮らしていて、毎日学校に行ったり、毎週教会に来たり、こうやって礼拝をしたりすることができるのも、友たちと遊んだり、美味しいご飯を食べたりできるのも、みんなイエスさまのおかげです。そのことを感謝するから、うれしく思うから、私たちがイエスさまを愛して、イエスさまをお手伝いすることができるのです。

私たちが今こうして元気でいるのも、礼拝に来れたのも、みんな仲良く過ごせるのも、みんな神さまのおかげだというと、じゃあ、イエスさまに感謝して、ありがとうと言おう、感謝の気持ちを表そうかなという感じになってきます。でも、今度心配なのは、イエスさまに感謝しようと思っても、どうすれば良いのかわからないということだと思います。でもこれも心配いりません。イエスさまの周りにいた人たちはそれぞれ自分のできることでイエスさまをお手伝いしました。お話する人もおり、お手伝いする人もおり、さっきの話のように、自分の持っている香油をイエスさまに塗って差し上げる人もいました。私たちは自分のできることでイエスさまに感謝を表せば良いのです。一番最初にはまず、感謝の言葉を言うことです。「神さまいつも私たちを支えてくださってありがとうございます」とお祈りする、それは私たちが誰でもできる神さまへの感謝の表れです。感謝を確かめて、感謝を表して毎日を過ごしていきましょう。(長田詠喜)

---

#### 《今週の暗唱聖句》

イエスは、わたしたちのために、命を捨てて下さいました。そのことによって、わたしたちは愛を知りました。だから、わたしたちも兄弟のために命を捨てるべきです。(ヨハネの手紙一3章16節)

7月29日

【幼稚科】

## 婦人の癒しと奉仕

みなさんはお友達をはじめ他の人に親切にしたりお手伝いをしたりすることがあります。「する」と答えた人は、どうしてそうしようと決めたのですか。親や先生からやれと言われるからですか。人を助けると周りの人からほめてもらえるからですか。周りからほめられるのがうれしくてやる、という人は結構いるんじゃないかな、と先生は思います。

シモンという人が、旅をして歩いていてイエス様に「ご一緒に食事をしましょう」と声をかけ、イエスさまを自分の家に迎え入れました。そこに女の人が入ってきます。この人は周りから「罪深い女」とみられていました。この人はイエスさまのもとに来ると、泣きながらイエスさまの足を涙でぬらし、歩いて汚れていた足をきれいにしました。さらによい香りのする油をイエスさまの足にぬったのです。シモンは心の中で、「イエスさまはただの人ではないと思っていただけれど、この女の人が罪深い人だとわからないなんて。」と思いました。イエスさまを迎え入れた時とはシモンの様子は変わってしまいました。シモンの親切は、人目につくところだけの、長続きしないものだったのです。

イエスさまはシモンにこんなお話をされました。「二人の人が金貸しからお金を借りていました。そのうちの一人はもう一人より10倍おおく借りていました。二人とも借りた金が返せなくなったのを知った金貸しは、

どちらの借金もなしにしてあげました。二人のうち、どちらがいつそう金貸しに感謝するでしょうか。」シモンは「なくなった借金の多い方だと思います」と答えました。

イエスさまは女の人を見ながらシモンに言いました。「この人が多くの罪を赦されたことは、わたしに示した愛の大ききでわかります。」この女の人は、どうすると人からほめてもらえるかを求めて動くことはできなかったかもしれません。それもあって人に迷惑をかけ悲しませる罪が多く、「罪深い女」とみられてしまったのでしょうか。でもイエスさまはこの人をいやがらず、受け入れてくださいました。そこから女の人に、罪赦された喜び、心からの感謝が沸いてきて、自分なりに精いっぱい行動によって感謝を表したのです。

この女の人のように罪を赦される、病気を治してもらうなどしてイエスさまに心から感謝した人たちが、男の人も女の人も集まってイエスさまと一緒に旅をしました。特に女の人は自分の持ち物をイエスさまやみんなのために差し出すまでして精いっぱい奉仕しました。

わたしたちもイエスさまに罪を赦していただき、天の父なる神様の子どもとして受け入れていただいています。神様、イエスさまへの感謝をもって生きていくところから、それぞれのやり方で本当の親切を表せるようになり、神様に喜んでいただけるのです。

7月29日

【小学科上級・中学科】

## 婦人の癒しと奉仕

### 1. ルカによる福音書7章36～50節を読みましょう

- ①罪深い女はどんな行動をしましたか。
  
- ②この女はなぜ泣いたと思いますか。
  
- ③多くの罪を赦されたことは、なにを見るとわかりますか。
  
- ④金貸しと二人の人の話を読んで、神様と自分の関係を考えてみましょう。

### 2. ルカによる福音書8章1～3節を読みましょう

- ⑤イエスさまの旅に従ったのは誰ですか。
  
- ⑥婦人たちはどのような方法で、イエスさまに従いましたか。
  
- ⑦婦人たちは、なぜイエスさまに従ったと思いますか。
  
- ⑧あなたはどのような方法で、イエスさまに従いますか。

8月5日 ルカによる福音書8章26～39節

【解説と黙想】

## レギオンを追い出す

この箇所の前には嵐を静める主イエスの御業が記されていた。主イエスは人間に外側から力を振るう自然を支配されると共に、人間を内側から支配しようとする悪霊の力にも勝利される。

舞台は「ゲラサ人の地方」である。それがどの場所を指しているのか定かではないが、それがデカポリス地方（「十の都市」を意味）に位置し、異邦人が住む地域であることは確かである。それはユダヤ人には汚れたものとされた豚を飼っていることからわかる。

そして主イエスのところに「悪霊に取りつかれている男」がやってくる。「悪霊」は現代のわたしたちにとってはなじみの薄いものだが、聖書は悪霊の存在とその働きについて明確に語っている。悪霊は神に背いて墮落した天使であり（ペトロ二2：4、ユダ6）、今も不従順な者たちの内に働き、罪と過ちを犯させる霊である（エフェソ2：2）。特にこの箇所に出てくる悪霊は「レギオン」（ローマ軍隊の名前であり、六千人の兵士から成っていた）と名乗り、多くの悪霊が彼に入っていたことがわかる。それゆえその症状もひどかった。「長い間、衣服を身につけず、家に住まないで墓場を住まいとしていた」。「墓場」は死体が安置されている場所であり、汚れた場所とされていた（イザヤ65：4、マタイ23：27）。悪霊は人間性を破壊し、その人を汚れた場所に留まらせ、「生ける屍」のようにしてしまう。そして悪霊はイエスが「いと高き神の子」であることを認識しつつ、ひれ伏して「かまわないでくれ。頼むから苦しめないほしい」と懇願する。この時点で悪霊は神の子イエスには勝てないと敗北を認めている。「かまわないでくれ」と訳されている元の言葉は「あなたとわたしに何の関係がある

のか」と訳すこともできる。悪霊はその人がイエスと関係を持たないようにさせる。そして悪霊は「底なしの淵へ行けという命令を自分たちに出さないように」イエスに願う。「底なしの淵」とは悪霊やサタンが閉じ込められる牢獄のようなところである（黙示20：1～3）。悪霊たちはそこに入れられることを恐れ、豚の中に入ることを願い、主イエスに許可された。しかし結局は多くの豚（マルコ5：13によれば二千匹ほど）の群れが崖を下ってなだれ込み、おぼれ死ぬことになり、悪霊たちも滅んでしまったと考えられる。

この出来事の結果、その地方の人々はイエスに自分たちのところから出て行ってほしいと願う。それは彼らが「すっかり（原文では「大きな」）恐れに取りつかれていた」からである。自分たちでは手の施しようもなかった悪霊つきの男が、服を着、正気になってイエスの足もとに座っているのを見て彼らは恐ろしくなった。また多くの豚の群れが死んでしまったということも彼らの恐れの原因だっただろう。彼らは悪霊にとりつかれていた人が救われたことを喜ぶことはせず、豚の損失に目を向け、イエスを追い出してしまふ。霊的な救いに無頓着であり、物質的、経済的なものにばかり目を向けている異邦人の姿である。一方、悪霊を追い出してもらった人はイエスにお供したいと願ったが、主イエスは彼に自分の家に帰り、神が自分にしてくださったことを語り伝えるよう言われた。主イエスを追い払ってしまうような異邦人の地域でおもイエスを通してなされた神の偉大な御業を宣べ伝えていく。それは自分自身が救われた彼にしかできない主から与えられた大切な使命であった。（坂尾連太郎）

《教理問答》 「子どもと親のカテキズム」 問3、12

8月5日 ルカによる福音書8章26～39節

【説教展開例】

## レギオンを追い出す

◇..... 単元のねらい .....◇

人を汚れの中に留めようとする悪霊の働きを認識しつつ、主イエスはそれに打ち勝って救いの御業を成し遂げてくださることを知る。そして主イエスに救われた者には、自分が置かれた場所で、主から受けた恵みと救いを語り伝えていく使命が与えられていることを覚えたい。

### 「悪霊からの救い」

皆さん、おはようございます。皆さんは「悪霊」という言葉を聞いてどのように思うでしょうか。「あの人は悪霊にとりつかれている」という人を見たことがあるでしょうか。今の時代には「悪霊にとりつかれている」というようなことはほとんど言われないのだと思います。精神的な病気はありますが、それがすぐさま「悪霊にとりつかれている」ということにはなりません。では悪霊とは一体何なのでしょう。

今日の箇所には「悪霊に取りつかれた男」が出てきています。しかもこの人の中にはたくさんの悪霊が入っていました。この人は服を着ないで裸で過ごし、家に住まないでお墓に住んでいました。普通人はお墓に住むなんてことはしません。お墓はなんとなく怖い感じがするかもしれません。また当時お墓は死体が安置されているので汚れた場所と考えられていました。この人はそのような汚れた、死の香りが漂う場所に住んでいました。周りの人たちはこの人を鎖でつなぎ、足枷をはめて監視しようとしたのですが、それも引きちぎってしまいました。そのようにこの人は周りの人々からはもうお手上げ状態、どうしようもない人だったのです。

こう聞きますと自分は悪霊とは何の関係もないと思うかもしれません。確かに多くの悪霊に取りつかれこんなにひどい状態にはなっていないかもしれません。しかし、

わたしたちもまた「墓場」のような汚れた場所に行こうとすることがあるかもしれません。「汚れ」というのは聖なる神さまの前に汚れているということです。それゆえ聖なる神さまから離れ、罪や過ちの中で生きているならばそれは「汚れ」の中にとどまっているということであり、霊的には死んでいるということなのです（エフェソ2:1～2）。そしてそういうところに悪霊は働いているのです。

またこの男にとりついていた悪霊はイエスさまに向かって「いと高き神の子イエス、かまわないでくれ。頼むから苦しめないでほしい」と叫びました。悪霊はイエスさまが力ある神さまの子であり、このお方にはかなわないということを知っていたのです。だから「頼むから苦しめないでほしい」とお願いしました。また「かまわないでくれ」という言葉は「わたしとあなたとに何の関係があるのか」という言葉です。悪霊は自分を追い出し、苦しめるイエスさまと関係を持ちたくないのです。男に取りついたら、墓場という汚れた場所で居心地よく過ごしたいのです。そのように悪霊というのはわたしたち人間がイエスさまと関係をもたないように仕向ける働きもするのです。

イエスさまがこの人に名前を聞くと、「レギオン」と答えました。これはこの人のもともとの名前ではありません。悪霊がこのように言わせたのです。「レギオン」とは

ローマの軍隊の名前で、六千人の兵士から成っていました。それほど多くの悪霊がこの人の中に入っていたのです。この悪霊たちは自分たちを「底なしの淵」に行かさないうように、滅ぼさないうように頼みました。そしてその近くで飼われていた豚の群れの中に入れてほしいと願い、イエスさまはそれを許されました。悪霊が豚の中に入ると二千匹ほどの豚の群れが一斉に崖をくださって湖になだれ込み、おぼれ死んでしまいました。結局悪霊は滅んでしまったと言えます。こうしてイエスさまは悪霊に取りつかれていた人を救われたのでした。

豚を飼っていた人たちはこれを見て逃げ出し、町の人たちにこのことを知らせました。町の人たちがイエスさまのところにやってくると、そこには悪霊に取りつかれて今までどうにも手がつけられなかった男がちゃんと服を着て、正気を取り戻し、イエスさまの足元に座っていました。町の人たちはそれを見て恐ろしくなり、イエスさまに言いました。「自分たちのところから出て行ってほしい」と。町の人たちは誰も悪霊に取りつかれていた人がイエスさまによって救われたということを楽しんでいませんでした。それよりも自分たちの生活のために大切な多くの豚が死んでしまったということに目を向けていたのでしょう。そして自分たちでは手のつけようもなかった悪霊をも追い出してしまふ計り知れない力をもったイエスさまのことが恐ろしくなったのです。だから、もう自分たちのところからは出て行ってほしいと願いました。自分たちのこれまでの生活をイエスさまによって乱されたくないと思ったのでしょう。わたしたちが生きている日本もそのようなところがあるかもしれません。イエスさまによる人間の救いに目を向けることをせず、物やお金の豊かさを追い求めていく。そのような世界かもしれません。

イエスさまは舟に乗ってその地を去ろうとされました。そのとき、悪霊を追い出してもらった人はイエスさまと一緒にいかせてくださいと頼みました。しかし、イエスさまは彼に言いました。「自分の家に帰りなさい。そして、神があなたになさったことをことごとく話して聞かせなさい」。イエスさまと一緒に来るのではなくて、自分の家に帰って、神さまが自分にしてくださったこと、それがいかに大きなことであつたのかを話して聞かせない、と言われたのでした。それはイエスさまによって救っていただいたこの人にしかできない大切な働きでした。しかし考えてみますと、この町の人たちは既に豚飼いたちから起こったことを聞き、成り行きを見ていた人たちから悪霊に取りつかれた人がどのように救われてたのかを聞いていました。それを聞き、また悪霊に取りつかれていた人が正常になったのを見たらうえて、イエスさまを町から追い出したのです。しかしイエスさまはこの町での伝道を諦めてはいませんでした。救われた人自身が自分の口で、自分が神さまから、イエスさまからどれほど大きなことをしてもらったのか、どれほど大きな恵みをいただいたのかを伝える。そのことを通して、その人の家族が、その町の人たちがイエスさまを信じるようになる。そのことをイエスさまは望まれ、そのためにイエスさまはこの人を自分の家に帰り、その場所で伝道するという大切な役割を与えられたのでした。

わたしたちも、それぞれの置かれた場所で、家や学校において、自分が神さまから受けた恵み、イエスさまがしてくださったことを語り伝えていく。そのような大切な役割がイエスさまから与えられているということを感じたいと思います。

(坂尾連太郎)

《今週の暗唱聖句》

自分の家に帰りなさい。そして、神があなたになさったことをことごとく話して聞かせなさい。(ルカによる福音書8章39節)

8月5日

【幼稚科】

## レギオンを追い出す

### 〈ねらい〉

主イエスは、嵐をしずめ、人の心をもしずめてくださいます。イエスを信じ、お祈りする人の心の中には、聖霊なる神が住んでくださいます。聖霊は、神さまの子どもの歩みを力強く導き、守ってくださいます。お祈りの力、すばらしさ、安心感を教えましょう。

### 〈展開例〉

ある日、イエスさまはガリラヤの湖をお舟に乗って、神さまの国のすばらしさを伝えに行きました。すると、お墓をお家になっている裸の男の人が大声をだしながらイエスさまに近づいて来ました。お墓に住むって、楽しいのかなあ。違います。悪魔がそうさせていたのです。悪魔は、神さまが大っ嫌いです。悪魔は、人間が神さまを信じ、神さまに従うのも大っ嫌いです。悪魔は、人が神さまから離れさせるためにどんな悪い事でもへいきでしてしまいます。本当にいやですね。

この男の人は、神さまを信じていない人でした。だから悪魔が友だちになりやすかったのでしょうか。悪魔は、この人の心の中に、たくさんの友だちの悪霊を呼び込みました。神さまから離れると、お友だちや家族の人たちとも仲良くなれないのですね。

さて、悪魔はイエスさまが神さまの子どもだということを誰よりも知っています。ですから悪魔はイエスさまにまったくかなわないことも知っています。

イエスさまは、悪魔に「この人から出て行きなさい」と命じます。悪魔は言いました。「出て行きます。でも、せめて豚の中に入れて下さい」とお願いします。イエスさまは、するまにさせられます。すると、どうでしょう。どどどーと豚たちがいっせいに崖をめがけて走り出して、湖に落ちてしまいました。こうして、男の人は、心の中から悪魔を追い出していただき、代わりに聖霊なる神さまを心に宿すことができました。そして、自分のお家に帰って行きました。

いったいどうしてこの人の心の中に悪霊が住んでしまったのでしょうか。神さまにお祈りしないで、イエスさまを信じなかったからです。僕たち私たちは、神さまの教会でもお家でもお祈りできますね。お祈りする人の心の中には、神さまが住んでくださいます。その人に、悪魔は寄って来ません。僕たち私たちは、聖霊の神さまが心に住んで下さいます。うれしいね。

### 〈やってみよう〉

ガラスのコップに泥を入れます。かきまわします。悪霊が心の中に入っているイメージ。その泥を、捨てます。きれいに洗って、お水を飲んでみせます。

### 〈お祈り〉

天のお父さま、わたしの心の中に、聖霊で満たして下さい。いつも、イエスさまといっしょにいれるようにたすけてください。アーメン。

8月5日

【小学科上級・中学科】

## レギオンを追い出す

### 1. ルカ8：26～34を読みましょう。

①イエスは、この町で誰に会いましたか。その男はどんな暮らしをしていましたか。

②イエスを見て、男はどんな行動をとりましたか。また、それはなぜですか。

③イエスはこの男に声をかけて、名前を尋ねられました。その名前の意味は何ですか。

④男がイエスに願ったことは何ですか。

⑤イエスがお許しになると、どんなことが起きましたか。見ていた人たちはどんな様子でしたか。

### 2. ルカ8：35～39を読みましょう。

①話を聞いた町の人たちは、イエスに何と言いましたか。

②悪霊を追い出してもらった男は、イエスに何を願いましたか。また、イエスは何とお答えになられましたか。

8月12日 ゼカリヤ書9章9～10節

【解説と黙想】

## 平和を実現する

ゼカリヤ書が記された時代は、マケドニアのアレキサンダー大王が死に、帝国がマケドニア、プトレマイオス朝エジプト、セレウコス朝シリアの三つに分裂した頃であると言われます。イスラエルの人々にとって不安と戦争の時代でした。自分たちはどのような道を歩むべきか、そのことが本当に問われる時代でした。そういう時代のただ中で、預言者ゼカリヤは平和の預言を語ったのです。

9章1節～8節では、マケドニアのアレキサンダー大王によるパレスチナ侵略の出来事が記されています。しかし、預言者はこの出来事の背後に神の御心を見ます。神はアレキサンダーの侵略を用いて、強欲な金儲主義に支配されていたティルス（現レバノン）の町を裁かれました。同様に、地中海沿岸のペリシテ人の町々をも裁かれました。しかしこの時、イスラエルだけは侵略を免れたのです。それはイスラエルが強力な軍隊を持っていたからではありません。8節にあるように、主がイスラエルのために見張りを立て、見守っていてくださったからです。ここから、私たちは、主がご自分の民を虐げる者、攻撃する者たちの手から守ってくださるといふ約束を見ることが出来ます。

ゼカリヤはこのように語った後、9節、10節で平和の預言を語ります。軍馬に乗ったアレキサンダー大王は、エルサレムに入ってくることはありませんでした。しかし、預言者は9節で軍馬ではなく、ろばの子に乗ってエルサレムに入場なさる方がいと語ります。その方こそが、イスラエルの真の王であると預言しているのです。この方はこの世の王たちのように高ぶる者ではなくて、自らを低くし、へりくだる方であると言います。

軍馬は戦争の道具です。しかし、ろばの子は戦争の道具にはなりません。それ故、ろばの子に乗った王は決して戦争をしません。それなら、彼は何をするのか。それは、ろばが荷物を背負うように、人間の重荷、

罪の重荷を背負ってくださるのです。そもそも人間が互いに殺し合い、戦争をするのは罪があるからです。ろばの子に乗った王は、この罪の重荷を負うことによって、真の平和への道を開いてくださいます。それ故、ゼカリヤは大国の脅威や戦争の不安のただ中にあるイスラエルの民に対して、軍馬に乗って来る王、戦争する王を求めめるのではなく、ろばの子に乗ってくる王、戦争ではなく平和を実現する王の到来こそ、待ち望むべきであると預言したのです。

このゼカリヤ書の預言は、イエス・キリストがろばの子に乗ってエルサレムに入場されたことによって、そして、私たちの罪のために十字架に架かってくださったことによって成就しました。それによって、私たちは罪赦され、神との和解を与えられ、真の平和を与えられているのです。しかし、ゼカリヤは10節でさらに驚くべき預言を語ります。ゼカリヤは、ろばの子に乗った王によって、イスラエルからすべての戦車も軍馬も、戦いの弓も廃棄されると言うのです。そして、究極的には、あらゆる武力を打ち壊し、世界中に平和をもたらすと預言しているのです。まさに主の平和は全世界にまで及ぶと言うのです。

ここには終末の幻が預言されています。10節で預言されている、この世界からすべての武器や戦争が廃絶され平和が到来するのは、キリストが再び来られる終末の時です。しかし大事なことは、ろばの子に乗った王が既に一度この世界に来てくださったという事実です。そうである以上、10節で預言されている世界平和はまだ完成してはいませんが、既にそれは始まっているのです。だからこそ、主イエスの平和を与えられているキリスト者と教会は、どのような時代にあっても、この世にあって平和の砦となり、戦争の廃絶と平和の実現のために、祈り、働いていくことを求められているのです。  
(弓矢健児)

【参照箇所】 イザヤ2:4、マタイ5:9、マタイ21:4～9、マタイ26:52、コロサイ1:20  
【教理問答】 「子どもと親のカテキズム」問91、「子どものための平和カテキズム」

8月12日 ゼカリヤ書9章9～10節

【説教展開例】

## 平和を実現する

◇.....単元のねらい.....◇

今週15日、日本は戦後73回目の敗戦記念日を迎えます。また、6日は広島原爆の日、9日は長崎原爆の日でした。日本はかつて、富国強兵の大義名分の下、国民を戦争に駆り立て、朝鮮半島や中国を侵略し、アジア太平洋全体に軍隊を派遣して行きました。そうした戦争の結果、アジア・太平洋各国に2000万人以上の死者を含む被害をもたらしました。そうした戦争の反省にたつて戦後日本の国は憲法9条によって戦争を放棄し、二度と戦争をしないことを誓ったのです。私たちは二度と戦争の過ちを繰り返してはなりません。イエスが私たちに求めておられることは武器を持つことではなく、放棄することであり、戦争することではなく、敵をも愛し、平和に生きることです。そのためにイエスはこの世界に来てくださり、私たちの平和となってくださいました。この時期、私たちは聖書の御言葉を通して、改めて平和への責任を自覚したいと思います。

### 「平和を実現するイエスさま」

みんなは8月15日が何の日か知っていますか。8月15日は敗戦記念日です。今から73年前、日本が戦争に負けて、戦争が終わった日です。日本はかつて韓国・朝鮮や中国を侵略し、またアメリカとも戦争しました。その戦争で、たくさんの人たちが死んでしまったのです。たくさんのお子もたちも死にました。

たまにアニメや映画で、戦争が正しいことであるかのように描かれていることがあります。しかし、それはウソです。人間同士が殺し合う戦争は悪いことです。正しい戦争などありません。戦争はたくさんの人を殺し、みんなの楽しい生活をめちゃくちゃにし、家族をバラバラにします。自然が壊され、動物たちも殺されてしまいます。戦争はみんなを不幸にし、みんなを悲しくさせるのです。

神さまが人間を造ってくださったのは、戦争をするためではありません。神さまはみんなが仲良く、助け合って、平和に生きるために人間を造ってくださったのです。それにも関わらず、人間は繰り返し戦争をし、殺し合ってきました。今の世界の中で戦争が起っています。本当に悲しいことです。そして、誰よりも神さまがそのことを悲しんでおられます。

しかし、神さまはただ悲しんでおられるだけではありません。神さまは、わたした

ち人間の世界にほんとうの平和を与えてくださるお方です。そのために神さまは平和を実現する王さまを、わたしたちの世界に与えてくださると約束なさいました。神さまは、イスラエルの預言者たちを通して、そのことを約束なさってこられました。預言者ゼカリヤもそうした約束を神さまから与えられた一人です。

当時、この世の王さまや支配者たちは自分の力や強さを国民に見せつけるため、立派な馬に乗って都に入場しました。なぜならば、馬は軍馬として戦争のために用いられたからです。そして強い馬や戦車をたくさん持っていて、戦争に勝利する王さまが立派な王さまだと考えられていました。しかし、神さまが約束なされた王さまはそうではありません。預言者ゼカリヤはろばの子に乗った王さまがやって来ると預言したのです。

馬のように強くもなく、走るのも遅いろばは戦争に役立ちません。馬に比べて見栄えもよくありません。ろばの子は王さまが乗るのにまったく相応しくない動物です。ろばの子に乗って来る王さまなど考えられません。それにも関わらず、どうして、神さまが約束なされた王さまはろばの子に乗って来るのでしょうか。それは、その方が戦争をする王さまではなく、戦争を止め

させ、平和を実現する王さまであったからです。

また、ろばは戦争に使えませんが、みんなの重い荷物を運んでくれます。走るのにはやくありませんが、重い荷物を積んで遠くまで歩いてくれます。そうやってたくさんの方の役に立つのです。つまり、ろばの子に乗って来る王さまは、自分の強さを誇る王さまではなく、自分を低くしてみんなのために働いてくださる王さまなのです。神さまは、そのろばの子に乗った王さまによって、この世界から人殺しの道具である戦車や軍馬、あらゆる戦争の道具が廃棄され、世界中のすべての国に平和が実現すると約束されたのです。

それでは、神さまから遣わされたろばの子に乗った王さまとは誰のことでしょうか。いつ、そのような王さまがこの世界に来てくださるのでしょうか。新約聖書を見ると、その王さまこそがイエスさまであると教えています（マタイ21：4～9）。イエスさまはろばの子に乗った真の王さまとしてエルサレムの都に入場されました。そして、わたしたち人間を愛し、わたしたちの罪の身代わりとなって十字架で死んでくださいました。本来なら罪人であるわたしたち人間が背負わなければならない罪の重荷を、罪のない神の子であるイエスさまがすべて背負ってくださり、わたしたちの罪を完全に贖ってくださったのです。王さまであるイエスさまご自身が、ろばの子となって人間の罪の重荷を背負ってくださったのです。これによって、神さまとわたしたち人間との間に和解が生まれ、平和が与えられました（コロサイ1：20）。

しかし、イエスさまの平和はそれだけではありません。イエスさまの愛は、神さまと人間の間にも平和を実現するだけでなく、人間と人間の間にも平和を実現するのです。イエスさまは、「平和を実現する人々は、幸いである。その人たちは神の子と呼ばれる」（マタイ5：9）とおっしゃいました。わたしたちが心からイエスさまを信じ、神

さまの子どもとなる時、わたしたちもイエスさまが愛されたように、お友だちや他の人を愛することへと導かれます。わたしの中にあるイエスさまの愛が、わたしを導いて、平和を実現するために生きるよう励ましてくださるのです。

もちろん、わたしたちはイエスさまを信じ、神の子どもとされていても罪が残っています。ですから、お友だちとケンカをしたり、人を憎んだりしてしまうこともあります。また、この世界からすべての武器や戦争が廃絶され、世界に完全な平和が実現するのは、イエスさまが再び来られる終末の時です。しかし、それでも、イエスさまを信じるわたしたちは、少しずつではあっても、相手と仲良くすること、争いを止めて平和に生きることができるよう導かれているのです。ですから、わたしたちも自分の周りで、また世界の様々な所で苦しんでいる人、悲しんでいる人のために祈り、自分にできることをして仕えていくことが大切です。また、ケンカをしてはいけない、戦争をしてはいけないという声を、勇気を出してみんなに伝えて行くことが必要です。そのようにしてイエスさまの平和は前進してくのです。

いつの時代も、この世の権力者たちは、国を守るため、平和を守るためには軍事力が必要だ、武器や戦車、戦闘機が必要だと言います。そうやって国民を戦争に駆り立てて行きます。しかし、イエスさまは、「剣を取る者は皆、剣で滅びる」（マタイ26：52）とおっしゃって、軍備で平和を守ることはできないと教えておられます。大切なことはイエスさまが、わたしたちを愛し、信頼することによって、平和を実現させてくださったように、わたしたちも力に頼ることを止めて、イエスさまの愛を信じ、隣人を信頼し、愛する勇気を持つことです。イエスさまは必ずこの世界に平和を実現させてくださいます。教会はそのことを信じ、世にあって平和の砦となって、どんな時も戦争に反対し、すべての民の平和のために祈り続けます。（弓矢健児）

---

#### 《今週の暗唱聖句》

彼らは剣を打ち直して鋏とし、槍を打ち直して鎌とする。国は国に向かって剣を上げず、もはや戦うことを学ばない。（イザヤ書2章4節）

8月12日

【幼稚科】

## 平和を実現する

### 〈ねらい〉

けんかしたことのない子はいません。神さまは、けんかを悲しまれます。神さまに喜ばれる道はけんかではなく優しくすることにあることを教え、共に優しい心と行動を祈り求め、実践してみましよう。

### 〈展開例〉

国と国とが武器をもってけんかすることを戦争と言います。戦争は大人の人たちがするものです。だったら私には関係ないのでしょうか。違います。昔も今も、戦争で最初に傷つき、殺されてしまうのは、子どもたちやおじいちゃんやおばあちゃんです。

戦争しないための一番よい方法を知っていますか。人を殺す武器を持たないことです。戦争を始めるのは、いつも国の偉い人たちです。だから、そういう人たちに、絶対戦争してはだめだという「決まり」をつくってあげました。それを憲法と言います。イエスさまの教会は、この決まりを大切にしようと真剣に考えています。何故なら、聖書に書いてあることととても近い考えだからです。

神さまは聖書を通して、自分たちの国を守るのは武器ではなくて神さま御自身だと信じるようにお命じになりました。

イエスさまは、ユダヤ人の王様で、世界の王様です。多くの王様は、武器になる大きくて立派な馬が大好きです。それに乗りたがります。ところがイエスさまは、エル

サレムの都に入るために、ろば、それも子どものろばに乗って来られました。それは、「もう、これからは戦争なんて絶対ダメだよ」という意味です。

どうして人と人が殺し合うのでしょうか。それは大きな大きなけんかのようなものです。あなたはけんかしたことがありますか。友だちや兄弟のものが欲しいと言って、取ってしまったたり、大泣きして欲しがってお父さんやお母さんをこまらせたことがありますか。戦争は、人の心の中で始まるのです。そして、それは、イエスさまに喜ばれないですね。

ろばに乗るイエスさまは、自分のものを困っている人に分け与えてくださいました。けんかの反対は、やさしくすることです。そんな子になれば、イエスさまに喜ばれることは間違いありません。先生もそうなりたいです。一緒にお祈りしましょう。

### 〈やってみよう〉

けんかをしない方法は、自分からあやまることです。自分から誰かにやさしくすることです。今朝、自分から優しくしてみよう。大人の人やお兄ちゃんお姉ちゃんに自分から「おはよう」と挨拶してみましよう。

### 〈お祈り〉

天のお父さま、けんかをしたら、自分からごめんなさいと言えるようにしてください。イエスさまに喜ばれるやさしい心を与えて下さい。 アーメン

8月12日

【小学科上級・中学科】

## 平和を実現する

1. ゼカリヤ9：9～10を読みましょう。

① 9～10節では何が語られていますか。

② 「あなたの王」「神に従い、勝利を与えられた者」とは誰ですか。

③ イエスがこの世に来られて、世の中に何が告げられますか。

④ 男がイエスに願ったことは何ですか。

⑤ 平和を実現されたイエスにより、私たちはどう変わるべきだと思いますか。

8月19日 ルカによる福音書9章28～36節

【解説と黙想】

## 主の変貌

この箇所は、ペトロの信仰告白、主の受難と死の予告、弟子の条件に関する主の教えの直後に位置する。

主の栄光の姿への変貌は、主イエスの神としての在り方（神性）が、人間としての存在（人性）を通して現れたものだ、と断定されるべきではない。むしろここでの主の変貌は十字架の後に来る、栄光の前味と理解されている。すなわち、主の変貌と一連の幻は、神の世界からの栄光の啓示と見られているのである。主イエスは、神の世界に属する御方。また、主イエスの変貌は、最初から御受難の予告と結合しているのである。

28節：三人の弟子たちは、特別、主に信頼されていた者たちであったと思われる。

29節：主の変貌は、祈りの最中に起こった。ルカによると、主は、洗礼の際にも、祈っておられた。そのことは二つの記事が内的に密接に関連していることを示す。御顔の輝きは、マタイ17章2節では、「太陽のように輝き」とあり、服の輝きは、ルカの記述においては、稲妻のような閃光に関して用いられる語を使用している。マルコ9章3節は「この世のどんなさらし職人の腕も及ばぬほど」と記している。この光の輝きから、幻は天からの啓示であると理解される。

30, 31節：モーセとエリヤの出現は、栄光に包まれていることから、幻の一部であることが分かる。モーセは偉大な律法の授与者であり、エリヤは偉大な預言者の代表である。両者共、偉大な神の人である。旧約聖書を代表する偉大な神の人が、主イエスの最期に関して語り合っている場面なのである。

変貌の記事は、主の栄光が、主の「最期」と係りあるものであることを告げる。「最期」という言葉は、「脱出」という語が用

いられる。神がエジプトから御自分の民を脱出させられたことと重なる。

32節：ペトロたちはひどく眠かったとあるが、それは夜であったからであろう。山登りは夕方になってはじめて可能である。主も夜を徹して祈られた（ルカ6：12）。睡魔に襲われた弟子たちは、光によって目を覚まし、主の変貌を目撃したと思われる。

33節：「仮小屋」という語は天幕や幕屋の意味で用いられる言葉である。

34, 35節：雲は神の御臨在を現している。声は天の父なる神の声である。「わたしの子」は、洗礼を受けられた時にあった天の声と呼応している。

「選ばれた者」とは、神の働きのために任命された者という意味である（イザヤ42：1）。これによって父は主イエスをメシア（救い主）であると宣言されているのである。

「これに聞け」とは、父なる神が、律法（モーセ）と預言者（エリヤ）を凌駕した存在として、主イエスを認めておられることを示している。

30節から35節の場面は、主イエスが父なる神の御計画により、神の御計画の中心に置かれているということを示している。モーセとエリヤは、来るべき救いの証人として、主の最期によって、自分たちの預言活動が満たされることを告白し、主の御受難に対する神の然りを受け取っているのである。

36節：「沈黙を守」ったのは、誰も証言を信じなかったから、というより、弟子たち自身、その意味を理解できなかったからだと思われる。語る必然性も無かった。しかし、やがて、その意味は明確にされていくのである。（袴田清子）

《参照箇所》 マタイ17：1～13節、マルコ9：2～13節、詩編2編、イザヤ書42章。  
《教理問答》 ウェストミンスター信仰告白8章3節

8月19日 ルカによる福音書9章28～36節

【説教展開例】

## 主の変貌

◇..... 単元のねらい .....◇

栄光の王イエスのへりくだりのゆえに救われて、十字架を担う教会もやがて栄光に輝くことを覚えて歩む。

### 「主イエスに従う」

主イエスは弟子たちに尋ねられました。「人々はわたしのことを誰だと言っていますか？」弟子たちは答えました。「『洗礼者ヨハネだ』とか、『エリヤだ』とか、『昔の預言者の一人が生き返ったのだ』とか言っています。「それでは、あなたがたは、私を誰だと言いますか？」ペトロは言いました。「神からのメシアです」。

このように、ペトロは主イエスの事を正しく告白しました。すると今度は、主イエスが御自分に関して、恐ろしいことを予告されたのです。「人の子(わたし)は、必ず、多くの苦しみを受けて、長老、祭司長、律法学者から除け者にされ、殺される。そして三日後に復活することになっています。弟子たちは、みんな驚いてしまいました。更に、主イエスはこのようにも言われました、「わたしについて来たい者は、自分を捨て、日々、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい」。

そのお話を聞いてから、1週間程経ってから、主イエスは、ペトロ、ヨハネ、ヤコブの三人を連れて、お祈りをするために山に登られました。主イエスは、御自分の御受難と死に関して、父なる神さまに相談するため、特別な弟子たちを連れて、お祈りに行かれたのです。

それなのに、三人の弟子たちは、ずっと山を登って来たこともあり、疲れて、酷い

眠気に襲われていました。

主がお祈りをされていると、何と、主の御顔の様子が変わり、太陽のように輝きだしたのです。服は稲妻の閃光のように、まばゆい光に輝き始めました。主イエスは普段と全く違った栄光の姿に変わってゆかれたのです。そして、目を覚ました弟子たちがよく見ると、モーセとエリヤと主イエスが、何やら語り合っておられました。モーセと言えば、シナイ山で十戒を授かった、偉大な神の人です。また、エリヤと言えば、火の車に乗って、天に昇って行った、偉大な預言者です。その二人も栄光に包まれて現れたのです。そして二人は、主がエルサレムで遂げられる最期について話していたのです。

いよいよ、モーセとエリヤが離れようとした時です。ペトロは、目の前の栄光が余りにも素晴らしいので、それが終わってしまわないように、このように言いました。「仮小屋を三つ建てましょう。一つは主のため、一つはモーセのため、一つはエリヤのためです」。仮小屋とは、天幕あるいは幕屋の事を言っています。つまり、神さまが宿られる場所をそこに建てましょう、と言ったのです。「行ってしまわないで欲しい」と思ったのです。でも、ペトロは自分でも何を言っているのか、分からなかったのです。

すると、父なる神さまの御臨在の雲が現れて、主イエス、モーセ、エリヤが雲の中

に包まれていきました。神さまの臨在を近くに感じたので弟子達は、恐ろしくなりました。と同時に、主イエス、モーセ、エリアが皆、天に引き上げられて、目の前から、いなくなってしまうのではないかと心配しました。

その時です。雲の中から父なる神さまの声がしました。「これはわたしの子。選ばれた者。これに聞け」。主が洗礼を受けられた時に聞こえた御言葉と同じです。洗礼の時には「わたしの愛する子、わたしの心に適う者」と言う声でした。天の父なる神さまからの確証の声だったのです。主イエスは、神さまが「わたしの子」とお呼びになる「神の御子」であるのです。そして、選ばれた者、つまり神のメシアであるのです。つい先日、ペトロが主イエスに告白した通りでした。父なる神さまの声によって、主イエスこそが神からのメシアであると確証されたのです。つまり、主イエスは神さまの御心に適う御方だったのです。

主イエスが洗礼を受けられ、天から声が出した時には、ペトロ、ヨハネ、ヤコブはそこに居ませんでした。しかし、ここで明確に、主イエスこそが、神の子、選ばれたメシアであると承認されています。そして、弟子たちは、「これに聞け」と命令されているのです。私達も、天の神さまの命令のように、主イエスに「聞く」べき、なのです。「聞く」とは、聞き従う、服従するという意味です。モーセやエリヤを超えて、私たちが聞き従うべきもっとも栄光に輝く御方、それが主イエスなのです。

主イエスにとって、この山の上での出来事は、御自身の苦しみと死を確証することでありました。それは、人間からは捨てられる、殺されることを確かにする出来事で

した。けれども、それこそが、主の栄光でありました。父なる神さまによって、そのために立てられているということだったのです。この主イエスの変貌は、苦難こそが主の栄光であり、その向こうに、もっと素晴らしい栄光があることを指し示していました。神の御子である、メシアは、多くの苦しみを受けてから、栄光を受けられる。メシアは、多くの苦しみを受けてから、栄光に入るのです。山での変貌の出来事は、主イエスの義務であり、これは、父なる神さまの御計画である、主イエスの最期とその後の栄光を啓示するものでした。

主イエスは、「わたしについて来たい者は、自分を捨て、日々、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい。自分の命を救いたいと思う者は、それを失うが、わたしのために命を失う者は、それを救うのである」と語っておられました。それは、主が、私たち自身が背負わなくてはならない、罪の罰と呪いとしての十字架を背負って、代わりに死んで下さったことに弟子は習うべきだからです。しかし、実は、主の十字架に比べると、私たちに負わされる主の十字架は軽いのです。主イエスの弟子は、主イエスに聞き従うように、召され、命じられています。そして、その向こうには栄光が輝いています。

主の十字架の御苦しみと死の後に、天の父なる神さまから与えられる、それ以上ない栄光が待っているのです。私たちも主イエスの十字架のゆえに赦されて、やがて、栄光に輝くことができる者とされました。自分の十字架を担って主に従う道は、やがて、朽ちることのない永遠の天の御国の栄光に与り、神の栄光に輝く道なのです。

(袴田清子)

---

#### 《今週の暗唱聖句》

(キリストは……) 人間の姿で現れ、へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした。このため、神はキリストを高く上げ、あらゆる名にまさる名をお与えになりました。(フィリピ2章6～9節)

8月19日

【幼稚科】

## 主の変貌

### 〈ねらい〉

「これは私の子、選ばれた者。これに聞け」と神さまが宣言されたことを覚えます。イエスさまが神の御子であること、その十字架のおかげで、イエスさまに従う私たちでも、主の栄光をあらわせる神の子とされた恵みを感謝しましょう。

### 〈展開例〉

幼児科のみなさん、おはようございます。今日も元気に教会に来れたことを神さまに心から感謝します。みんな、今日はどうやって教会に来たかな？ お父さんが車を運転してくれた？ それともお母さん？ 自転車できたかな？ それとも歩いて来たかな？

どんな方法で誰と教会に来たとしても、実は、ある方が「教会においで」と言って連れて来てくださらなければ来ることができませんでした。誰がみんなに「おいで！」と呼んでくださったのでしょうか……？ そう！ それは天の神さまですね。

もう一つ質問です。天のお父さまの御子、ひとり子は誰ですか？ ヒント。イ○スさまです。

父なる神さまは、御子のイエスさまをとっても愛しておられます。そして同じくらい、いやそれ以上と言っていいほどに私たちのことも愛してくださっています。神さまはイエスさまの十字架のお苦しみを通して私たちを神さまの子どもとしてくださったからです。だからみんなは、神さまのことを「お父さん・パパ」と呼ぶことが

できるのです。すごいよね！ 天の神さまが、私たちのお父さんとなってお守りくださるのです。

私たちはイエスさまのおかげで、神さまがどのようなお方なのかを知ることができるようになりました。聖書には、イエスさまのお顔が栄光に輝き、服も真っ白に輝いた（ルカ9：29、32）と書いてあります。

ちょっと想像してみましょう。神さまは、私たちにはイエスさまのことを知ると、あなたも同じように光り輝く、と言っておられます。あなたをこの世を照らす光の子、と呼んでくださっているのです。みんな、自分がキラキラと美しい神さまの子どもとされている姿が見えましたか。うれしいね。

今週も、天のお父さまに守られて、光の子として毎日元気に過ごせるように、一緒にお祈りしましょう。

### 〈やってみよう〉

HoiCuleで検索すると、数多くの使える幼稚向けの製作ネタ、遊びのネタが見つかります。分級の子も達に合わせて一度探してみても……。 <https://hoiclue.jp>

### 〈お祈り〉

私たちの天のお父さま。今日も教会に来なさい、と神さまのもとへ呼んでくださりありがとうございます。今週も神さまに愛されている光の子どもとして元気に保育園や幼稚園に行けますようにお守りください。アーメン

8月19日

【小学科上級・中学科】

## 主の変貌

### 1. ルカ9：28, 29を読みましょう。

①山に登られる時、イエス様は弟子たちを何人連れていきましたか。またそれは誰でしたか。

②イエス様の様子は、いつ、どのように変わられましたか。

### 2. ルカ9：30～32を読みましょう。

①「二人の人」はそれぞれ誰で、どんな人ですか。

②ペトロたちが眠かったのはなぜですか。彼らに見えた光景は何でしたか。

### 3. ルカ9：33～36を読みましょう。

①ペトロがイエス様に言った「仮小屋」とは何ですか。

②蜘蛛が現れ、どんな様子になりましたか。なぜ、弟子たちは見たことを話さなかったのでしょうか。

8月26日 ルカによる福音書9章51～62節

【解説と黙想】

## 弟子の覚悟

「イエスは、天に上げられる時期が近づくと、エルサレムに向かう決意を固められた」(51節)。これは、ルカによる福音書の中での一つの区切りと言える場面です。

これまでイエスさまは、ガリラヤを中心に神の国の福音を宣べ伝えてこられました。しかし、ここでイエスさまは決意を固められて(新改訳：イエスは、エルサレムに行こうとして御顔をまっすぐ向けられ、)御自身の顔をまっすぐ前に向けられて、エルサレムへ、十字架へ向けて進まれるのです。十字架は、ただの死で終わる歩みではありません。その後、御自身が復活し、栄光の内に「天に上げられる」、この栄光の時を仰ぎながら、主はエルサレムに向かわれます。

その途中、使いの者たちがサマリア人の村に入りましたが、サマリア人たちはエルサレムに向かうイエスを受け入れませんでした。

サマリア人は、北イスラエル王国が滅亡した時(列王記下16章)、アッシリアの占領によって異民族がサマリアに連れて来られ、その異民族がサマリアに残されていたイスラエルの民と混血の結果生まれた民とされています。

そして、サマリア人は、イスラエルとは宗教的にも異なり、エルサレムとは違った場所に神殿を立てて、教団としての独自の歩みをしていました。そのため、「エルサレムに向かう」主を彼らは受け入れなかったのです。

弟子のヤコブとヨハネは、旧約時代の預言者エリヤのように(列王記下1章)、このサマリア人たちを天からの火で焼き滅ぼすようにイエスさまに願いますが、そうすることは主の御心ではありませんでした。主は二人を戒めて、御自身の目的に向けて前に進んで行かれます。

57節に「弟子の覚悟」というテーマがあるように、今回の中心となる箇所は、57節以降です。ルカによる福音書では、今日の箇所の前後に弟子に対する主イエスの教えが繰り返し語られています(9:46～48、49～50、10:1～12)。特にこの箇所を中心に、イエスさまの弟子として、十字架の主に従う、ことの恵みを子供たちと共に覚

ることができればと思います。

十字架へ向けて進まれる主イエスに、ある人が、あなたにどこへでも従います、と言いました。これは、立派な信仰の言葉のように見えるかもしれませんが、主はこの人に「狐には穴があり、空の鳥には巣がある。だが、人の子には枕する所もない」(58節)と、狐にさえ穴があり、空の鳥でさえ巣があるのに、御自分は、人々から歓迎されず(53節)、理解されない、という十字架の苦しみを語られました。主に従う、ということは、主の苦しみを担って生きる、ことに他なりません。

別の人は、父を葬りに行かせてください、と言います。また、もう一人の人は、まずはあなたに従う前に、家族にいとまごいさせてください、と言いました。

父親を葬ること自体は、もちろん大切なことですし(十戒の第5戒)、家族を大切にすることも同様です。ただ、イエスさまはここで、死んでいる者たち(イエスの命に与っていない者たち)に死者を葬らせなさい、と言われます。また、鋤に手をかけていながら後ろを向く者はふさわしくない、と言われました。

ここで主イエスが語られる要点は、要するに、私たちがイエスを第一にする、ということにあります。他のものが第一で、イエスは二の次、という姿勢を、主はここで戒めておられるのです。

私たちは、ここで言われていることは、あまりにも厳しいのではないか、と思うかもしれませんが、子どもたちと共に覚えたいのは、何よりも、主イエス御自身が私たち罪人のために、御自身を捨ててくださった、ということです。主は、繰り返し十字架の死について語られ(9:22、44)、自ら顔をまっすぐに前に向けられて、私たち罪人のために十字架に向かわれ、神の国への道を開いてくださいました。

イエスさまの私たちへの招きは、あくまでも、「わたしに従いなさい」(59節)です。主イエスの十字架に示された神の愛は、私たちを、後ろを顧みずに、ただ顔をまっすぐに向けて従う歩みへと導きます。

(宮崎契一)

8月26日 ルカによる福音書9章51～62節

【説教展開例】

## 弟子の覚悟

◇..... 単元のねらい .....◇

主イエスは、神を知らず罪の内に滅びる歩みをしていた一人一人と出会われ、御自分の弟子として従うことを求めておられる。それは十字架を背負った歩みだが、何よりもそれは、その苦難の先にある天に向けた歩みであることを覚えたい。

### 「十字架のイエスさまについて行く」

今日の箇所には、イエスさまが決意を固められた、と言われるように、これまであまり見られなかったイエスさまの強い思いがあります。イエスさまは、顔をまっすぐに前に向けられて、エルサレムへ向かおうとされています。

何のためにエルサレムに行かれるのでしょうか。それは十字架です。イエスさまは、私たち罪人の身代わりとなって、十字架にお掛かりになるために、この世に来てくださいました。

みなさんは、死ぬ、というと、あまり良いイメージがないかもしれません。死んだら全部終わる、というイメージがあるかもしれません。

けれども、イエスさまの死は違います。イエスさまの死は、むしろ命への始まりでした。イエスさまは、十字架の死から三日目に復活をされます。そして、神さまのおられる栄光の天に上げられるのです。イエスさまは、御自分がやがてそのような栄光に入れられることを確かに覚えながら、ここで十字架に向かって進まれています。

そして、ここでイエスさまが私たちに求めておられることがあります。それは、「わ

たしに従いなさい」ということです。従いなさい、と言われても、みんなはあまり良い感じがしないかもしれません。お父さん、お母さんや、学校の先生にそう言われても、それを喜ぶ人はあまりいないのかもしれませんが。

けれども、聖書を見ると、イエスさまが、わたしに従いなさい、と言われた時、弟子たちはすべてを捨ててイエスさまに従って行きました。それは、イエスさまと出会う中で、自分が神さまの前にどれだけ罪深い人間であるかを知らされたからです。そして、イエスさまこそ、そのような自分自身に触れて下さり、命を与えてくださる方であることが分かったからです。

私たちがイエスさまに従うことは、深い喜びと言えるものです。それは、イエスさまに従うところには、私たちにとっての本当の命があり、必ず最後は天の国の喜びに終わるものであるからです。イエスさまは、そのために、十字架にお掛かりになり、三日目に復活され、天に上げられるまでの歩みをなさいます。イエスさまこそ、罪人である私たちを本当に助けてくださる方です。この方が、従いなさい、と言われるのです。

ただ、イエスさまに従うことは、私たちにとって単純で簡単なことではありません。サマリア人のように、イエスさまを受け入れない人たちもこの世に多くいます。また、人の子には枕する所もない、とイエスさまは十字架に向けて歩まれる御自分の大きな苦しみを語られました。またイエスさまは、父親をまず葬りに行くことも許さず、まず自分の家族に別れを告げることさえ良いことだとは言われません。まず、第一に、わたしに従いなさい、と言われるのです。

みんなは、そのようにイエスさまの後に

ついて行くことはできるでしょうか。イエスさまは、みんなにも神さまの子どもとして生きてほしい、とっておられます。何よりも神さまの子供として、わたしに従い、やがて、神さまのおられる天に向けて生きる人になってほしい、と願っておられます。

そのために、イエスさまは御自分を捨てるほどに私たちを愛し、天を仰ぎながら、十字架にお掛かりになろうとしています。

私たちは、そのようなイエスさまの愛を受け取って、素直にイエスさまの後について行きたいと思います。そして、神さまの命の喜びを受け取りたいと思います。

(宮崎契一)

---

《今週の暗唱聖句》

鋤に手をかけてから後ろを顧みる者は、神の国にふさわしくない。(ルカによる福音書 9章62節)

8月26日

【幼稚科】

## 弟子の覚悟

### 〈ねらい〉

イエスさまを信じるとは、イエスさまに従いともに歩むことです。確かにその道は、厳しい道です。けれどももし自分勝手な道を歩むなら、最後は滅んでしまいます。イエスさまは、私たちの将来を思って、「ついて来い」と力強く招いて私たちを救ってくださいます。イエスさまと共に歩む幸いを感謝し、弟子とやらせていただきますよう。

### 〈展開例〉

知らない人から声をかけられてもついて行ってはだめです。どうしてダメなのかな。それは、あなたを悪いところに連れて行ってしまふかもしれないからです。

先生のお母さんが先生の家でしばらく過ごしていたときの事です。ひとりで散歩に出かけました。足も体の調子もとても良くなったので、嬉しくなってどんどん歩いてしまったのです。とうとう、迷子になってしまいました。ところが、ひとりの人が声をかけてくれて教会の近くまで一緒に歩いてくださったのです。本当に親切な人で、助かりました。

イエスさまは、神さまの教えを広めるために「わたしに従いなさい。ついて来なさい」と命じられました。ついて来た人を弟子にするためです。イエスさまは、イエスさまを信じるすべての人をイエスさまのお役にたつ弟子にしてくださいます。

どうしてイエスさまは、みんなを弟子にしたがるのでしょうか。それは、みんなが

神さまのこどもだからです。神の子どもらしくキラキラ輝いて、神さまのお手伝いをさせるためです。もう一つの理由は、イエスさまと共に歩む道以外に、天のお父さまのところに行けないからです。

ただその道は、ときどき、楽しくなかったり、嫌だなど思ったりしてしまうときがあります。今日はどうでしたか？ たしかに、自分の好きな道をどんどん進めると、そのときは楽しいかもしれませんが、迷子になってお家に戻れなくなったら、大変ですね。

イエスさまの弟子は、教会に来る人です。いろいろな理由で教会に来たくない時があるかもしれません。でも、イエスさまは私たちのために思って「来なさい」と呼んでくださるのです。あなたも、小さなイエスさまのお弟子さんです。うれしいね。先生といっしょによいお弟子さんにしてもらおう。

### 〈やってみよう〉

迷路に挑戦！ イエスさまがゴールになる迷路をつくりましょう。私たちからスタートするとなかなかゴールにたどりつきません。けれどもイエスさまからスタートすると……！ イエスさまは「ついて来なさい」と声をかけに来てくださったのです。

### 〈お祈り〉

天のお父さま、イエスさまと一緒に歩めるようにしてください。イエスさまの弟子として輝かせてください。アーメン。

8月26日

【小学科上級・中学科】

## 弟子の覚悟

1. ルカ9：51～56を読みましょう。

①イエス様は、どこに向かう決意をされましたか。

②村人の反応は、どんなものでしたか。

③弟子たちはそれを見て、何をしようと思いましたか。また、イエス様はそのことについてどうされましたか。

2. ルカ9：57～62を読みましょう。

①イエス様に従うと言う人に、イエス様は何と言われましたか。

②イエス様が「わたしに従いなさい」と言われた時、その人はどう答えましたか。

③別の人は何と言い、イエス様は何と答えられましたか。

9月2日 ルカによる福音書10章1～20節

【解説と黙想】

## 七十二人を派遣する

10章1～24節には、主イエスが弟子たちを福音宣教に遣わして訓練されたことが書き留められている。大きく四つに区分できる。①七十二人に対する主イエスの教え(1～12)、②彼らを拒む町への裁き(13～16)、③七十二人の帰還と報告(17～20)、④主イエスの祈りと祝福(21～24)。

9章1～6節で十二人が派遣され、その「ほかに」(1)ここで七十二人が派遣された。創世記10章のノアの子孫の系図がこの背景にあると推測されている。福音書記者ルカは異邦人キリスト者であり、異邦人への宣教、全世界への宣教を念頭に置いていると思われる。十二人がいわば新しい神の民の族長であるのに対して、七十二人は全世界の民に遣わされた使者なのである。この記事は、初代教会の福音宣教を思い浮かべて執筆されていると言うことができる。

主イエスは七十二人を「ご自分が行くつもり」(1)町や村に派遣した。けれども、主イエスが実際に行ったと記されないまま、彼らは帰って来る。初代教会の福音宣教を念頭に置くと、これは真実には、彼ら七十二人と共に主イエスご自身が同行しておられる、と理解することができる。主イエスが霊的に彼らと共におられ、それゆえ彼らは悪霊を屈服させることができた。彼らは使者であり、福音宣教は本質的に主の御業である。敵の力に打ち勝つ権威も主のものにほかならない(19)。二人ずつ遣わされるのも、証言の確かさ(申命記19:15)だけでなく、「二人または三人がわたしの名によって集まるところには、わたしもその中にいるのである」(マタイ18:20)

ということだろう。主ご自身が共におられるゆえに、狼の群れに小羊を送り込むようなものであっても恐れる必要がない。また、目に見える結果を求めるのではなく、自らの名が天に書き記されていることを喜びとする謙そんな態度が必要とされる(20)。

「収穫は多いが、働き手が少ない」(2)。これはいつの時代にも真理である。福音宣教は収穫のために働き手を求める祈りから始まる。収穫のために働き手を祈り求めるところで、私たちは自らが主によって遣わされることを知るのである。

3～12節に、福音宣教のための具体的な手引きが書き留められる。これらは多少の文言の違いはあるが、十二人の派遣の記事と重複している。財布も袋も履物も不要なのは、必要なものを備えてくださる主を信頼するからである。「挨拶をするな」とは挨拶そのものの禁止ではなく、途中で無駄な時間を割かないための注意。「出される物を食べ、また飲みなさい」とは、聖いかけがれているかを見極める必要がないということ。もはや主のゆえにすべてが聖いからである(コリント一10:27)。

語るべきメッセージは、「平和があるように」(5)と「神の国はあなたがたに近づいた」(9)である。神の国とは神の支配であり、神の支配するところに神の平和と祝福がある。主イエスは神の平和の実現のために十字架につけられた(ヨハネ20:19～23)。それゆえ、これらは本質的に一つである。キリストの十字架による和解の恵み、平和の福音を告げ知らせることが、キリストの使者の務めである。(望月 信)

《参照箇所》 ルカ9章1～6節、マタイ10章5～25節  
《教理問答》 「子どもと親のカテキズム」問44

9月2日 ルカによる福音書10章1～20節

【説教展開例】

## 七十二人を派遣する

◇……………単元のねらい……………◇

主イエス・キリストはご自分の弟子たちを用いて宣教活動を成し遂げてくださる。今、私たちもそれぞれ主イエスの弟子として遣わされている。『子どもと親のカテキズム』問44の答、「イエスさまは教会に、全世界に出て行って福音を宣べ伝えること……（使命）を与えられました」を念頭において、子どもたちを福音に仕えることへと励ましたい。

### 「イエスさまと一緒に宣べ伝えよう」

イエスさまの弟子として十二弟子がよく知られています。けれども、イエスさまの弟子は、もっとたくさんいました。今日の箇所には七十二人の弟子が登場します。

イエスさまは、このとき、その七十に人に対して、イエスさまの弟子であるとはどういうことなのか、何のためにイエスさまの弟子であるのかをお教えになりました。教会でイエスさまの御言葉を聞いている私たちもイエスさまの弟子とされています。皆さんもイエスさまの弟子なのです。それでは、私たちはいったい何のためにイエスさまの弟子とされているのでしょうか。

まず心に留めておきたいことは、神さまは私たちのことを愛してくださっています。このわたし、また皆さん一人ひとりを愛してくださっています。ですから、私たち一人ひとりがイエスさまによって罪を赦され、救いの恵みをいただくことが大切です。私たちがイエスさまの弟子とされるのは、一つは私たち自身のため、私たち自身が神のものとされるためです。イエスさまは、「あなたがたの名が天に書き記されていることを喜びなさい」とおっしゃいました。おもしろい表現ですね。天の神の国の名簿のようなものがあって、そこに名前が刻まれている。神のものとされて、この私の名前も載っている。そのことを喜びなさいとおっしゃる。ですから、私たちはまず自分自身が天の神さまのものとされるため

にイエスさまの御言葉を聞いて、イエスさまの弟子とされています。ですから、自分自身の救いをいよいよ確かなものとすることができるよう祈りましょう。

そして、もう一つ、この御言葉で教えられていることは、イエスさまの御言葉、神さまの福音を宣べ伝えることです。それが私たちイエスさまの弟子の大切な役割だと、イエスさまは教えておられます。それは、神さまが愛しておられるのは、私たちだけではないからです。神さまはとても大きな愛をお持ちです。その大きな愛で、独り子であるイエスさまさえ惜しむことなく私たちのために与えて、十字架につけてくださいました。ですから、イエスさまの十字架は私たちのためだけではない。まだイエスさまを知らない、けれども神さまが愛して選んでおられる人たちがたくさんおられるのです。その人たちを見つけ出すために御言葉を宣べ伝えなさい。そうおっしゃっておられます。

イエスさまは「収穫は多いが、働き手が少ない」とおっしゃいました。神さまの目には、多くの人が福音を待ち望んでいることが見えておられます。それで、「だから、収穫のために働き手を送ってくださるよう、収穫の主に願いなさい」と言って、イエスさまの御言葉を聞く喜びを知っている私たちを送り出されます。これは、どこからだれかがやって来て働き手になるとい

うことではありません。イエスさまは、私たち一人ひとりが神さまの福音を宣べ伝えるイエスさまの働き手となるように、送り出そうとしておられるのです。

そんなことを言われても、御言葉を私たちが伝えるなんて、できるのだろうか。そんなふうに思いますか。イエスさまの御言葉を聞くために来ているのに、自分が伝えるなんて、とんでもない。そう思うかもしれません。たぶん、集まっていた弟子たちも驚いたでしょうね。十二弟子はイエスさまと最初の頃から一緒にいて、寝たり食ったりも一緒にしているから、弟子として送り出されてよいだろう。けれども、イエスさまの御言葉を聞いているだけの自分たちには難しい。そう思ったかもしれません。これはとても不思議なことですが、神さまは、そんなふうに戸惑い、尻込みする人を用いてくださるお方です。それは、このとき送り出された七十二人の弟子たちも、おそらく戸惑いながら、おっかなびっくり出かけて行ったでしょう。けれども、不安に思う必要はありませんでした。立派に役割を果たして、喜んで帰って来ることができたのです。

それは、皆さんが出かけて行くとき、それは皆さんだけで出かけるのではないからです。私たちが福音を宣べ伝えるとき、そこにはいつもイエスさまが共にいてくださいます。目には見えないけれども、霊的にイエスさまと一緒にいてくださいます。イエスさまは、イエスさまの御言葉を聞くために集まる私たちといつも一緒にいると約束されました。この御言葉に「二人ずつ」遣わされたとありますね。二人ずつ、それはイエスさまを信じる者が二人三人集まる場所にイエスさまご自身が共におられるからです。イエスさまは私たちに聖霊を与えてくださって、目には見えませんが、共にいてくださいます。ですから、私たちはきちんと役割を果たすことができます。で

すから、不安に思うことも恐れることもありません。

イエスさまは、「狼の群れに小羊を送り込むようなものだ」とおっしゃいました。そのように、弟子として福音を宣べ伝えるとはもちろん簡単なことではありません。聖書の話など聞きたくないと言う人がいるでしょう。反対してくる人がいるかもしれません。けれども、小羊を守り導く大牧者であるイエスさまご自身が私たちと共にいてくださって守られます。大丈夫なのです。「財布も袋も履き物も持って行くな」とおっしゃいました。すべて天の父なる神さまが用意しておられるからです。天の御父を信じなさいということなのです。そして事実、このとき送り出された七十二人は、不安を感じながら出て行ったでしょうけれども、大丈夫であった。喜びながら帰って来ることができました。それは、私たちも同じです。ここにいるおとなの人たちも、不安がありますけれども宣べ伝えていきます。そして、確かにイエスさまと一緒にいてくださって、大丈夫なのです。

具体的に皆さんにお願いします。一つは、自分が教会に行っていること、聖書を読んでいることをお友だちに隠さないということです。隠さなくても大丈夫です。イエスさまが守ってくださり、そのことを変だと言わない、理解してくれるお友だちを必ず与えてくださいます。もう一つは、そうして仲良くなったお友だちを教会の子ども向けの集会にぜひ誘ってください。誘うだけで大丈夫です。それだけで十分、イエスさまの福音を宣べ伝えているのです。応えて来てくれるお友だちを神さまが必ず用意しておられます。人を育てるのは神さまです。私たちは、神さまが選んで育てておられる人を見つけて誘うことに励むのです。イエスさまの導きと祝福が皆さんの上に豊かであるよう、心からお祈りしています。

(望月 信)

《今週の暗唱聖句》

収穫は多いが、働き手が少ない。だから、収穫のために働き手を送ってくださるように、収穫の主に願いなさい。(マタイによる福音書9章37, 38節)

9月2日

【幼稚科】

## 七十二人を派遣する

### 〈ねらい〉

子どもたちも含めて私たちがみなイエスさまに派遣されていることを知る。

### 〈展開例〉

おはようございます。

今日の話には、イエスさまのお弟子さんたちがたくさん出てきます。全部で七十二人です。たくさんですねえ。わたしたちの教会学校は何人いるのでしょうか？ 知っていますか？ ○○ちゃんに、○○くん、○○さん、○○先生に、全部で十人ですね。大人の礼拝の時には三十人くらいいます。イエスさまのお弟子さんたちは、それよりももっとずっといっぱいいました。イエスさまは、そのお弟子さんたちに、イエスさまのお話をするようにとおっしゃったんですね。

みんなはイエスさまのことをお話し出来

ますか？ どんなお話を知っていますか？ お友だちやみんなに、イエスさまのお話をしてあげましょうね。

### 〈お祈り〉

神さま。今日も教会学校に来ることができてありがとうございます。私たちはみんなイエスさまのお弟子さんです。私たちもイエスさまのお話ができるようにしてください。アーメン

### 〈やってみよう〉

画用紙に自分の知っているイエスさまのお話を描いてみよう。その絵を見せながらイエスさまのお話しをしてみよう。

イエスさまのお弟子さんの顔を七十二個描いてみても楽しいです。自分の顔や家族や知り合いの顔もその中に描いてみよう。

9月2日

【小学科上級・中学科】

## 七十二人を派遣する

1. ルカ10：1～12を読みましょう。

①72人の弟子前に派遣されたのは、何人でしたか？ 何をするために、遣わされたのですか？（9：1～6も読みましょう。）

②72人の弟子を遣わしたのは誰ですか？

③イエス様が72人の弟子に命じられたことは何でしたか？

④「収穫」とは、何のことを指していますか？

2. ルカ10：13～16を読みましょう。

①弟子をこぼんだ人は、どなたをこぼんだことになるのですか？

3. ルカ10：17～20を読みましょう。

①帰ってきた弟子たちは、何を喜びましたか？

②イエス様は、何を喜びなさいとおっしゃいましたか？ それはどういう意味でしょうか？

9月9日 エズラ記3章1～13節

【解説と黙想】

## 帰還と再建

紀元前6世紀、イスラエルの都エルサレムは新バビロニア王国によって城壁も神殿も破壊され、地位の高い人や技術や知識のあった人たちは捕虜として連行されて、何十年の間、異郷で暮らすことを余儀なくされました。いわゆるバビロン捕囚です。預言者エレミヤはこれを、神に背いた罰として神から与えられたことであると記しましたが、エレミヤは神の民に対する神の裁きを伝えただけではなく、神の民が神の民として回復させられることも記していました。そのことが、このエズラ記で実現します。新バビロニア王国は新興の大帝国ペルシャに滅ぼされ、ペルシャの王は捕囚されていた神の民の解放を宣言しました(1章)。実に、最初に捕囚された時から65年後のことです。

この時、故郷に帰還した人々が最初にしたことが礼拝でした。何十年という時を経ていますから、帰還した人々の大半は異郷で生まれた新しい世代の人々だったはずですが、異郷にあつての苦難の時も、新しい世代に信仰が伝えられていたのです。エルサレムの町の城壁は崩れたままです。またいつ敵が攻めてくるか分かりません。神殿も崩れたままです。そもそも、帰ってきた人たちの多くは外国で生まれ育った人々です。にもかかわらず、それまでの生活をすべて捨てて帰還したのです。神に礼拝をささげるためにです。私たちが、人間の目に必要と考えることよりも、人間の目に他に優先したいことがあったとしても、何よりもまず最初にすべきことが礼拝なのです。

この時の礼拝では、人々は「焼き尽くす献げ物」をささげました。2節から6節までに6回も、この「焼き尽くす献げ物」と

いう言葉が出てきています。「焼き尽くす献げ物」というのは、全部燃やして煙にして、全てを神に届ける、というささげ方です。人間の取り分はありません。これは、自分自身を神にささげるといふしるしでした。それが礼拝なのです。

この時、神の民は恐れと戦っていました。「彼らはその地の住民に恐れを抱」いたと書かれています(3節)。異教徒の中で礼拝をするとなると、自分たちの身に危険が及ぶかもしれません。それでも、神の民は礼拝をささげたのです。

続いて、人々は神殿の再建にとりかかります。神殿の基礎がすえられた時(10節)、それを見た人たちの反応は二つに分かれました。11節の後半では、人々は大喜びしていますが、12節では、「昔の神殿を見たことのある多くの年取った」人たちがなげき悲しんでいます。昔の神殿はもっと大きかったのに、今はこの程度の神殿しか建てることできない。そのことをなげき悲しんでいるのです。しかし、ハガイ書には、この時のことについて、神のこのような言葉が記されています。わたしは「この神殿を栄光で満たす」(2:7)。「この新しい神殿の栄光は昔の神殿にまさる」(2:9)。この神殿は後に大きな工事がなされて、最初の神殿よりもはるかに大きな神殿になりますが、そのことを言っているではありません。救い主イエス・キリストは、この時に基礎がすえられたこの神殿に入ってこられたのです。神殿の栄光は大きさにあるわけではありません。神の栄光は、誰よりも低くなられて、人に仕え、人を救うところにあります。だからこそ私たちは何よりもまず、神を礼拝するのです。(尾崎 純)

《参照箇所》 ハガイ書2章9節  
《教理問答》 「子どもと親のカテキズム」問4

9月9日 エズラ記3章1～13節

【説教展開例】

## 帰還と再建

◇..... 単元のねらい .....◇

子どもたちにとって、礼拝が退屈な時間になっていないでしょうか。楽しいことがあふれている現代にあって、子どもたちは生き生きと礼拝できているでしょうか。礼拝とはどのようなものであるのかを念頭に置きつつ、この世の喜びを超えた喜びが礼拝にあることを伝えていただきたいと願っています。

### 「礼拝が第一」

皆さんには、とにかくこれが第一、何につけてもこれを第一にする、ということはあるでしょうか。スポーツを挙げる人もいるかもしれませんが、ゲームを挙げる人もいるかもしれませんね。もしかすると、それ以外に、自分はこれだ、っていう趣味を持っている人もいるかもしれません。これが第一、ということを持っていると毎日が楽しくなりますね。だからぜひ、これからもそれを大事にしてください。

ただ、今日少し考えてもらいたいことは、皆さんが第一にしていることは、本当に皆さんにとって第一のことなのか、ということです。スポーツだったり、ゲームだったり、趣味だったり、それが本当に皆さんにとって一番大事な、一番大きなことでしょうか。

聖書は、何が第一であると言っているのでしょうか。それは、礼拝なんです。礼拝って学校の授業みたいで退屈だと思っている人もいるかもしれませんが、でも、学校の授業だったら、先生がいて、皆さんがいて、それだけですよね。礼拝は違います。先生がいて、皆さんがいて、神さまがいてくださる。目には見えないけれども神さまがいてくださっていて、その神さまが皆さんを呼んでくださって、だからみんなは今、ここにいます。神さまが集めてくださったんです。神さまは皆さんのことを第一に愛していて、だから皆さんと会いたくて会いたくて、ここに集めてくださった。それで、聖書は礼拝が第一だって言うんですね。礼拝は私たちが第一に考えてくださる神さまに会う場所だからです。

聖書にはこんな話があります。ずっと昔、神さまを信じているのに礼拝ができなくなっていた時代がありました。どうして礼拝ができなくなっていたかと言うと、外国に攻撃されて、神殿が壊されてしまっていたからです。ずっと昔、旧約聖書の時代には礼拝は神殿でしましたから、神殿がなければ礼拝はできません。そして、壊されたのは神殿だけではありません。町も壊されました。それどころか、たくさんの人たちが外国に連れ去られていってしまって、自分の町に戻ることもできないでいました。そんな時代が何十年も続いたんですね。

ですけれども、その外国はまた別のものと強い外国に滅ぼされました。そうすると、その国の王様は、いろんな国から連れてこられていた人たちに、自分の国に帰ることを許してくれたんですね。そこで、たくさんの人たちが自分の国に帰りました。帰ってきてても、神殿は壊されたままです。町も壊れたままです。皆さんだったら、ここで何をしますか。神殿を建て直すと言う人もいますよね。町を立て直すという人もいますよね。でもこの時、帰ってきた人たちは真っ先に、ずっと昔礼拝をしていたところで礼拝をしたんですね。

これってすごいことだなあとと思います。だって、町は壊れたままです。これだと、安心して生活することもできません。神殿だって壊れたままです。というか、そもそも、この時帰ってきた人たちは、長い人で65年間も外国にいたんです。ということは、もともとのその町に住んでいたことがある人よりも、何十年の間に外国で生まれた人

の方が多かったはずですが、それなのに、その国での生活を全部捨てて、見たこともない町に移ってきたんですね。それは全て、神さまに礼拝をささげるためでした。ということは、年上の人たちは、新しく生まれた子どもたちに、神さまのことを教えていたんですね。礼拝はできなくても、大人たちはみんな、子どもたちに神さまのことを教えていたんです。そして、子どもたちはみんな、神さまのことを信じていたんです。だから私たちのこの教会でも、大人たちは皆さんにこうして神さまのことを伝えていくんですね。神さまは必ず皆さんを守ってくださいよ。神さまはいつも皆さんのことを愛しておられるよ。そのことをずっと伝えてきたんです。だからこうして礼拝ができる。礼拝って、そんな特別なことなんです。

聖書の話に戻りますが、何十年も外国で生活してきたということを考えると、普通に考えたら、もう戻ってこない方がいい、もう今のままこの外国で生活した方がいいということになるかもしれません。戻ってくるにしても、先に町を立て直した方がいいとか、先に神殿を立て直したほうがいいとかいうことになるかもしれません。でも、この人たちはそうはしなかった。何よりも第一に、神さまを礼拝した。この人たちは分かっていたんですね。神さまが生きて働いておられること。私たちを守ってくださっているということ。それが分かっていたから、第一に礼拝をしたんですね。

それから次に、神殿を立て直すことを始めました。自分たちの町を立て直すよりも先に、神殿を立て直すんです。それくらい、神さまを信頼しているっていうことですよね。神さまが信じられないんだったら先に町を立て直さなくてははいけません。今度またいつ外国が攻めて来るか分かりませんから、町がちゃんと守られるように、しっかりと町を立て直さなくてははいけません。けれども、この人たちは神さまを信頼していたんですね。だから、先に神殿を立て直し

ました。

建物を建てる時には、まず最初に、地面を掘って、そこに土台を置くんですね。そうすると、建物がいつまでもしっかり建っているんです。人々は最初に、その工事をしました。その工事が終わると、みんなでお祝いをしました。その場所にいた人たちの気持ちは、どうだったと思いますか。大喜びです。けれども、たくさん集まった人の中には、泣いている人たちもいたんですね。どうして泣いていたのかというと、この人たちはみんなお年寄りでした。お年寄りなので、昔の神殿がどれくらい大きかったかを知っているんですね。それに比べて、今これから建てようとしている神殿は、ずっと小さい。そのことを悲しんだんです。

でもこの時、神さまのこういう言葉が与えられました。わたしは「この神殿を栄光で満たす」(ハガイ2:7)。「この新しい神殿の栄光は昔の神殿にまさる」(ハガイ2:9)。この小さな神殿は、神さまの栄光でいっぱいになるんですね。これはどういうことでしょうか。この神殿はずっと後になって大きな工事がなされて、最初の神殿よりもはるかに大きな神殿になりました。でもそれは、そのことを言っているのではありません。神殿が神さまの栄光でいっぱいになるというのは何のことを言っているのかというと、イエスさまのことです。これよりももっと後の時代になって、イエスさまは、この時に作りはじめたこの神殿に入ってこられたんです。神殿というのは大きさの問題ではありません。そこに神さまが本当にいてくださるかどうかなんです。そして、私たちのこの教会にも、神さまは確かにいてくださっています。ですから、この教会も神さまの栄光があふれているんですね。そしてその場所で、私たちは礼拝をします。神さまの栄光があふれている場所で、他の誰よりも信頼できる神さまに会うんです。これからも、礼拝を大事にしていきましょう。神さまはここにられます。

(尾崎 純)

---

#### 《今週の暗唱聖句》

この新しい神殿の栄光は昔の神殿にまさると／万軍の主は言われる。この場所にわたしは平和を与える」と／万軍の主は言われる。(ハガイ書2章9節)

9月9日

【幼稚科】

## 帰還と再建

### 〈ねらい〉

礼拝をすることができること、礼拝の場所を持つことができることが大きな恵みであることを知る。

### 〈展開例〉

おはようございます。

みんなが今分級をしているのは、なんて名前のところでしょう？ 知ってますよね ○○教会です。教会の建物のことを「教会堂」って言います。この教会堂は、みなさんが生まれた頃に新しくできました。その前は古い古い教会堂だったんですよ。写真を見たことがあるかな？

教会堂を建てている間、大人の礼拝も子どもの礼拝も、場所を借りて狭いところでやってたんですよ。こんなに素敵な礼拝の場所があるのはとっても嬉しいことです

ね。神さまが私たちに礼拝をする教会堂をくださったことを感謝しましょうね。

### 〈お祈り〉

神さま。今日も教会学校に来ることができてありがとうございます。私たちが礼拝をすることができるように、私たちに教会堂を与えてくださってありがとうございます。私たちが教会堂を大切にきれいに使うことができるようにしてください。アーメン

### 〈やってみよう〉

自分たちの「夢の教会堂」の絵を描いてみよう。子どもたちが楽しく遊べる教会堂を自由に描こう。ブロックや積み木があれば立体で作っても面白いです。

9月9日

【小学科上級・中学科】

## 帰還と再建

### 1. エズラ3：1～7を読みましょう。

①イスラエルの民は、どこに集まりましたか？

②1節「一人の人のようになった」とは、どのような様子のことですか？

③集まった人々は、何をしましたか？

④何のとおり（何に従って）、献げ物をしましたか？

### 2. エズラ3：8～13を読みましょう。

①神殿の基礎が据えられて、祭司やレビ人は何をしましたか？民はどんな反応をしましたか？

②イスラエルの人々は、どんな気持ちで神様に礼拝をささげたと思いますか？あなたは、どんな気持ちで礼拝をささげていますか？

9月16日 ネヘミヤ書8章1～12節

【解説と黙想】

## 律法の朗読

バビロン捕囚が終わってイスラエルの民はエルサレムに帰還し神殿と城壁を再建した。ハード面が再建されたところで、イスラエルの第七の月の一日、律法の書(今でいう創世記から申命記まで)の朗読をイスラエル全体で聞く行事が行われた。この行事が、「一般の民の発意によるものであることは注目してよい」(『旧約聖書14』(岩波書店)村岡崇光による脚注。以下「村岡」と略記)。会衆の中には「男も女も、聞いて理解することのできる年齢に達した者は皆いた」(2)旧約時代の宗教行事において男女が場を同じくするのは異例である。また「聞いて理解することのできる年齢に達した者」は『男女』の後に続いているところからして、年少者、外国人改宗者などを指すのであろう。ネヘミヤ10:29をも参照(村岡)。これら多種多様な人々が「広場に集まって一人の人のようになった」(1)。バビロン捕囚の苦難を契機に悔い改めて主なる神へと立ち返る中で、「神の前に皆平等」という新約的な人間理解に接近している。エズラは、夜明けから正午まで律法の書を読み上げ続け、民は皆、立ち上がって聞くことで律法への敬意を表し、主を礼拝した。(6)もっとも当時の会衆の中には、バビロンで過ごした期間が長く、律法のヘブライ語を十分に解さない者もあった。そこでレビ人が律法を(おそらくアラ

ム語に)翻訳し、意味を明らかにしながら読み上げていった。それにより民は、罪の指摘も含め律法を理解し、涙した。

これを見たネヘミヤ、エズラ、レビ人は、泣くのをやめ、主を喜び祝うよう勧めた。(10)。イスラエルの第七の月の一日は、レビ23:24では喜びの角笛を吹き鳴らして記念する「聖なる集会の日」と定められていた。次いで第七の月の十五日から出エジプトを祝う「仮庵祭」が続く。そうした時期にふさわしいのは全体で主を喜び祝うことであった(10)。主なる神は人々に、主を喜び、そこで力づけられ生きることこそ望まれる。出エジプトも捕囚からの解放もそのために主がなされた。律法における罪の指摘も、人々が滅びから遠ざかり主にある命に生きるためにこそなされる。

これ以後、ユダヤ教ではイスラエル暦第七の月に新年が祝われるようになったという(村岡)。それまでは出エジプトが起こった時期を年の始めとしていた(出エジプト12章参照)。それを改めたということは、バビロン捕囚からの帰還が出エジプトに匹敵する大きな出来事、イスラエルの再出発の時と意識したことを示す。そしてその第一歩を、神の言葉に聞くことから始めることこそ肝心であると判断し、イスラエルの民は律法の朗読を求めたのである。

(吉田 崇)

《参照箇所》 出エジプト記12:1～28、レビ記23:24以下、ネヘミヤ10:28

《教理問答》 子どもと親のカテキズム問46、4

9月16日 ネヘミヤ書8章1～12節

【説教展開例】

## 律法の朗読

◇..... 単元のねらい .....◇

バビロン捕囚から帰ってきたイスラエルの民は、再スタートを切るにあたり神の言葉・律法の書の朗読を聞く時を持ち、神さまを礼拝した。キリスト教会は週の始めの日曜日に礼拝で神の言葉を聞くことによりこの精神を継承、発展させている。主を喜ぶことで私たちが力を得る時として礼拝で神の言葉に聞くことから始まる信仰生活を大切にしよう。

### 「主を喜び、カづけられ」

1週間の始め、日曜日に教会に来て神さまを礼拝してくれることを、先生はうれしく思います。神さまへの礼拝から生活を始める、ということは、神さまを第一にすることの現れとして、神さまは喜んでくださいます。

神さまの言葉に聞き、神さまを礼拝することから始めることについて、旧約聖書に興味深い出来事が書かれています。先ほど読んだ、ネヘミヤ記8章に書かれている出来事です。イスラエルの人々は一時バビロン捕囚で苦しい目にあったのですが、神さまによって帰ってくることができました。人々はエズラさんの指揮のもと神殿を再建し、ネヘミヤさんの指導によってエルサレムの城壁を再建しました。イスラエルが再スタートを切る環境が整ったところで、人々がエズラさんに頼みました「主なる神さまがイスラエルにお与えくださったモーセの律法の書を、私たちに読み聞かせてください」。モーセの律法の書とは、今の聖書でいうと創世記から申命記にあたります。この神さまの言葉を、イスラエルみなで聞くことから再スタートを切りたい、と人々は求めたのです。

イスラエルの第七の月の一日、言葉を聞いて理解できる人は皆、男の人も女の人も、イスラエル人もそうでない人も、夜明けごろ広場に集まりました。ネヘミヤ記は「一人の人のようになった」とその様子を伝えています。そこにエズラさんが律法の書を持って現れました。そして創世記の始めから朗読を始めました。エズラさんの朗読はお昼12時、正午まで続きました。

ただ律法の書はイスラエルの古い言葉で書かれ、当時の人々が普段使っていた言葉とは違っていたので、人々の多くは、朗読を聞いただけでは律法の書が何を言っているかを理解できませんでした。そこで神さまを礼拝する神殿で働いていたレビ人が律法の書を通訳し、意味を解説していきました。解説を聞いた人々は、神さまが人間に何を願っておられるのか、何を喜び、どんな事を悲しまれるのか書かれていることを理解しました。すると、神さまが願っておられたことに自分たちは従うことができず、神さまを悲しませてしまっていたことを人々は知り、涙を流したのです。

それを見たエズラさん、ネヘミヤさん、レビ人たちは、人々に呼びかけました「今

日、第七の月の一日は主にささげられた聖なる日です。泣かないでください。良い肉を食べ、甘い飲み物を飲んで祝いましょう。用意できない人には皆さんから分けてあげましょう。悲しむことはありません。主を喜び祝うことこそ、あなたたちの力の源なのです」。

イスラエルで第七の月の一日が聖なる日となっていたのは、出エジプトの出来事を記念することと関係がありました。エジプトで奴隷とされていたイスラエルを神さまは助け出してくださり、イスラエルの人々はとても喜びました。これを忘れないようにするための「仮庵祭」という祭りも第七の月に定められていました。モーセの律法の書が伝えたいのは、人は罪を犯して神さまを悲しませてしまうけれども、神さまは罪を赦し、憐れみを注いでもう一度立ち上がらせてくださる、ということです。この神さまと共に生きていけるのだ、と知ると

き、私たちに喜びが生まれ力づけられるのです。

神さまは今、私たちを神の民として教会に集めてくださいます。そこで毎週ははじめの日曜日に礼拝をし、神さまのみ言葉を聞くように定めておられます。神さまのみ言葉である聖書は、一度朗読を聞くだけではわかりにくい箇所もあります。そこで説教という形で神さまのみ言葉の意味をやさしく解説するようにしています。神さまのみ言葉の意味が本当に分かった時、私たちも主なる神さまを喜び、神さまから力をいただいで生きていくことができます。

私たちは神さまからのみ言葉に聞き続ける時にこそ、天の父なる神さまを見失わないで神さまの子どもとして元気に生きていくことができるのです。これからも、教会の礼拝、神さまのみ言葉に聞くときを大切にしていきましょう。 (吉田 崇)

---

#### 《今週の暗唱聖句》

今日は、われらの主にささげられた聖なる日だ。悲しんではならない。主を喜び祝うことこそ、あなたたちの力の源である。(ネヘミヤ書8章10節後半)

9月16日

【幼稚科】

## 律法の朗読

### 〈ねらい〉

礼拝で聖書の朗読を聞くことが素晴らしい喜びだということを知る。

### 〈展開例〉

おはようございます。

今日もみなさん、礼拝に出ることができました。よかったですね。

一つ質問をします。礼拝ではみんな何をしますか？ 賛美歌を歌いますね。お祈りをしますね。献金もしますね。聖書のお話も聞きますね。

聖書を読むのはどうかな？ ちょっと難しい言葉があるからよくわからないかもしれませぬ。でも読んだ聖書の話、先生がお話ししてくださるから、よくわかりますよね。聖書の話が分かったととても嬉しいのは子どもも大人も一緒です。さっき聞い

た聖書のお話でもそうでしたね、みんな聖書を読むのを聞いて、お話を聞いて、喜んでみんなでお祝いしましたね。教会では聖書のお話を聞いてみんな喜びます。みんなもたくさん聖書のお話を聞きましょう。

### 〈お祈り〉

神さま。今日も教会学校に来ることができてありがとうございます。今日も聖書のお話を聞きました。聖書のお話がよくわかるようにしてください。アーメン

### 〈やってみよう〉

巻末の『暗唱聖句カード』をちょっと厚手の紙にコピーし、切り離して配りましょう。文字を読めない小さな子は、先生の読むのに続いて、読んでみましょう。

イラストに色づけしても楽しいです。

9月16日

【小学科上級・中学科】

## 律法の朗読

1. ネヘミヤ8：1～6を読みましょう。

①イスラエルの人々は、エズラに何を求めましたか？

②広場にはだれが集まっていたか？

③エズラが書を開いた時、民はなぜ立ち上がったのですか？ 座ったまま聞くのと、何が違うでしょうか。

2. エズラ8：7～12を読みましょう。

①レビ人たちは、どんな役割をしましたか？

②ネヘミヤとエズラが、民に言ったことは何でしたか？

③民は帰って、なぜ食べたり飲んだりして喜び祝ったのですか？

④私たちにとって主の日の礼拝でみ言葉を聞くことは、どんな意味がありますか？ また、礼拝の後一緒に食事をするのは、どうですか？

9月23日 エステル記2章5～23節

【解説と黙想】

## 誠実に仕える

### I. エステル記の時代

本書に登場するクセルクセス王は、口語訳聖書などでは、ヘブライ語に近い「アハシュエロス」と表記されていましたが、新共同訳聖書ではギリシア語の発音に近い「クセルクセス」と呼ばれています。彼はユダを捕囚から解放した（紀元前537年）キュロス王（歴代誌下36：23他）から四代目にあたり、ダレイオス王（エズラ5：6他）の息子、アルタクセルクセス王（エズラ7：1他）の父親です。

従って、エステル記は、エズラ記、ネヘミヤ記と同時代、捕囚解放から五十年ほど後、ペルシャに残ったユダヤ人社会を襲った出来事の記録であることがわかります。エステル記の記事がどこまで歴史的事実に基づいているかについては、種々の意見があります。クセルクセス王の名前以外の内容は、聖書外の資料では確認できません。

しかしこの時代以降、ユダヤ人たちが「プリム祭」という祭を祝うようになったことは事実です。プリム祭は今日でも2月の末から3月にかけて祝われております。ちなみに2018年は3月1日、2019年は3月21日がその日にあたります。

### II. モルデカイ達の立場

モルデカイの名はバビロンの主神マルドゥク、エステルは女神イシュタルに関連した名と考えられています。ダニエルたちもバビロンにおいて現地語の名を与えられました（ダニエル1：7）。異国の社会で生活する中で、その地の習慣を受け入れざるを得なかったと思われます。エステルが「自分の属する民族と親元を明かさなかった」（2：10、20）と繰り返し強調されているのも、そのようなペルシャにおけるユダヤ人の弱い立場を反映したものであると言えるでしょう。

### III. 隠れた神の誠実さ

そのような中で、なお生ける真の神さまの守りと導きを信じて誠実に生きる人々の姿を記すのがエステル記です。エステル記には「神」「主」と言った単語が出てきませんが、それは逆に隠れたところで働かれる神さまの働きを教えると見る事ができます。

エステル記前半部においてモルデカイは、常に誠実かつ慎重に、主の前で正しい道を選び取ろうとしています。華々しい活躍をするばかりが証しではありません。それぞれの生活を主のみ前にきちんと過ごすことが大切です。（長田詠喜）

---

《参照箇所》 歴代誌上3：16（歴代誌下36：8と比較）

《教理問答》 ウェストミンスター小教理問答問3、39

「子どもと親のカテキズム」問4、5

9月23日 エステル記2章5～23節

【説教展開例】

## 誠実に仕える

◇..... 単元のねらい .....◇

エステル記全体の序章となる部分である。次回のエピソードに向けてエステルとモルデカイの置かれた状況を説明するとともに、この箇所語るメッセージとして、信仰者がいかなる状況においても、神と人への誠実さに生き、また慎重に自身の信仰を守るべきかを伝える。

### 「神と人に仕えたモルデカイ」

#### ・モルデカイとエステル

むかしむかし、今から二千五百年くらい昔、ペルシアの国にモルデカイという名前のおじさんと、エステルというとても素敵な娘がいました。エステルは本当のお父さんとお母さんが亡くなってしまいましたので、いどこになるモルデカイさんの娘として、一緒に暮らしていました。

モルデカイさんたちは、聖書の神さまを信じていたユダヤ人でした。ユダヤ人はむかしエルサレムに住んでいました。けれども、神さまのおっしゃることを聞かないで、自分勝手なことをしておりましたので、神さまはユダヤ人をお叱りになり、国を滅ぼして、遠くバビロンの地へと連れて行かれるようにされたのでした。ユダヤの人たちはバビロンの地で反省し、もう一度神さまに従うようになりました。神さまは失敗したり間違ったりした人でも、きちんと反省して謝る人のことは必ず赦してくださいませ。ユダヤの人々も神さまに赦していただき、もともと住んでいたユダヤのエルサレムに戻って、神さまを礼拝する神殿をもう一度作ることになりました。そのお話はもうすでにこの前（9月9日分）いたしましたね。けれども、いろいろな理由でエルサ

レムに帰らなかった人たちもいました。モルデカイとエステルもそんな人たちの中の一人です。国はもう新しいペルシアの国に変わっています。王さまも次々と変わりました。クセルクセスという名前の王さまが国を治めておりました。

#### ・エステルの秘密

ところがある日、王さまが新しい王妃さまを探しているという知らせが伝えられました。前の王妃さまは王さまに逆らったので、王さまは王さまに逆らわないもつと賢くて素晴らしい王妃さまを探すことにしたのです。国中の沢山の女の人たちが、王宮に集められることになりました。エステルもその中の一人でした。エステルはとても賢く素敵な女性でしたので、お世話をする人たちはすぐにエステルのことが大好きになりました。けれども、エステルには一つ秘密にしなければならないことがありました。それは、自分がユダヤ人だということでした。モルデカイはエステルに、自分がユダヤの民族であることを話してはいけないと教えていました。ユダヤ人だとわかるといじめられてしまうかもしれないからです。エステルは自分の家族のことや民

族のことを黙っていましたので、誰もそれを知りませんでした。

だったら、神さまを信じるのをやめて、ユダヤ人をやめてしまえばいいじゃないかと思うかもしれませんが、ユダヤの人たちは国が無くなってから、どんなに苦しくても、むしろ苦しくて大変だからこそ神さまをきちんと信じて、神さまの言葉を守ることが大切なんだということを知っていました。じゃあ、他の人たちと一緒にユダヤの国に帰れば良いじゃないかと思うかもしれませんが、理由はわかりませんが、モルデカイさんたちはどうしてもユダヤに戻らずに、ペルシャの国に住まなければならない理由があったようです。モルデカイさんたちは自分たちの住んでいるところ、自分たちがすべき場所で、きちんと神さまを信じて生きることに決心していたのです。

### ・「誠実」に生きる

私たちは大人の人はもちろん、皆さんのような子どもたちでも、やらなければならないこと、守らなければならないことがあるでしょう。なかにはめんどろだったりやりたくないこともあるかもしれませんが、けれどもモルデカイさんたちはそんなことも誠実に務めました。「誠実」というのは低学年の人ではちょっと難しい言葉かもしれませんが、約束を守って、相手のことも思いやって、自分ができることを一生懸命やる

ようにすることです。神さまを信じる私たちは、そんな誠実であるように決心します。なぜなら、イエスさまが私たちに対して、とても誠実でいてくださったからです。

神さまは神さまを信じる人たちを救ってくださると約束してくださいました。間違ったことをしても神さまに謝るならば、きちんと許してくださると約束してくださいました。私たちが愛してくださると約束しましたので、私たちが神さまの言うことを聞けなかった時も私たちのお祈りを聞いてくださいました。それはみんな神さまが私たちに対して「誠実」だったということです。私たちは、この神さまの誠実さをたくさんいただいたのですから、私たちが神さまに、他の人たちに、誠実であるようにと決心するのです。

今日の最後のところ、モルデカイさんはある時、王さまを殺してしまおうという悪巧みをしている人の相談を聞いてしまいました。その時もきちんと報告して、悪い人たちが捕まるようにしました。どんな時でもどんな人たちにも親切にし、正しいことをする。そんなモルデカイさんとその教えを守るエステルさんですから、神さまはますますこの二人を守り、助けてくださるので、来週、この二人をさらに大きな事件が襲いますけれど、その話も楽しみにしてください。(長田詠喜)

---

### 《今週の暗唱聖句》

これに対して、霊の結ぶ実とは愛であり、喜び、平和、寛容、親切、善意、誠実、柔和、節制です。これらを禁じる掟はありません。(ガラテヤの信徒への手紙5章22, 23節)

9月23日

【幼稚科】

## 誠実に仕える

### 〈ねらい〉

神さまを愛し、隣人を愛する生活を意識する。

### 〈展開例〉

おはようございます。

今日のお話には、王妃様になる女の子が出てきました。覚えてますか？ エステルさんという人です。

エステルさんにはおじさんが一人いました。モルデカイさんという人です。モルデカイさんはとても優しい人で、他の人に親切な人でした。それから、嘘をつかない人でした。エステルさんもモルデカイさんに育てられて、優しい親切な嘘をつかない女の人でした。だから、みんながモルデカイさんやエステルさんのことをすぐに大好きになりました。

神さまは優しくて親切で嘘をつかないお方です。だから神さまを信じるモルデカイさんやエステルさんも、優しくて親切で嘘をつかない人になったんですね。

みんなも、人に優しくできるようにしていただきましょう。

### 〈お祈り〉

神さま。今日も教会学校に来ることができてありがとうございました。私たちが兄弟や友だちやみんなに優しく親切にできるようにしてください。アーメン

### 〈やってみよう〉

画用紙にお母さんの顔を描いて、家に帰って「おやくそく」を相談して書いてみましょう。一週間がんばって守れるかな？

9月23日

【小学科上級・中学科】

## 誠実に仕える

1. エステル2：5～14を読みましょう。

①ユダヤ人のモルデカイたちは、なぜスサにいたのですか？

②エステルは、どんな人でしたか？

③なぜ、モルデカイはエステルに、ユダヤ人であることを黙っているように言ったのですか？ 何を心配していたのでしょうか？

2. エステル2：15～23を読みましょう。

①エステルが王妃になった後、エステルとモルデカイの関係はどうなりましたか？

②モルデカイは、どんなことをエステルに知らせましたか？ エステルはどうしましたか？

③モルデカイやエステルは、誰に従っていたのですか？ 二人にこのような役目を与えたのは誰ですか？

9月30日 エステル記4章1～17節

【解説と黙想】

## エステルの覚悟

### 1. はじめに

エステル記はユダヤ人にはプリムの祭りの起源を教える書物です(9:22)。しかしユダヤ人でない私たちにも関係のない書物ではありません。バビロン捕囚で故郷を離れたユダヤ人が異邦人たちに囲まれて、完全な少数者として暮らす中、信仰者としていかに神に守られ生き延びたかを教えるからです。日本人のキリスト者も社会の中で少数であることは同じです。

この書物は男性・女性にかかわらず、ただ生きた神を証する者であるから迫害されることがあるという歴史を教えます。しかしエステル記は最終的で決定的なことを語っています。それは、人は神の民を絶滅させることはできないということです。

### 2. 三つのタイプの人物

第一はモルデガイです。彼は堅実、信仰深く、健全で、神を第一とする者でした。第二はハマンです。ハマンの悪はモルデガイの人柄と真逆のように見えます。ハマンは傲慢で虚栄に満ちた人物です。モルデガイひとりを見下すだけでなく、ユダヤ人を絶滅させようと計画を練りました。そして第三はエステルです。彼女はモルデガイの養女として育てられ、王宮に召されました。そして時満ちて、王のハレムの影から呼び出され、彼女にしかできない仕事を任せられました。

### 3. モルデガイの悲嘆

モルデガイは信仰のゆえに人間ハマンを拜むことを拒否しました。そのように信仰の節操を守った。しかし神への忠実さが、ハマンの憎しみを生み、さらにユダヤ人絶滅という民族全体の不幸の引き金になりました。モルデガイは衣を裂き、粗布を着て灰をかぶり悲嘆を表します(1節)。モルデガイの噂が王宮にいたエステルに届き、

エステルとの対話が始まります。モルデガイはエステルにユダヤ人全体におよんだ危機を正確に伝えます。それはユダヤ人が絶滅され、虐殺費用も準備が約束されているというものでした(銀貨1万キカル3:9、これはペルシアの歳入の3分の2ほど。ハマンの憎しみを表す)。

モルデガイは王妃エステルにペルシア王クセルクセスに絶滅取り消しの歎願に行くように願います(8節)。しかしたとえ王妃でも王の前に出るには恐れがありました。呼び出されることなく王の前に出ることは、掟破りであり、死が覚悟されるからです。さらに王は気まぐれ屋で有名でした。そして現在、三十日も王から呼び出しがありません。

### 4. エステルの覚悟

ためらうエステルにモルデガイは言いました「この時にあたってあなたが口を閉ざしているなら、ユダヤ人の解放と救済は他のところから起こり、あなた自身と父の家は滅ぼされるにちがいない。この時のためにこそ、あなたは王妃の位にまで達したのではないか」(14節)。

エステル記は神の名が出てこないことで有名です。この14節にも「他のところ」とあるだけです。神の名が異邦人によって冒瀆されない配慮だと言われますが正確な理由はよく分かりません。しかし神の名がないことはかえって、人には見えない神の御手が厳しい現実を超えすべて導いてくださることへの信頼を示します。

エステルと町のユダヤ人たちは三日三晩断食します。華やかな宴会に満ちたペルシア王宮と祈り断食する神の民の姿が対照的です。そしてエステルは定めに反して王に面会を求め踏み出すのです。(西堀 元)

《参照箇所》 フィリピ4章6,7節、ローマ8章28節

《教理問答》 「子どもと親のカテキズム」問15

9月30日 エステル記4章1～17節

【説教展開例】

## エステルの覚悟

◇..... 単元のねらい .....◇

世界と歴史を支配される神が私を大切な働きに用いられる。その時、神を信じゆだね一歩を踏み出すために、祈ることの大切さを覚えたい。

### 「あなたはこの時のために」

神さまを信じるモルデカイというおじさんがいました。モルデカイさんはペルシアという国に住んでいました。今から二千数百年前のことです。その国では本当の神さまを信じる人はわずかでしたが、それでもモルデカイさんは神さまを信じてまっすぐに生きていました。モルデカイさんは僕たちと似ています。本当にたくさんの人たちがいる中で、ほんのちょっとだけ本当の神さまを信じる人。モルデカイさんも僕たちと同じようにちょっと変わっていると思われたでしょう。

ある日、このモルデカイさんが気に入らない人が現れました。それはペルシア王さまに仕える中で一番偉いハマンという大臣です。町の人々はハマン大臣が道を通る時は、ハハーっと言って必ず深々とお辞儀をしていました。それはみんながハマン大臣を素晴らしいと思うからではなくて、お辞儀をしないと捕まえられて牢屋に入れられ、ひどい目に合うからです。ハマンは誰でも自分の言うなりになるので、自分はまるで神さまになったように思っていました。

でもそんな中、ひとりだけハマンにお辞儀をしないひとがいたのです。それがモルデカイおじさんです。モルデカイさんは本当の神さま以外のものは、決して拝まないと心にかたく決めていたからです。

僕たちも、毎週教会学校に行っていることを友だちに話すとちょっと変わってるなと思われることと似ています。テレビゲームもない教会がどうして楽しいのか説明しにくいですね。モルデカイさんは教会に行っているというだけで、お友達からいじ

められたという風に言い換えることができると思います。本当の神さまを信じる人のことを、それだけで気に入らない人が残念ですがいるのです。

ハマンは自分にお辞儀を一人だけしないモルデカイを見て頭に血がカッとのぼりました。あまりに頭にきて眠れなかったかもしれせん。そしてついに悪いことを考え付きました。王さまにうまくたのんで、モルデカイだけでなく、モルデカイの民族、ユダヤ人を皆殺しにする。それには王さまにこういえばいい、「王さまに従わないユダヤ人たちをどう思いますか。ほっておいてはいけません。わたしは王さまに従わない彼らをやっつける準備をします。そのためにお金も用意しました。王さまどうぞ、この命令書にサインをしてください」と。ハマンはユダヤ人をやっつけるための兵隊にあげる沢山の給料を準備しました。かかったお金はあとでユダヤ人の家から奪えば元が取れるとひそかに計算しました。

さて、王さまはハマン大臣の言うことが、とてもよいことのように思えました。そこでハマンの言うとおりの法律を全国に出しました。そのことを知った国中のユダヤ人は大慌てです。本当に悲しくて着ている服を破ったり、頭から灰をかぶって悲しみを表しました。ユダヤ人はみんな町の中をおろおろしています。モルデカイさんはどうだったでしょう。モルデカイも服を破り、頭から灰をかぶりしました。自分がハマン大臣を拝まなかったことで、ユダヤ人ぜんぶが殺されてしまうということに責任を感じてとてもつらかったと思います。

モルデカイさんはとても大変でしたが、でもあきらめてはいませんでした。とっておきの方法を思いついたのです。モルデカイさんには自分の娘として育てた美しいとこの娘エステルがいました。そのエステルは今、不思議な導きでペルシア王さまと結婚して、王さまの宮殿に住んでいたのです。モルデカイさんはエステルに頼んで王さまのところに行ってユダヤ人を皆殺しにする法律を取り消してもらうようお願いすればいいと思いついたのです。

そうこうする中、悲しむモルデカイさんのことを聞きつけ、エステルのところから召使がやって来て理由を尋ねました。モルデカイはユダヤ人を皆殺しにするハマンの計画と自分がさきほど思いついたことをエステルに伝えるように召使に伝言をたのみました。召使は走って宮殿に戻ります。しばらくして召使は帰って来て、エステルのでんごころをモルデカイさんに持ってきました。こうありました。「モルデカイおじさんへ。王さまはとっても力があって、自分で決めたことは変えることはありません。それに王さまのところ自分のほうから出ていく人はみんな死刑にされると、法律で決まっていますのです。ただし王さまが金の笏を出してゆるしてくれた場合だけ命が助かるのです。わたしはこれで一月近く王さまから呼び出されることがないのです。エステルより」。

モルデカイおじさんはエステルのお言葉を聞いて、もう一度召使に伝言を頼みました「エステルへ。自分もユダヤ人であることを忘れるな。自分だけは宮殿にいるから大丈夫だなんて思っはダメだ。あなたは王さまのお嫁さんにされた。これはきつとこの時のためなんだ。モルデカイおじさんより」。エステルが王さまのところに行くかどうかで、多くの人の命がどうなるかが決まってしまう。でも王さまのところ勝手にいくと自分の命が危なくなることも確かです。エステルはどうすればよいか、とても悩んでお腹が痛くなったかもしれま

せん。

先生は熊本地震のとき、エステルさんと少しだけ似た経験をしました。とても大きな地震でしたが、地震のことを聞いた全国の教会のみんなが心配して沢山のパンやごはんそして紙おむつとかが教会の会堂いっぱいになるほど届きました。こんな沢山の荷物をどうしたらいいだろうと悩みました。もういいやと寝転がって、何もしないということもできました。でもお祈りする中で、全国から届いたパンやごはんを教会の近くの人に届けることが自分の仕事だと神さまが教えてくれました。自分一人ではとても配れないと思っていたら、届けるための仲間も神さまが教会に送っていただきました。

エステルはモルデカイおじさんと町のユダヤ人に自分と一緒に祈りをしてくれるようお願いをしました。三日三晩ご飯を食べないで、お水も飲まないで一緒にお祈りして欲しいと。そのようにして、それから、本当の神さまを信じる人たちが町中ひとつになって祈りをしました。

僕たちはとても大切なことを決めなければいけなくなる時があります。エステルのように自分がどう決めるかで、多くの人はどうなるか決まってしまう時があるのです。そんなとき自分に頼まれたお仕事の大きさにつぶれそうになる。こころがくじけそうになってしまう。そんな時、僕たちはどうしたらよいのでしょうか。

それはとても大切な時です。ひとりで抱え込まないで教会のお友達、教会学校の先生、みんなの教会の牧師先生に正直にこころの思いをお話ししてください。そしてみんなで一緒にお祈りをしましょう。一緒に祈る中で、こころが静かになり、どうしたらよいか神さまがきつと教えてくださいます。エステルさんもみんなでお祈りすることで、王さまの前に出ていく一歩を踏み出す勇気が与えられました。祈って決めることに後悔はありません。(西堀 元)

《今週の暗唱聖句》

どんなことでも、思い煩うのはやめなさい。何事につけ、感謝を込めて祈りと願いをささげ、求めているものを神に打ち明けなさい。(フィリピの信徒への手紙4章6節)

9月30日

【幼稚科】

## エステル覚悟

### 〈ねらい〉

自分がやるべきことを勇気を持って行う事を覚える。

### 〈展開例〉

おはようございます。

エステルさんは、王様のお妃でした。でも、お妃様でも、いつでも王様に会えるわけではありませんでした。王様が「お妃様に会おう」と言わなければお会いできないんですよ。大変ですね。もし、勝手に王様に会いに行ったら、ひどく叱られてしまいます。でも、エステルさんは、どうしても王様に会わなければいけません。エステルさんや、モルデカイさん、他のみんなの命を助けるためには、エステルさんが勇気を出して王様にお願いしなければならなかったんです。

エステルさんは頑張りました。勇気を出して王様のところに行きました。王様はエステルさんの話を聞いてくれました。そしてエステルさんたちを助けてくださったんです。

みんなも勇気を出して、神さまにお願いすれば、神さまは必ず聞いてくださいますよ。

### 〈お祈り〉

天のお父さま。今日も教会学校に来ることができてありがとうございます。いつも私たちのお祈りを聞いてくださってありがとうございます。また私たちに神さまにお願いする勇気をください。アーメン

### 〈やってみよう〉

「王様とエステルゲーム」

王様役（最初は先生）は笏（棒状のもの、飾りがあればなお良い）を持って正面に立ちます。子どもたちは少し離れたところで先生に向き合って横一列に並びます。

王様「そこにいるのは誰だ」

子どもたち「〇〇です」

王様は笏を「あげる」か「あげるフリ」をする。

子どもたちは「立ったまま」か「その場でしゃがむ」

笏をあげたタイミングで立っていた子どもは、一歩前に。笏を下ろした時に立ってしまった子どもは一歩下がる。座ることができた子どもはそのまま。

一番早く王様のところまで行けた子どもが一番。

9月30日

【小学科上級・中学科】

## エステル の 覚 悟

### 1. エステル4：1～3を読みましょう。

①なぜモルデカイ、ユダヤ人は、なげき悲しみましたか？（3章も読んでみましょう。）

### 2. エステル4：4～9を読みましょう。

①ハタクを通して、モルデカイがエステルに伝えたのはどんなことでしたか？

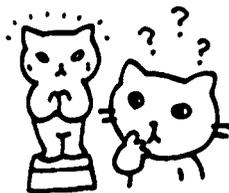
### 3. エステル4：10～17を読みましょう。

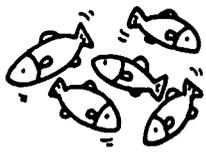
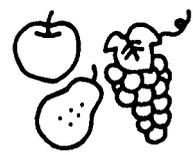
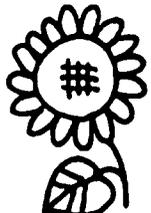
①モルデカイに頼まれたことをするのは、エステルにとって簡単なことでしたか？

②エステルはモルデカイに、自分のために何をしてほしいと頼みましたか？

③エステルは何のために、死ぬほどの覚悟をしたのですか？

④皆で心を合わせて祈ることには、どのような力がありますか？

<p><b>7月1日</b>          あなたがたの父が憐れみ深いように、あなたがたも憐れみ深い者となりなさい。          【ルカ6：36】</p> 	<p><b>7月8日</b>          御言葉を行う人になりなさい。自分を欺いて、聞くだけで終わる者になってはいけません。          【ヤコブ1：22】</p> 	<p><b>7月15日</b>          わたしの口から出るわたしの言葉もむなしくは、わたしのもとに戻らない。それはわたしの望むことを成し遂げ、わたしが与えた使命を必ず果たす。          【イザヤ55：11】</p> 
<p><b>7月22日</b>          死の陰の谷を行くときもわたしは災いを恐れない。あなたがわたしと共にいてくださる。          【詩編23：4】</p> 	<p><b>7月29日</b>          イエスは、わたしたちのために、命を捨ててくださいました。そのことによって、わたしたちは愛を知りました。          【1ヨハネ3：16】</p> 	<p><b>8月5日</b>          自分の家に帰りなさい。そして、神があなたになされたことをことごとく話して聞かせなさい。          【ルカ8：39】</p> 
<p><b>8月12日</b>          彼らは剣を打ち直して鋏とし、槍を打ち直して鎌とする。国は国に向かって剣を上げず、もはや戦うことを学ばない。          【イザヤ2：4】</p> 	<p><b>8月19日</b>          (キリストは) 人間の姿で現れ、へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした。このため、神はキリストを高く上げ、あらゆる名にまさる名をお与えになりました。          【フィリピ2：6-9】</p> 	<p><b>8月26日</b>          鋤に手をかけてから後ろを顧みる者は、神の国にふさわしくない。          【ルカ9：62】</p> 

<p><b>9月2日</b>  <small>しゅうかく おお はたら て すく</small>                  収穫は多いが、働き手が少ない。だから、収穫のために働き手をおく送ってくださるよう<small>しゅうかく しゅ ねが</small>に、収穫の主<small>しゅ</small>に願<small>ねが</small>いなさい。                  【マタイ9：37, 38】</p> 	<p><b>9月9日</b>  <small>あたら しんでん えいこう むかし</small>                  この新しい神殿<small>しんでん</small>の栄光<small>えいこう</small>は昔<small>むかし</small>の神殿<small>しんでん</small>にまさると万軍<small>ばんぐん</small>の主<small>しゅ</small>は言<small>い</small>われる。この場所<small>ばしょ</small>にわたしは<small>わたし</small>平和<small>へいわ</small>を与<small>あた</small>えようと万軍<small>ばんぐん</small>の主<small>しゅ</small>は言<small>い</small>われる。                  【ハガイ2：9】</p> 	<p><b>9月16日</b>  <small>しゅ よろこ いわ</small>                  主<small>しゅ</small>を喜び<small>よろこ</small>祝<small>いわ</small>うことこそ、あなたたちの力の源<small>ちから みなもと</small>である。                  【ネヘミヤ8：10】</p> 
<p><b>9月23日</b>  <small>れい むす み あい よろこ</small>                  霊<small>れい</small>の結<small>むす</small>ぶ実<small>み</small>は愛<small>あい</small>であり、喜<small>よろこ</small>び、  <small>へい わ かんよう しんせつ ぜん い せい</small>                  平和<small>へい</small>、寛容<small>かんよう</small>、親切<small>しんせつ</small>、善意<small>ぜんい</small>、誠<small>せい</small>  <small>じつ にゅうわ せつせい</small>                  実<small>じつ</small>、柔和<small>にゅうわ</small>、節制<small>せつせい</small>です。                  【ガラテヤ5：22, 23】</p> 	<p><b>9月30日</b>  <small>おち わづら</small>                  どんなことでも、思<small>おも</small>い煩<small>わづら</small>うのはやめなさい。<small>なにこと</small>何事<small>なにこと</small>につけ、  <small>かんしゃ こ いの ねが</small>                  感謝<small>かんしゃ</small>を込<small>こ</small>めて祈<small>いの</small>りと願<small>ねが</small>いをさ  <small>もと かも かみ</small>                  ぎ、求<small>もと</small>めているものを神<small>かみ</small>に  <small>う あ</small>                  打ち明<small>う</small>けなさい。                  【フィリピ4：6】</p> 	
		

## 2018年10～12月カリキュラム (第71号)

—救済史に基づく2年サイクル 第1年—

月日 教会暦・行事	主 題	聖書箇所	暗唱聖句
	単元の目標		
10月7日	ダニエルと友人たち	ダニエル1：1-21	1コリント10：31
	どんな境遇でも神さまを第一としよう。		
10月14日	ダニエルとライオン	ダニエル6：1-29	マタイ6：33
	本当に自由な人生とは神の御前に生きることだと知ろう。		
10月21日	世界の終わり	ダニエル12：1-13	マタイ24：13
	世界の終わりは隠されているが、神さまを信頼すれば恐れることはない。		
10月28日 宗教改革記念日	信仰義認	ローマ1：17	ローマ1：17
	宗教改革の原点である信仰義認をルターの体験を通して学ぼう。		
11月4日	アルファでありオメガ	黙示録1：1-20	イザヤ44：6
	礼拝は、始めであり終わりである方を御言葉によって知るところ。		
11月11日	白い衣を着て	黙示録7：1-17	マタイ5：4
	神さまを信じる子どもたちは最後に完全な救いと慰めをいただける。		
11月18日	天のエルサレム	黙示録21：9-22：5	黙示録22：3,4
	やがて再び来られる主を待ち望み、神の御顔を仰ぎ見ることを待ち望む者にされたい。		
11月25日	キリストの再臨	黙示録22：6-21	黙示録22：20
	救い主イエスさまを最後に目で見て喜ぶ希望がある。		
12月2日 アドベント	人の子が来る	ルカ21：25-36	黙示録22：20
	キリストの再臨を待ち望む、落ち着いた信仰生活を送ろう。		
12月9日	洗礼者ヨハネ	ルカ3：1-20	使徒言行録2：38
	人間とその救いについて、歴史の中で語る神を知ろう。		
12月16日	マリアの賛歌	ルカ1：39-55	ルカ1：47
	ただ御言葉に信頼し服従する信仰をマリアから学ぼう。		
12月23日 クリスマス	主の降誕	ルカ2：1-20	ルカ2：12
	世界の人々とともに、神さまを賛美し、神さまによる救いの恵みを分かち合いたい。		
12月30日	少年イエス	ルカ2：41-52	ルカ2：49
	契約の子の代表であるイエスの少年時代の幸いな姿から学ぼう。		

# 子どもと親のカテキズム

## 神さまと共に歩む道

日本キリスト改革派教会大会教育委員会

### 『子どもと親のカテキズム』の目指すもの ～「あとがき」より～

このカテキズムは、契約の子どもたちの信仰継承の前進、地域の子どもの伝道の進展、成人求道者の洗礼教育、現代を生きるキリスト者の信仰の確立を願って、作成されました。

どうか父なる神が、ご自分の子どもたちをこのカテキズムを用いて主イエス・キリストの福音の真理の内に養ってくださり、聖霊の交わりのうちに親子の信仰の対話を祝福して信仰を告白する喜びに導き、教会と世界に感謝をもって仕える民として成長させてくださいますように。

カテキズム作成のために多大な労苦を払われた前大会教育委員会小委員会の牧田吉和委員、三川栄二委員、相馬伸郎委員に感謝しつつ、今ここに『子どもと親のカテキズム』をお届けします。

2014年10月

日本キリスト改革派教会大会教育委員会



2014年10月15日発売

四六判・並製・64頁

ISBN978-4-7642-6454-0

販売価格 **400**円 (税込)

書店での販売価格は540円 (税込) ですが、大会教育委員会を通じての販売価格は400円 (税込) です。

申込先 E-mail [shintoko\\_ch\\_pastor@yahoo.co.jp](mailto:shintoko_ch_pastor@yahoo.co.jp) 長田詠喜

振込先 01620-8-39213 長田詠喜

※『子どもカテキズム』とは申込先が異なりますので、ご注意ください。

**教文館**

〒104-0061 東京都中央区銀座4-5-1 TEL03-3561-5549 FAX03-5250-5107  
HPをご利用ください。 <http://www.kyobunkwan.co.jp/publishing/> 【呈・図書目録】

大会教育委員会

# 「教会学校教案誌」

継続発行のための

## 50万円 自由募金のお願い

弊誌のためにお祈りとご購読をもってお支え下さいます事を、心から感謝するとともに御礼を申し上げます。

大会教育委員会の重要な使命と任務は、日本キリスト改革派教会独自の教案を作成することです。そのために委員会は、なにより「内容」を磨くことに全力を注いでおります。しかしそのためには、教案誌の「安定的発行」が不可欠です。

かつて執筆者には1000円の図書券を贈呈し、最低限の礼を尽くしてまいりました。現在は、何の御礼もさしあげていません。ひとえに誌代を維持したいからです。ギリギリの厳しい状況が続いています。自由募金に積極的にご参加ください。

教会だけではなく、個人としてのご協力をも伏してお願い致します。

*Soli Deo Gloria!*

※ 購読申し込みは、西堀 元（熊本伝道所：✉boribori89@gmail.com）

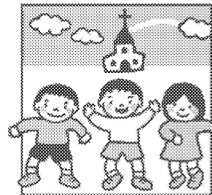
〒862-0924 熊本県熊本市中央区帯山2-13-74 ☎ファクス (096)382-7630

お問い合わせは、相馬伸郎（iwanoue@me.ccnw.ne.jp）まで。

目標金額 50万円

送金先 郵便振替 伊藤治郎

00890-2-148183



※振替通信欄に、「自由募金」とご明記くださいませ。

### 〈あとがき〉

●教会内には信仰を持つ教育者として証を立てている兄弟姉妹が多数おられます。その教育の現場で感じている時代の流れや今まで考えて来られたことを本誌で述べていただきたいと願いました。今回は新井ちぎり姉が寄稿してくださいました。神と教会に仕えつつキリストと共に愛をもって世に仕えて来られた同姉の姿勢に励まされます。

●誌面を飾るカットを描いてくださるイラストレーターを募集中です。応募される方は下記の牧野までお願いします。

(牧野信成)

●教会学校教案誌は、教会教育の教材を提供するメディアです。一年連載予定の「長老職」と「執事職」のテキストは、役員教育のための教材として用いて頂ければ幸いです。ちなみに執事職の原稿は毎月の定例執事会の学びの際に読んで頂くことを想定しています。輪読後、わずかでも議論して頂ければ、よき学びとなるのではないのでしょうか。

●名古屋岩の上教会では、今年に入ってから「説教クイズ」なるものを牧師がつくって礼拝式前に子どもたちに配っています。小学4年生から中学3年生までチャレンジしてくれます。私自身は分級を担当していませんから、さながら「交換日記」のように用いられる場合もあります。中学生たちがどのように説教を聴き、また信仰に向き合っているのか、とても教えられています。7回した人には「好きなラーメンを先生と食べに行こう」とエサを用意しましたが、達成後も続いています。(相馬伸郎)

●幼児科分級の執筆者確保にしばらく苦労しております。今号はやむを得ぬ事情から

編集部員による執筆となりました。「やはり幼児向けの賜物のある方にこそ執筆いただくべきだ」との思いを改めて強くしております。自薦でも他薦でも、ふさわしいと思われる方があれば編集部までお知らせくださいれば幸いです。(吉田 崇)

●私の奉仕する新所沢伝道所で50年にわたり教会学校を務めてくださった姉妹のインタビューをさせていただきました。単にかつての盛んな教会学校を懐かしむのではなく、今の教会学校に対する様々なチャレンジを感じました。十年後二十年後に目の前の子どもたちが教師になってくれたらと、今からワクワクします。(長田詠喜)

●熊本地震から二年が経ちました。一年が過ぎたときもでしたが、自分が生かされている恵み、皆さんからのご支援を思い感謝です。発送の担当をさせていただいています。ご遠慮なくどんどん申し込みください!(西堀 元)

◆教案誌購読受付と送付は担当者が熊本伝道所の西堀元教師に交代しました。お求めは下記までご連絡下さい。

熊本伝道所 西堀 元

〒862-0924 熊本市中央区帯山2-13-74

Tel & Fax : 096-382-7630

E-mail: boribori89@gmail.com

※バックナンバーを御希望の方は下記までご連絡ください。

長野佐久伝道所 牧野信成

〒385-0051

長野県佐久市中込3-9-1

Tel & Fax : 0267-62-2409

E-mail: rcjnaganosaku@gmail.com



## 執筆者一覧

- まえがき  
西堀 元 (熊本伝道所宣教教師)
- 巻頭説教  
川栄智章 (せんげん台教会牧師)
- 教室の窓から  
新井ちぎり (横浜中央教会)
- 教会学校訪問  
仙台カナン教会日曜学校教師会
- 神さまと共に歩む幸い  
朝岡 勝  
(日本基督同盟教団徳丸町教会牧師)
- 教会の一枝として  
小林 悠香 (名古屋岩の上教会)
- 執事職について (2)  
相馬 伸郎 (名古屋岩の上教会牧師)
- 長老職について (2)  
吉岡 契典 (板宿教会牧師)
- 聖書黙想・説教展開例  
赤石 純也 (伊丹教会牧師)  
赤石めぐみ (伊丹教会)  
吉田 崇 (坂出飯山教会牧師)
- 小澤 寿輔 (高知教会牧師)  
長田 詠喜 (新所沢伝道所宣教教師)  
坂尾連太郎 (南与力町教会牧師)  
弓矢 健児 (千里山教会牧師)  
袴田 清子 (灘教会)  
宮崎 契一 (西部中会休職教師)  
望月 信 (鈴蘭台教会牧師)  
尾崎 純 (光が丘教会牧師)  
西堀 元 (熊本伝道所宣教教師)
- 分級展開例  
吉田 崇 (坂出飯山教会牧師)  
西堀 元 (熊本伝道所宣教教師)  
長田 詠喜 (新所沢伝道所宣教教師)  
島野美佳子 (坂戸教会付属新潟伝道所)  
畑中 寿子 (田無教会)  
愛智 愛 (新座志木教会)
- イラスト作画  
表紙 中村未生 (春日井教会・IBUKI)  
高橋乃亜 (湘南恩寵教会・IBUKI)  
本文 岡野美佳 (青葉台キリスト教会)

## 編 集 部

- 相馬 伸郎 (長) 名古屋岩の上教会牧師・大会教育委員会  
吉田 崇 坂出飯山教会牧師・大会教育委員会  
牧野 信成 長野佐久伝道所宣教教師・大会教育委員会  
長田 詠喜 新所沢伝道所宣教教師・大会教育委員会  
西堀 元 熊本伝道所宣教教師・大会教育委員会

### 日本キリスト改革派 大会教育委員会『教会学校教案誌』 第70号

2018年7・8・9月号 (季刊)

2018年6月1日発行

発行 日本キリスト改革派教会 大会教育委員会  
発行所 日本キリスト改革派教会 大会教育委員会  
名古屋岩の上教会 牧師 相馬伸郎  
〒458-0021 愛知県名古屋市緑区滝の水2-2012  
Tel/Fax 052-895-6701

郵便振替口座 00890-2-148183 「伊藤治郎」  
編集・印刷 株式会社あるむ  
頒価 900円 (本体価格)

Reformed Church in Japan  
Board of Education

